

徳島の剣道

第14号



徳島県剣道連盟



第18回徳島県女子剣道大会
〈団体優勝〉

徳島女子剣友会

先鋒 木下 文子

中堅 竹内 佳代子

大将 手塚 千恵子



第21回徳島県剣道段別選手権大会各段優勝者

前列左より

〈女子の部〉 初段 伊藤 奈津子 (富岡東高)

二段 森 知世 (富岡東高)

三段以上 吉岡 久美子 (阿南支部)

〈男子の部〉 初段 大前 智仁 (富岡東高)

二段 蛭原 正基 (富岡東高)

三段 北村 顕吾 (鳴門教育大)

四段 山室 雅幹 (警察支部)

五段 茨木 基良 (警察支部)

六段 富浦 廣志 (海部支部)

* * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *
 * * * * *

〈表紙〉

題字

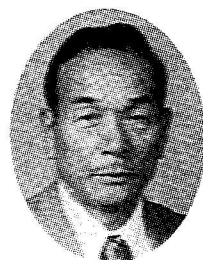
堀江 幸夫

さし絵

村嶋 恒徳

巻頭言

明石海峡大橋とともに



徳島県剣道連盟会長 遠藤 一美

明日の徳島を担う青少年の健全育成は、すべての県民の願いであると共に、県民全体の重大な責務であります。地域における剣道教室や学校での剣道部活動が、着実に展開され、青少年の健全育成が剣道関係の諸先生の御努力によってなされていることは、誠にうれしかぎりであります。

平成十年は、明石海峡大橋が開通し、徳島が大きく躍進する年であります。経済的効果ばかりではなく、徳島県における剣道を盛んにさせる契機にもしたいものです。剣道を盛んにするということについて、全剣連の武安義光会長は「剣窓（平成十年一月号）」の中で、多数の個人が剣道に親しみ、励むことを通じて、心身を鍛え、それぞれが活力あり生き甲斐のある人生を築くことを原点

とし、連盟などの各団体の役割は、各人の活動を助長し、気持ち良く、効率的に剣道に打ち込めるようにする基盤を担うことであるとされています。つまり、会員皆さまの剣道のレベルアップと実生活のさらなる充実のために、徳島県剣道連盟の発展があるということですので。

徳島県剣道連盟も会員皆さまと共に充実するよう努力していきたいと決意しております。また、徳島の剣道の発展のため、今後ともよろしく御指導・御鞭撻の程お願い申し上げます。

『徳島の剣道 第十四号』 目次

巻頭言	遠藤 一美	1	アメリカ派遣日本武道代表団に参加して	近藤 亘	35
特別寄稿			中四国学生リーダーゼミ堀江先生講演録	木原 資裕	38
恩師坂本吉郎先生を偲ぶ	福田 一男	4	徳島の剣道史		
東大剣道部雑感	坂本 功	7	阿波西部の丹石流剣術について	坂本 裕二	45
顕彰一覽		11	支部だより		
平成九年度徳島県高等学校剣道優秀選手名簿		13	板野西支部	金西 重記	52
平成九年度徳島県中学校剣道優秀選手名簿		14	各種大会に参加して		
良師に巡り逢へて	平尾 勝美	15	全国スポーツ少年団剣道交流大会	中山希実子	54
叙勲御報告	勝沼 信彦	18	全日本都道府県対抗剣道優勝大会	白木 洋一	56
最近感じること	堀金 實	20	四国四県剣道大会	高田 豊	58
底辺拡大について	大川 功	22	西日本勤労者大会	平野 誠司	62
思い出の一枚			全国家庭婦人剣道大会	北村 環	63
第四回四国四県剣道大会	堀江 幸夫	23	全国警察防犯大会	中山 繁輝	64
四十六年高校総体	大石 正志	24	四国高校選手権大会で個人優勝	一村美穂子	67
全国講習会報告			インターハイ 女子	畑山 尋美	69
平成九年度西日本剣道講習会に参加して	川田 武志	26	全国郵政武道大会に二連覇	木下 文江	69
西日本女子剣道講習会に参加して	名蔵 輝実	29	全国教職員剣道大会	福多 博史	70
社会体育指導員養成講習会	岡本 茂	30	四国教職員剣道大会	藤本 雅史	71
			全国少年錬成大会(道場連盟)	水上 玲子	74
			全国少年錬成大会(全剣連)	井上 崇希	75
			全日本女子剣道選手権大会	敷山 美紀	77
			全日本東西対抗	近藤 亘	78

国民体育大会 成年女子	手塚十三子	79
全日本居合道大会	坂本 憲二	81
全日本剣道選手権大会	福多 雅英	83
全国青年大会	岡崎 研吾	85
	森 幸子	86
全国警察剣道大会	近藤 亘	88
随 想		
韓国からの手紙	大澤 孝彰	90
スポーツの健康	馬原 文彦	91
術から道へ、道から芸へ	岡田 良人	94
もう空白は埋められない	高橋 和宗	98
新しい環境での生活	坪井さくら	100
社会人としての第一歩	前田 秀一	101
段 位 合 格 者		
七段に合格して	松村 和宏	103
	吉岡 修一	104
	芝原 功一	105
	柴田 宗忠	107
	富浦 廣志	108
六段に合格して	片山 尊史	109
	井村 雅人	111
	西宇 康治	112

平成九年度 称号・段位合格者一覧	藤井 利一	113
かんばろう徳島	萩田 奉弘	113
	近藤 康次	115
	鈴江 正雄	116
	阿部 金司	117
平成九年度 戦いの跡	白木 崇	124
徳島新聞にみる戦いの跡	白木 崇	124
昇段審査学科問題・解答例	白木 崇	124
平成九年度総会議事録要旨	白木 崇	124
役員一覧	白木 崇	124
徳島県剣道連盟事務分掌	白木 崇	124
平成十年度 徳島県剣道連盟行事予定表	白木 崇	124
平成十年度 審査実施計画表	白木 崇	124
徳島県剣道連盟審査資格・審査料等	白木 崇	124
編集後記	白木 崇	124
〈さし絵〉	白木 崇	124

村 嶋 恒 徳

特別寄稿

恩師坂本吉郎先生を偲ぶ

居合道範士九段 福田 一 男



ありし日の恩師坂本吉郎先生（右）と筆者

今から二十五、六年前になりますが、坂本吉郎先生（剣道範士、居合道九段）のお供をして小松島港に着きました。タラップを降りると笑顔で出迎えてくれた方がいました。堀江幸夫先生でした。この日が徳島と私の出会いでした。堀江先生は剣道を通じて坂本先生を實の父以上に敬慕し、徳島出身の先生に無双直伝英信流を伝承していただくために招かれたのです。出迎えの車で県武



第六回全日本居合道大会（昭和46年）団体第三位 前列左端が坂本先生、後列左より二人目が筆者



船中、坂本先生より指導を受ける筆者

道館に案内されました。地元からは三木只雄剣連会長（当時）、尾形郷一、山田新六郎他の高名な諸先生方も列席され、大澤孝彰先生の司会で坂本先生による古流英信流の講習会が行われました。坂本先生は阿波町のご出身ですので、郷里での講習を大変よろこばれておられました。その人生経験豊かで豪放らい落、時にはユーモアたっぷりな講話は受講するものの心に深い感銘を与えたことと思います。今も目を閉じるとその時の先生のお声が鮮やかに耳底に響くようです。

思いおこせば先生の氣迫溢れる毒舌は、又格別のものがありました。「福田君、ぼやぼやするな、ボケ」と大声した後に、「ボケの語源は大歩危、小歩危からきているのだ」と言っていて皆が吹き出した事もありました。徳島県警特練生が大阪府警で合宿した折り、朝の駆け足の先頭に立ち「ローレン ローレン」と掛け声高く大阪城の外

濠を走りつつ、「怠ける奴は、着払いで徳島に送る」と愛の叱咤は聞くもののど肝を抜くすごさでした。

「私語をやめよ」も坂本語録中得意のものでした。

五人や六人で飲んでいる時に「別々の話題を出すな。一つの話題で楽しく飲めよ」と。かと言って堅苦しいばかりではありません。先生は大の軍歌愛唱家で、軍歌はその時代を表す最高の文学の集約であると言われておられます。したがって全日本軍歌推進会を作って愛国心、祖国愛に目覚めるために坂本先生自らが会長、福田副会長となって各県に支部長を置くと言う、茶臼っ気たっぷりな一面もありました。

徳島剣連では軍歌を愛唱する方が多いのでしようか。「二等兵」という軍歌酒場があって多くの憂国の方々が集まっている様です。旧軍人の方のお名前がある中に「憲兵軍曹 堀江幸夫」名札もその中に拝見しました。現在徳島県支部長は阪本憲一氏、副支部長は一村昌和氏で共に声高らかに歌っているとのことでした。

♪ 仰げば巍々たる市ヶ谷の 九重深き雲の上

玉葉の御身いや高く 北白河の水清き

久近（くに）の光の浮かぶなる 誉は高し我が武窓

毎年この講習を楽しみにされ、来ると朝から坂本先生は堀江先生と共に朝稽古に出られました。朝食のために宿舎に戻られると「全剣連制定居合の講習は福田よ、お前がやって置け」と言残して堀江先生の車に乗り、故郷・阿波町東林の墓参りに行かれるのが常でした。

昼前講習が終わった頃、坂本先生がご機嫌麗しく武道館へ戻ってこられます。これも堀江先生の機微を得たお計らいではなかったかと、今になって感謝を申し上げます。

坂本先生自ら古流のご指導と審査をなされるのが常でした。終わると恒例の夕食会となりました。ボルテージが上がってくると突然、坂本先生が起ち上がって「皆、私語を止め。軍神・橋中佐を唄うので皆で合唱して呉れ」と言い「陸軍補充二等兵、坂本吉郎」と名乗るや刀を銃の様に担ぎ、歩調をとりながら座敷の周囲を何回も何回も回られました。延々と続く軍歌、橋中佐は果てることありませんでした。心から故里の空気に親しんでおられたものです。

坂本先生との忘れられぬ思い出として、次のようなことがありました。各地講習会へ先生のお供をして参りました。ある日、突然夜半に起きられて、「俺の葬儀委員長をやってくれないか」と言われたのでびっくりして「親父と思つて敬慕してきた先生のご最期など、考えたこともありません」と即座にお断りしました。しかし、その後も二人だけになると同じ事を繰り返されるので、遂に根負けして「判りました」と言つてしまいました。途端に「それで安心した」と言つて直ぐに高いびきで寝られました。

それから幾年か経ち昭和六十二年十一月、六、七段の審査員として東京で一泊した朝、突然に先生の訃報を受けました。茫然自失、翌日先生の宅へ参上しました。ご遺族の方が集まつておられ、遺言により、葬儀委員長をしてほしいと私を待っていて呉れました。



坂本先生の教を胸に演武する筆者

先生のご他界は古武士を偲ぶにふさわしいご最後と承りました。病院に運ばれる時、亡奥様の写真に向かって「今直ぐにお前の側に行くからな」と言い、途中の車の中で吉樹様（長男）、ご遺族に通帳、印鑑、献体の事等を言い遺されて悠々、而も忽然と逝れたとの事でした。

山紫水明の阿波の山河、青々とした東林の山並み。語れば語り尽きることはない幾百、千の思い出を私共に坂本先生は与えて下さいました。私と徳島の深き縁も恩師坂本先生あつてのことと深く感謝いたしております。

お、福田よ、お高越っあん よう晴れているですよ!!

(大阪市在住)

坂本吉郎範士プロフィール

阿波町東林で明治三十四年十二月三十日生まれる。

天智天皇時代、役小角えんのかどによって開かれた山岳修験道の道場高越寺のある高越山を日々望んで、少年期を過ごす。父の事業で大阪に出る。

府立都島工業学校（旧制）卒業後、大阪府警察官拝命。その後、剣道教師となり、主席師範を勤め幾多の名剣士を生む。

剣道範士八段、居合道範士九段。（昭和六十二年十一月没）

昭和四年五月四日、皇室内済寧館で举行された昭和天覧試合に大阪府代表として出場。優勝した横山永十選手と予選で決勝を争うも惜しくも破れる。

坂本先生の天覧試合出場のご感想の一部を紹介する。

我等選士としては勝敗を超越し、正々堂々日本武士道の精髓を発揮すれば足れりと存候も又一方府県を代表する責任上且つは未熟なる凡人の悲しさ、勝ちたい、負けたくないの思念、自ら得ざるもの有之候。節制に努め懸命に練習に励み候も猶、湧出する不安を昂奮して眠られぬ夜が幾度か続き申候。

人事を尽くして天命を待つ勝敗は是れ天命他……ムク

東大剣道部雑感

東京大学剣道部長 坂本 功



4年ほど前に、東大の剣道部の部長になりました。正式には東京大学運動会剣道部長です。東京大学運動会というのは、他大学では体育会といっているものと同じ様な組織です。東大の場合、財団法人になっていますが、その理事長には総長がなることになっており、また、運営には大学の学生部の体育係の方々や学生があたっています。その傘下に各運動部があり、いわゆる公式戦に東大の代表として出場します。

最近では、同好会やサークルと呼ばれるさまざまなグループがあり、たとえばテニスのサークルなどは数え切れないほどあると思います。ものによっては、結構強いチームもあるそうです。剣道の同好会も複数あると聞いています。それでは、運動会の各部の位置づけはどんなことになるでしょうか。それについては、前理事長（つまり前総長）の吉川先生が運動会の理事会でこうお話しになり、私もそうだなと思っています。「運動会の部が勝つということは、東大が勝つということです。」

さてわが剣道部ですが、数年前、部の歴史として百年史を作ることになり、作業を進めているうちに、実はもっと古いというこ

とがわかり、昨秋発刊したときには、「東京大学剣道部百十年の歩み」という題になりました。戦後の一時期途絶えそうになったこともありすが、優に一世紀を超える歴史です。戦前、今ほど学生剣道が盛んでなかったときには、大学間だけではなく、日本の剣道界全体においても、大きな活躍をしています。

こんな歴史と伝統のある剣道部の部長に、剣道に関してはいま一つ未熟な私のような者がなったのは、単純な理由によります。私が剣道部の卒業生のうちで現役の教官としては最年長だからです。運動会の各部には、部長が必要で、それも現役の教官であることが条件のようです。ただし、その部の卒業生であるかどうかは問いません。私の所属する工学部（正式には工学系研究科）は、先生の数が多くこともあって、部長をなさっている方も少なくありません。なかには、そのスポーツをやったことがないという方さえいらっしやいます。その点、私はまるで下手だったとはいえ、学生時代の四年間ずっと真面目な部員で、ちゃんと卒業していますので、まあ的外れでもないかなと思っっています。

ちょっと余談になりますが、私は学校の先生なので、講義をしている建築学科では、学生からも同僚からも、そして仕事で付き合いのある外部の方からも、「先生」と呼ばれています。しかし、剣道部では先生と呼ばれることはまずありません。「先輩」か「部長」です。学生にとっては、私はあきらかに先輩ですので、先輩というのが一番呼びやすいのだと思います。剣道部で先生といえ、それは師範の先生やコーチの先生、つまり剣道の先生の

ことです。

もうひとつ余談ですが、剣道部に入って剣道を続けた場合、大学に入学した時から四年経ったら卒業できます。強さは関係ありませんが、真面目にやっていたら、まあ、私くらいにはなります。剣道部には、留年ということがありません。しかし、学部、つまり本来の学業のほうでは、単位がとれないともちろん留年です。建築学科にも困ったことに少なからぬ留年生がいます。さて、剣道部は卒業したけれど、学部つまり大学のほうは卒業できなかったという人も残念ながらいまいます。しかし、私の知っている限り、歴代の主将で単位不足が理由で留年した人はいないので、剣道をやったために学業がおろそかになり、そのために卒業できないということはないと思っっています。

剣道の稽古は、週に六回、日曜日以外毎日あります。夏休みや試験休みがありますが、そのときも自主練習といって、有志が稽古しています。それに、しばしば合宿があります。夏はよそへ行って、それが、それ以外は道場に泊まり込みです。普段でも合宿でも、教養学部の学生つまり一、二年生は、地下鉄を乗り継いで十分あまりかかる駒場と本郷の間を行き来するので大変です。それでもよく稽古にやっけます。

さて、私が剣道を始めたのは、鴨島第一中学校に入ったときで、その後、城南高校時代は事実上やらないで、東大に入学してから駒場寮に入る必要上剣道部に入って剣道を再開しました。卒業した後は、また剣道と縁が遠くなり、また離れていましたが、最初

に書いたように部長になって剣道部に戻りました。その後、学生の稽古や試合を見ているうちに自分でもやってみたくなり、二年前に稽古を再会しました。三度目の初心者というわけです。

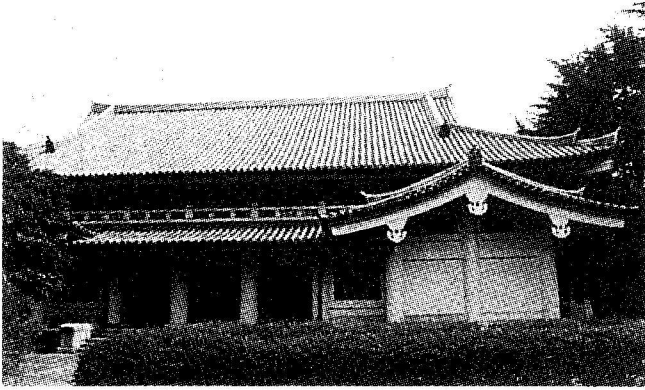
道場と同じキャンパス内にいるのに、仕事柄出歩くことも多く週一回の稽古もままなりません。しかし、やれる日は朝から楽しみで、野暮用でつぶれないことを祈りながら仕事をします。手ぬぐいと剣道用の眼鏡を持って研究室を出ると、もうこっちのものという気分です。地稽古を五、六人もやると、もうヘトヘトです。東大の剣道部はそれほど強いとはいえないにしても、レギュラークラスはさすがになかなかやります。敬老精神？で手加減してくれるとはいえ、自分より強い相手と次々やるのはこたえます。しかし、稽古の終わったあとの爽快さはなんとも言えません。

ちよつと長々書きすぎました。せっかくの機会を与えて下さったことに甘えてしまいました。自分が育ちしかも剣道を始めた徳島の剣道誌に書かせていただいて、本当に光栄です。そして、途絶えながらも剣道をやって、本当によかったと思います。最後に、徳島県剣道連盟のご発展と、徳島の剣道のご活躍をお祈りいたします。

(東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授)



東大剣道部の道場「七徳堂」



七徳堂側面

東大剣道部歴代師範

榊原 鍵吉	明治15年5月～20年代
山田次朗吉	明治30年代、及び駒場農学部で大正前期まで
木下 壽徳	明治43年3月～昭和2年3月
山里 忠徳	明治40年代～大正初期
檜山 義質	同右
中山 博道	明治末～昭和9年9月
	昭和14年4月～終戦
大島治喜太	大正11年4月～昭和14年2月
牧野 権一	昭和9年10月～14年4月
小澤 豊吉	昭和14年4月～終戦
	昭和28年～31年3月
武藤 秀三	昭和28年～40年代初め
鶴海 岩夫	昭和31年4月～46年3月
岡田 守弘	昭和33年～43年3月(駒場)
安藤 謙	昭和35年4月～56年3月
滝沢 光三	昭和42年8月～56年3月
小沼 宏至	昭和56年4月～平成9年4月

注：明治20～30年代、次の2人の方とともに第一高等学校師範であり、大学の師範もされた可能性が高いが、確証を得ていない。
根岸信五郎、得能関四郎

「東大剣道部百十年の歩み」より

平成九年度 顕彰一覽

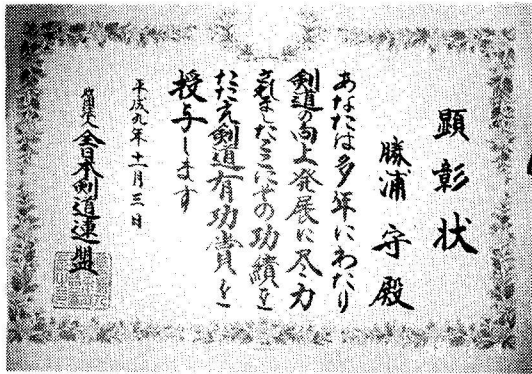
剣道有功賞 (全日本剣道連盟)

○ 勝 浦 守 (大正七年五月六日生れ)



徳島県剣道連盟発足以来、役員として連盟充実発展に尽くされた。特に、社会人剣道の発展に力を注ぎ、多数の指導者を育成した。また、平成九年三月まで本連盟審

議委員長長として、剣道の発展伸長に努力されている。その功績は顕著であり、自ら率先修行する姿は、会員の範たりうる。



居合道範士 (全日本剣道連盟)

○ 平 尾 勝 美 (大正十二年四月五日生れ)

長年にわたり、本連盟の居合道指導の中心者として、会員の技能向上および居合道発展伸長に努める。また、全国大会や講習会に精力的に参加し、自らの技能向上と人格陶冶に努める本県居合道の先達的存在である。

叙勲 (勲二等瑞宝章)

○ 勝 沼 信 彦 (大正十五年七月七日生れ)

徳島大学教授として、三十三年間にわたり、教育・研究に従事し、国際的に評価される顕著な業績を残している。また、徳島県剣道連盟においても、副会長、徳島県学校剣道連盟会長等の要職を現在も兼任しており、剣道発展に多大な貢献をなしている。

体育功労者表彰 (徳島県体育協会)

○ 堀 金 實 (大正十四年四月八日生れ)

徳島県剣道連盟の理事として連盟充実発展に尽くされた。特に、少年部長として少年剣道の育成・発展に力を注ぎ、多数の少年剣士を育成した。また、平成九年よりは本連盟

審議委員長として、剣道の発展伸長に努力されている。自ら率先修行する姿は、会員の範たりうる。

体育功労者表彰 (徳島県体育協会)

○ 森 川 澄 (昭和三年五月一日生れ)

長年にわたり、高校教諭として高校生および地域社会の小中学生に剣道を指導し、青少年の健全育成に努めた。退職後も本連盟の支部長・常任理事・経理として十数年にわたり、本連盟発展に寄与している。

体育功労者表彰 (徳島県体育協会) (美馬町推薦)

○ 香 西 虎 夫 (大正十四年一月十八日生れ)

長年にわたり、また現在も本連盟美馬西支部の支部長および美馬町体育協会の理事として、青少年の健全育成に尽力しており、その功績は顕著である。

防犯協会表彰 (徳島県)

○ 大 川 功 (半田町)

日本善行会銀章表彰 (日本善行会)

○ 寺 西 慶 裕 (昭和三年二月二十八日生れ)

平成九年九月七日の徳島新聞では次のように報じています。

チビっ子剣士1500人指導

鳴門の寺西さん
健全育成で表彰

鳴門市光武館長で市剣道協会の会長を務める寺西慶裕さん(六九)は同市撫養町木津がこのほど、社団法人・日本善行会(鈴木俊・会長)から、長年にわたり善行を實踐し、明るく住みよいまちづくりに貢献したとして銀章表彰を受けた。三十八年間、警察官を務めた寺西さんは剣道七段の腕前。昭和二十五年から指導に努め、千五百人を超えるチビっ子剣士を育て、青少年の健全育成に尽力した。また毎年末には繁華街を火の用心を呼び掛けて回り、防火運動の推進にも取り組んでいる。四日に東京で開かれた同会の創立六十周年記念大会で表彰されたが、銀章受章は四国でただ一人。銅章は毎年、金賞と銀章は五年に一度の表彰。

高等学校優秀選手表彰 (徳島県剣道連盟) 別表

中学校優秀選手表彰 (徳島県剣道連盟) 別表

この度、平尾先生・勝沼先生・堀金先生・大川先生より以下のような手記を寄稿していただきました。

平成9年度 徳島県高等学校剣道優秀選手名簿

男 子	学校名	女 子	学校名
松 田 陽 介	富岡東	畑 山 尋 美	富岡東
折 上 稔 史	富岡東	一 村 美穂子	富岡東
木 甲 健 一	富岡東	武 澤 美 香	川 島
割 石 裕 之	川 島	吉 田 祐 子	富岡西
寺 井 裕	川 島	福 永 恵実子	富岡西
相 坂 和 男	川 島	佐 藤 留 美	池 田
富 山 貴 史	川 島	山 川 景 子	城 東
湯 岑 昭 彦	川 島	上 田 玲	小松島
上 柿 雄 司	川 島		
高 野 嘉寿馬	川 島		
青 井 秀 登	富岡西		
敦 賀 晋 平	富岡西		
小 笠 健 二	富岡西		
紙 本 康 程	富岡西		
福 島 聡 仁	富岡西		
大 石 哲 生	富岡西		
郡 陽 介	城ノ内		
西 木 容 平	城ノ内		
鈴 江 周	城ノ内		
岩 朝 洋 平	城ノ内		
三 浦 憲 治	城ノ内		
上 田 昌 也	徳島東工		
木 村 佳 史	阿南工		
小 笹 陸 夫	阿南工		
馬 淵 雅 大	阿南工		
橋 本 陽 太	阿南工		

平成9年度 徳島県中学校剣道優秀選手名簿

男 子	学校名	女 子	学校名
藤 崎 友	相生	岡 田 友 香	木 頭
楠 原 光 謹	阿 南	松 村 広 子	市 場
大 西 雅 照	阿南一	小 林 か お り	阿 南
瀬ノ上 学	相生	石 本 美 幸	牟 岐
多 田 義 夫	阿 波	工 藤 理 可	那賀川
尾 崎 太 一	鳴門一	佐 藤 茜	那賀川
山 本 一 成	相生	元 浦 さ お り	相 生
松 本 真 治	鷺 敷	樫 本 美 紀	相 生
森 義 晴	相生	桑 原 麻 衣 子	鴨島一
中 田 匠	相生	河 野 祐 美 子	鴨島一
福 永 憲 司	相生	森 本 香 奈	木 頭
仁 木 進 介	阿南一	庄 司 由 美	北 島
遠 藤 延 哉	阿南一	春 木 牧 子	牟 岐
門 田 勇 輝	阿 南	茂 村 早 苗	阿南一
木 田 至	阿 南	松 永 枝 里	市 場
林 聖	阿 波	矢 野 裕 美 子	鳴門一
秋 山 雄 治	阿 波	矢 田 真 奈 美	山 川
澤 田 拓 哉	鳴門一	阿 部 久 美	市 場
喜 多 和 人	木 頭	浜 口 美 嘉	新 野
是 恒 寛	鳴門一	白 井 智 美	阿 波
湯 浅 智 運	那賀川	松 下 優 子	藍 住
品 川 健 太	平 谷		
元 木 英 夫	小松島		
瀬 尾 太 作	市 場		

良師に巡り逢へて

居合道範上八段 平尾勝美



祝賀会にて

凡そ習い事をする上に師匠ほど大切なものはない。昔から道を志すならば「良師につけ。」と云う言葉があります。未だ師を選んだり師の所在を知って居る者は幸福であると思います。

師匠なしで何処にどの様な先生が居られることやらなく

く世間知らずで、いわゆる宙に舞った状態で十五年の歳月を無駄にした私の居合人生は、実にみじめなものでした。

昭和十五年、神宮競技大会に中等学校剣道代表として参加した時、監督の先生が須見善富先生でした。これを契機として先生によく稽古をつけて頂き、可愛がって頂いたのですが、ふと先生が「お前、居合をやらんか」と仰しやられました。それから剣道の源である居合に心をひかれ、松島隆、遠藤英雄、中村武次の諸氏と共に須見先生の御自宅の道場へ通い、熱心に稽古すること数年。四人共五段まで進むことが出来ました。しかし、先生が御病気になられ、九州の湯布院で療養されて居られました。遂に御

逝去、私達は師匠を失いました。其の後、石井隆介先生にお世話になり、軌道に乗りかけた頃、石井先生も須見先生の後を追う様に御他界されました。私達の孤児生活がこっから始まった訳です。これまでに師匠のご指示で高知の致道館へ行ったことが一回あるのみで、全く井戸の中の蛙同然、周囲のことは何にも分かりませんでした。稽古を遠ざかること数年、これではと思ひ立ち、三氏に訪問稽古の再開を呼びかけました。しかし、永い間の空白ために仲々腰を上げることが出来ず、一人稽古を時々するのが一杯の状態でした。その間、全日本居合道大会をはじめ各種居合道大会には全く不参加の徳島県でありました。此の時代に後進県徳島の悪名が生まれてしまった様に思われます。

昭和四十六年、第六回全日本居合道大会が香川県で開催されるに当り、隣県として参加しなくてはなるまいとのことで、下村富夫六段が七段の部に不詳私五段が六段の部にと云った具合に、それぞれ下段位の者が出なければ選手がない有様で、成績も惨敗を余儀なくされました。初めて見る全国大会の演武に驚きと感動の念は人一倍のものがありません。大きな悔しさとそれに比例する発奮の気も同時に湧き上りました。稽古しよう。あんな居合に近付こう。意欲は満々と漲みなもって参りました。稽古。稽古。又稽古。そして其の結果を見極める尺度としての六段挑戦。しかし、所詮は師匠無しの一入稽古、無念の結果に終わりました。誰かに見て頂かないと到底駄目とは知りながら全く打開策不明。

そのうちに「四国には澤田先生がおられますよ。」とのアドバ



居合道範士九段 福田一男先生 (大阪)

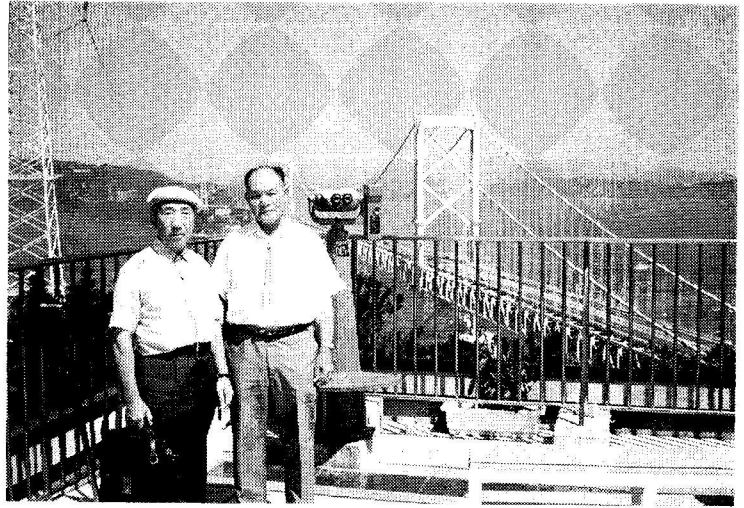
イスを頂戴し、早速に連絡をとりました。「出かけてこい。」との御快諾を頂き、高知県野市町の澤田友信先生を訪ね、稽古をつけて頂くこと二回。帰る間に先生が申されるには、「もう出来たよ。遠方より来なくてもよろしい。」とのお言葉なれど小生には全く自信も何ありません。三回目訪問したら「私も忙しいんだ。出来るからもうよいと云ったのに何故来た。」と頭から叱られました。全く平身低頭心から謝って何とか半日お稽古をして頂いたものの、先生に御迷惑をおかけしない様にと今度は地元の人達の夜の稽古場へお邪魔しました。黙って先生は見て下さったが、稽古の後、奥様に御挨拶をし、お茶を一杯頂いて帰路につくのは十一時半頃になります。家に帰ると午前二時半頃、それでも働きの盛りの我が身にとっては朝寝も出来ず仕事にかならなければなり



居合道範士八段 香西好雄先生 (香川)

ません。こんなことの繰返しが続く中に京都に於ける六段審査を迎え、三回目にして漸く六段に昇段することが出来ました。此の頃から山口市に於いて紙本栄一先生が提唱し主催する俗に謂う「山口の講習」なるものが盛んに行われており、やっとのことで参加のお許しを得て、二月と八月の年二回定期便の如く山口通いをし、勉強させて頂くとともに全国の先生方との交流を計ることが出来ました。また、県内にあつては大阪の坂本吉郎範士と福田先生が講師として御来県され、坂本先生亡き後も範士九段福田一男先生が今尚指導を続けて頂いて、今日の徳島の居合を育てて頂きました。

五十五年、七段は一回で合格させて頂きました。これひとえに御指導に預かりました先生方のお陰でございます。只々感謝のほ



居合道範士八段 日浦眞蔵先生(佐賀)(左)と筆者

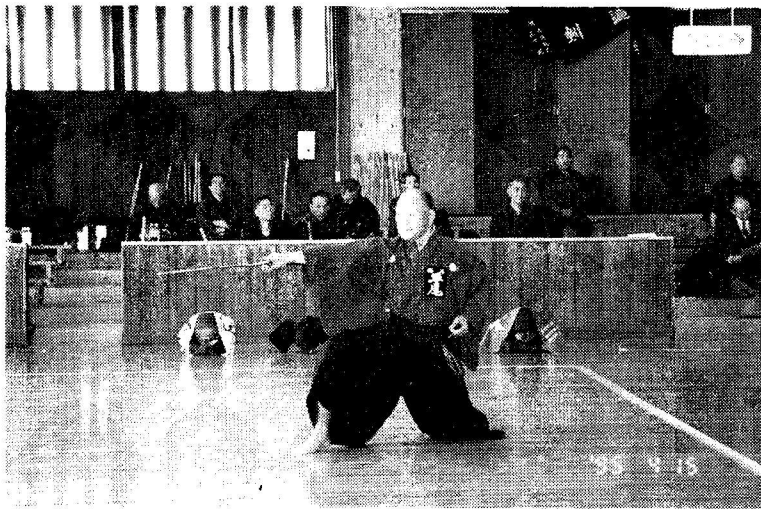
の総てを伝授頂き、物打の迫力とこれを具現する為の試し斬りに
は毎回車を三時間余りも走らせて大村市の片田舎にお住まいの川
添作太郎先生(試し斬りの先生で、磨師でもある)を訪ね一口が
かりで青竹、巻藁と掌中の働きを心ゆくまで試して参りました。
鹿兒島の富岡巖範士からは正確な技前と人間形成の為の「心」を
教わりました。

先生方の御指導が積もり積もって平成二年には、二回目の挑戦

がありません。

八段受験につきましては完璧な立居振舞と技前が要求され心機一転気遣いと思われる程の執念を以て臨まなければなりません。香川の香西好雄範士よりは緻密な気配りと技前をみっちり教えていただきました。佐賀の日浦眞蔵範士よりは手の内を事細かく蘊蓄

で八段の関門も通過させて頂くことが出来ました。此の様に長い空白の後、それぞれ持味の違った立派な師匠に巡り逢えて、しかも、どの先生方も惜しみなくすべてをお教え頂き、お陰を以て本年は居合道範士の称号を拝受することが出来ました。また、県内にありましては剣道連盟会長様始め諸先生方より御指導御鞭撻を頂き心から御厚情に感謝申し上げます。師匠に恵まれている人はともするとその有り難さを忘れがちになりやすく、また恵まれずとも素直に精進努力して教えを乞えば師匠も決して見捨てることはないでしょう。どうか皆様、良き師匠に巡り逢い修業に実りある日を迎えられます様祈って止みません。



高齢者剣道大会で演武する筆者

叙勲御報告

副会長 勝 沼 信 彦

平成九年四月二十九日、春の叙勲で、勲二等瑞宝章を皇居において橋本龍太郎首相から伝達されました。「教育と研究」における顕著な貢献が受章

理由であります。その後で勲章を着装して天皇陛下に拝謁をいただきました。陛下から「国民の幸福に努力いただき有難う」という有難いお言葉をいただきました。永年に渡り教育と研究に国際的努力を続けてこれたのは剣道で六十五年間に渡り、鍛えてきた強い精神力と体力のおかげと信じております。今後もこの栄誉

会賀祝勲叙章宝瑞二等勲彦信沼



に相応しく、武道精神をもって教育に貢献を続けたいと決心しています。徳島県剣道連盟の皆様御指導・御協力をお願いいたします。願っております。

※なお勝沼先生は、全剣連の要請を受けて「全剣連広報」（現「剣窓」）昭和六十二年三月号の「剣筆」に次のような文章を寄稿されています。先生の御了解を得て転載させていただきます。

+++++

学業と剣道の両立

私は医学の進歩に微力を尽くしている者であり、剣道を愛して五十年間学んでまいりました。その関係上、世界最高の医学者であり、剣道の達人でもあられた佐々木隆興教授の遺稿集の中から剣道に関する論文の一部を選択してご紹介いたします。先生は世界で初めて食物から摂取したアゾ化合物で肝臓癌が作られることを発見され、肝臓癌の出来る原因の一つを解明され弟子の吉田富三教授と連名で帝国学士院賞を授けられた方で、日本癌学会の創立者であります。先生が京都大学医学部・内科教授であられた頃も京大剣道部に教えに行かれていたとの事があります。その昭和十年代に天皇陛下にご進講された内容に剣道に関するすばらしいものが多くあります。「運動に於ける静の生物学的観察と考察」、「剣道の科学的考察」、「剣道秘訣色付きのこと」などの論文の中から、一三を抽出してご紹介いたします。

先生は「無条件反射」の一つである本能的防御反射を抑制して、永年の剣道の歴史が作り上げた最も合理的な防御または攻撃反射の姿勢をとり得る「条件反射」に変換する事が剣道の稽古、修練であるとされています。生理学的に大脳を手術除去した犬も泳ぐことが出来、鳥も刺激を与えれば飛ぶことが出来る。初心剣道者が面へ打込まれると無意識に手元を上へあげるのも無条件反射の一つで防御本能である。防御本能を早くすることが稽古であると考えている人もあるが、これは全く誤りであり、剣道の如き大脳の発達した人間のなす運動は、その道の歴史の学習・個人の智慮的思考により一番合理的な条件反射に変えることが必要で、これを錬成・修業と言う。しかし本能である防御反射がそのまま発現する事を抑制する事は容易ではなく、ここに剣道修練の必要性が存すると言っておられます。

今一つ、先生は敵の「色に付くな」と戒めておられます。「敵の色に付けば敵に使いこなされる」ことになり剣道家の優劣は主として此れに基因する。故に達人の域に至らむと修業する者は、まず心術の修業により此の「色付き」より超脱する工夫を日常座臥心がけねばならぬ。人生のこともまた此の如しである。或は利慾に色付く者あり、或は人爵じんしやくに色付く者あり、勝敗に色付く者も多い。天空海濶てんくうかいわくの大丈夫の襟懐きんかひを缺かく者が多い。是れ皆、高尚なる理想と自信とがないのに由る。剣道に於いても「色に付く」場合は自信なきに由るこ

とが多い、人間向上の一路は理想を高尚にして且つ自分の専門に精励して自信を得るに有りと信ずる。との解決法を教えられておられます。最後には、武道精神による国民教育、「武教」の健全なる発展を常に祈ってやまないと結んでおられます。私も医学と剣道を修道し、佐々木教授の如くなりたくて願っております。蛇足の感がありますが、私の剣道の修業歴をご報告し、今後のご指導を願ひ上げます。

私は尾張徳川藩校明倫堂に発した旧制明倫中学剣道部で加藤七佐衛門、杉山文蔵両範士に手ほどきを受け、その後旧制第八高等学校、名古屋大学医学部と進み、それらの剣道部で足立令三先生や先輩の三輪田、馬淵、村瀬先生らに教えを受けました。徳島大学の教授に赴任してからは堀江、故卜村両範士、大沢八段らにお稽古を付けていただいています。剣道を一生の修業と心得ていますので諸先生のご指導をお願い申し上げます。

最近感じること

審議員 堀 金 實



お礼を申し上げます。

平成九年二月十一日、県郷土文化会館において、平成八年度の徳島県体育功勞者として表彰を受けることが出来ました。これひとえに堀江前会長先生をはじめ親友皆様方の御支援のおかげと心より厚く

さて今度広報部より本誌に原稿をとの連絡に接し、考えた木折角の機会ですので少年剣道を通じ、最近特に感じる事について若下述べてみたいと思います。皆さんもご存じの様に全剣連の剣道指導上の重点事項とし、

一、技術以前の所作、礼法、着装について徹底する。
二、刀法のみだれを止す。
三、一足一刀の間から一拍子の正しい打突を基本の中心課題とする。

四、受ける側（元立ち）の意識と方法についての解釈する。

五、正しい鑢ぜり合いについての指導。

六、竹刀の操作において刃の觀念を徹底指導させる。

七、講話を積極的に取り入れ剣道を通じて道徳的価値觀の育成を期す。

以上七項目が示され剣道の修業を志す者としては大切な事ばかりであります。これらの項を一つ一つ検討を加え、考えなおした時にどれだけ正しい動作が出来ているか考えさせられます。例えば、抜刀の要領にしても、正しく袈裟けあさに切る要領で蹲踞すんぎょしながら抜き構える。そういう立会いの作法が徹底していないのが現状でないでしょうか。少年剣道大会時にこれらの作法や提刀や帯刀の動作を正しくしない子供の姿を良く見受けます。

特に気になるのは（一）の技術以前の所作礼法等の問題であります。私の感じる処では、技術の面ばかりに指導者が重点を置いている様に思うのであります。その例として、よく見かける姿ですが、試合を終え、選手が退場移動するに際し、誰れ一人として面の中に小手を握りより入れ、右脇にかかえ、竹刀を左手に持って移動すると言う正しい動作が出来ておりません。突き垂部を握ってさげたり、面と竹刀を一緒に胸にかかえるなど、さまざまな動作で移動するのに対し、近くにいる指導者たる監督は選手達に何一つ注意する訳でなく試合の結果のみにこだわっている姿をよく見受けするのであります。その他にも剣道具の着装にしても、又一番大切な礼法にしても軽視され、言うならば只試合に勝つ事のみにこだわっているのが現在の剣道の姿である様に思えてならないのです。

私は勝敗を競う事が悪いと言うものではありません。誤解があったらいけないので述べますが、私なりに剣道の理念を現代的に言うならば、「相手を前にして竹刀を手にし、仮に試合を一つの手

段として勝敗を競いながら心身を鍛錬するものである。」と思っております。ですから、勝敗を競う以上それにこだわる事は当然であり又修業の日安でもあります。それは稽古方法を考えても判る様に、基本打突、剣道形、打ち込み稽古等、直接勝敗を目的としなくても結局は勝敗を競う技術を身につける事になってしまいます。それ故に一生懸命を引きしめて気合の入った稽古が出来るのであります。この様に考えますと勝敗を競う事も大切であります。然しかと言って技術以外の諸動作を軽視し、おろそかにしてよいと言ふ事にはなりません。

もう一度諸問題について再度考えてみると先に述べた以外にも、有効な打突の残心の問題や、審判上の諸動作等色々と試合を通して考えさせられる点がある様に思います。此の際、原点にかえり、じっくりと考えなおし、子供達に対し、将来調和のとれた、立派な剣道人即人間を育成するためにも、我々指導者自身が、常に剣理にそった正しい剣道を心掛け、試合等あらゆる機会を通じて子供を正しく指導しなければならぬと思えます。これらの事が今特に感じ、願う次第です。



底辺拡大について

美馬西支部 大川 功



り御礼申し上げます。

さて、私の私生活を振り返って見ますと、防犯に対してはどのような点で協力出来たのか考えさせられますが、剣道教室のお世話をする事により青少年の健全育成に対して少しでもお役に立ったのではと自負する程度であります。

そこで、近年の剣道界の状況について考えて見ますと、剣道人口の激減による剣道教室等の活動の低迷や各種学校の剣道部の廃部等、諸問題を抱える現状であろうと推測致します。

私の所属する半田町剣道教室でも同じ悩みを持っており、最も盛んな時は三十名余りの少年剣士が活発に練習しておりましたが、三、四年前より練習生が減少し一昨年は六名にまで減りました。

しかし今年、少し盛り返し練習生十五名、指導者四名（実質活動者）と徐々に増加の傾向にあり関係者一同は喜んでおりますが、いつまで、この状態を維持出来るかは確信のある事ではなく

今後心配の種はつきそうに有りません。

徳島県剣道連盟の諸先生方からも常に御指導頂いております様に、底辺拡大が剣道界の最大の発展を伴うと私も協賛致しております。

そこで子供たちは、なぜ剣道をやりたがらないのか私なりに考えて見ますと、子供たちが人会前に剣道教室の練習を見学に来ると、家に帰って言うことは、竹刀で頭をたたかれると非常に痛そうに思えることと指導者と練習生が大きな声を出し合い、お互いに竹刀で打ち合っている姿が始めて見る光景にしては恐怖心をかき立てるみたいで、一つのやりたがらない原因になっているようです。

しかし、父母たちにおいては、剣道は「礼儀正しい子になる」「精神面で強くなる」「学校の試験等で集中力が強くなる」等の変身願望が強く感じられる所もあり、このような父母達の動向を考えて見ますと今後は剣道人口の増加に少しでも期待が持てるのではないかと思えます。

又、当教室の近隣町村では少女の剣士が増えつつあり、礼儀を重んじる剣道としては、嬉しい傾向にあると私は考えます。

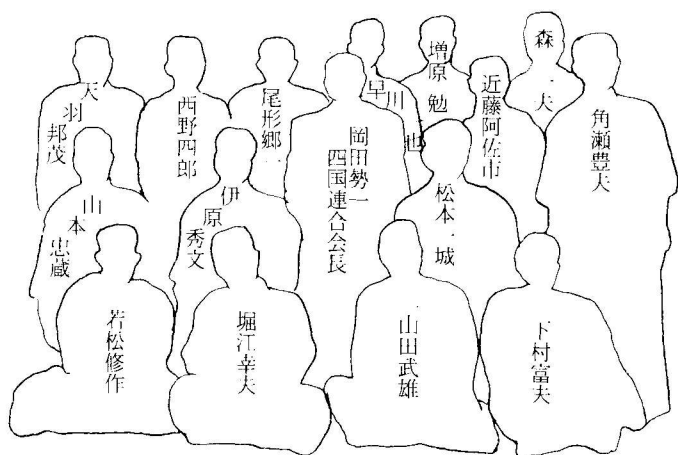
私自信、微力では有りますが剣道界の底辺拡大に協力致しますと共に、自己の精進を忘れる事なく県剣道連盟の諸先生方の御指導が頂けますよう宜しくおねがい申し上げます。

思い出の一枚

第4回四国四県剣道大会

名誉会長 堀江幸夫

全日本剣道連盟が
 まだ結成されてい
 ない時代、四国では
 すでに対県試合が行
 われて早や四回。本
 県初優勝の試合前の
 選手と岡田勢一四国
 連合会長（代議士）
 と尾形初代会長を囲
 んでの記念写真です。
 大方の先輩は鬼籍に、
 今竹刀を握っている
 のは西野さんと早川
 さんに私の三人とな
 りました。



昭和27年5月11日 第4回四国4県剣道大会優勝 鳴門市板東小学校

四十六年高校総体

副理事長 大石 正志

この写真は昭和四十七年度、富岡西高等学校剣道部卒業アルバムのもので、昭和四十六年（一九七一年）徳島県城北高校を会場としてインターハイが開催されました。そのため私達は中体連高体連剣道専門部による強化対象として数多くの強化合宿、県外遠征を経験することができました。当時、高体連専門委員長は脇町高校の滝下先生であり熱心にご指導いただきました。

県下強化合宿は、旧武道館で実施されました。宿泊は玄関上の畳の部屋でした。こんなことを思い出します。早朝六時前、寝ている布団の上をふんどし姿で「起床」と叫びながら走り回る元気いっぱい滝下先生、夜のミーティングの後、武道館館長先生と二人で聞かせていただいた、いや、聞かされた「熱海の海岸散歩する♪」も本当に楽しく熱か熱かでした。稽古では多くの先生方に指導いただきました。また塩田先生（現・川島高教諭）が国士舘大学を卒業されたばかりで合宿に参加されておりましたのも、この当時です。また、富岡西高校に合宿では西谷先生（現・城ノ内高教諭）が大学より帰省され親身になって指導いただきました。皆はポバイの腕を持つスーパーマンと呼んでいました。全員の目標の人物でした（現在も）。遠征では、一年次、徳島県池田で四国四県の有名校が集まり、練習試合が行なわれました。この時は



特に愛媛県新田高校の試合ぶりが印象的で心に刻まれました。それ以外に香川県志度商業・和歌山県和歌山工業などへの遠征は(故)清原栄先生また鎌田恵先生が指導されておりました阿南工業高校と一緒に出かけました。恩師である(故)松本一城先生には大阪の上宮高校やPL学園に連れて行っていただきました。特にPL学園との練習試合では、まず、レギュラーチームと、その後、B・C・D・Eと十試合ほど対戦させていただきましたが選手層の厚さに驚かされました。

こうした経験を積みながら、いよいよ全国大会を迎えました。開会式の後、松本一城先生、(故)下村富夫先生の日本剣道形の演武で大会が始まりました。本県代表として阿南工業高校が一位校として、富岡西高校が二位校として出場権を得ました。三校による予選リーグでは東洋大学姫路高校に二二の代表戦、国士館高校に三二と惜敗しましたが、全国の強豪校に善戦することができました。当時のメンバーは先鋒から大将まで、大石(城南高教諭)・土佐野(養殖業)・富田(城東中教諭)・河田(富岡東高教諭)・新野(木材会社経営)でした。皆がそれぞれに、すばらしい経験ができたと思います。次年度、山形県インターハイは、この写真のメンバーに加藤(那賀高教諭)・延(白宮)が加わり大会に出場することができました。思い出すままに書きましたが本当に良い思い出として青春時代を回想できる自分を幸せに感じています。これも松本先生を始め多くの諸先生・先輩方のご指導のお陰であると感謝の気持ちでいっぱいです。

また、当時強化選手であった生徒が今、剣道の指導者としてあらゆる方面で活躍しています。二十数年間を振り返ると指導者の養成が剣道発展のため大きな柱になると痛感させられます。自分としては感謝の気持ちを忘れず微力ながらも剣道に貢献できるように努力していきたいと考えています。



全国講習会報告

平成九年度西日本 剣道講習会に参加して

板野東支部 川田 武志

平成九年四月十七日から四月十九日まで、神戸市立体育館において全剣連主催の西日本中央講習会に徳島県より東内勉先生と二人で参加しました。

この講習会は、

- 一、審判法の重点事項
 - 二、剣道指導法の基本重点事項
 - 三、日本剣道形の意思及び指導方法の統一事項
- についての実技と共に伝達指導することを目的としたものであります。今回の講習会の講師先生方は、以下のとおりです。

役員

全日本剣道連盟 副会長兼専務理事 武安 義光 先生

副会長 石原 忠美 先生

常任理事 園田 政治 先生

講師

講話 柳生延春巖遊

審判法 松永範士八段（東京）

剣道指導法 川崎範士八段（佐賀）

日本剣道形 永松範士八段（東京）

受講生は西日本から範士八段、教士八段、教士七段の五十二名であり、さすが各県を代表する猛者揃いの先生方ばかりで初めは気が負いがありました。しかし、小生関東管区警察学校で行われた警察剣道指導者講習会の同期生や、さらに大阪・京都府警等で合同合宿した各県の同僚五名が受講生として出席しており、剣道談義や稽古も充分でき、三日間なんとか頑張り受講終了した次第であります。講習内容については、以下の点について重点に指導をされました。

《審判法》

- 一、規則に精通し目的、趣旨を遵守し、運営要領と運用上の要
点を把握し試合の活性化をはかる。
 - 二、審判技術の向上につとめる。
 - 三、有効打突を見誤らないようにする。
 - 四、反則事項を厳格にとること。
- （不当な中止要請や、つば競り合い際の反則かどうかの見分けを厳しくする）。

《有効打突》

・「適法な姿勢」を「適正な姿勢」とした。全ての人に適用する用語としては適法で正当という一般的な通常概念で判断す

る。

・充実した氣勢、適正な姿勢の判断については、審判員の修練に基づく識見と認定と裁量とに委ねられている。よって審判員は十分な研鑽を必要とする。

・倒れたものに対する打突についても、最近では直ちに止めをかける場合が多くなっている。審判員はその状態を的確に判断して危険性の有無、試合続行の可否を見極め一打をなす時間を認めるか、直ちに止めさせるかの処置を迅速に決定する。

〈二刀について〉

・小刀での打突が有効打突になるには、大刀で相手を制している場合で打った方の肘がよく伸び十分な打ちで条件を満たしていることを必要要件とする。

・つば競り合いでの小刀の打突は、原則として有効としない。

・試合中、竹刀が破損し代えの竹刀がなければ試合不能として負けとする。

・二刀のつば競り合いは、小刀を下に、大刀を上とし二刀を交差する形で指導する。

〈反則事項〉

つば競り合いの際の反則

- ・不当なつば競り合いは、つばとつばを接しない状態である。
- ・つば競り合いから分かれる際に竹刀で相手を突き放す行為は細則十六条の七に該当する。
- ・一方の竹刀を相手の肩にかけたり、不当な妨害行為を行って

いる場合、時間を空費しているような場合は反則としてとる。
不当なつば競り合い

・相手が間をとろうとしているのに体を寄せて行くような動作を何度も行う行為、相手の肩に竹刀が掛かるのは故意と判断されれば反則。

・拳同士が接しているだけで竹刀が離れている状態が長く続いたり意図的にこうしていると判断されれば反則。

・ともに手元が上がってしまった状態、打突のためなど瞬間的になるのはよいが、意図的にこの状態にしていれば反則。

・左拳で相手の体、腕を突くのは原則的に反則。

・左拳で相手の拳を払おうとする行為、打突のために瞬間的に行うことはあるが、それ以外の場面で程度がひどいと反則。

・うなづいて分かれるふりをして打って行く行為。

・審判にあっては、剣の理法を全うしつつ、適正公平に審判をしなければならぬ。このためには、規則を精通し、基本並びに所作を行わなければならない。

《指導法》

講話

一 剣道の指導者の在り方について

二 剣道の指導の在り方について

ア 初心者剣道指導

イ 幼少年剣道指導

ウ 女子剣道指導

エ 高齢者剣道

オ 外国人剣道

については平成八年の中央講習会の内容とほぼ同じ内容であるので説明は、省略します。

《実技指導》

重点事項

- 一、剣道の理念より深く認識し、心気力一致について指導する。
- 二、技以前の着装、礼法、所作などについて。

(一) 着装

剣道着、袴の正しい着用

剣道具の正しい着装

各紐の不揃い、一面タオル、一面紐の結束位置および移動時の動作。

(二) 礼法

立会時の正しい位置

立礼は相手にあわせて正しい礼（十五度）

提げ刀、帯刀を正しい動作で、蹲きよは日本剣道形の方法に準じて、

三、一足一刀の間からの一拍子の正しい打突を基本の中心課題とする。

四、受ける側（元立ち）の意識と方法について、

（切り返しでの引き入れる受け方と打ち落とすの二つの受け）

五、正しいつば競り合いについての指導

六、基本

(一) 構え（打突にいける、打突が出来る。左のつながり）

(二) 間合い

(三) 足さばき、（歩み足、送り足、継ぎ足、開き足）

・ 一眼二足三胆四力

・ 踏み込み足

七、打突

・ 一足一刀の間から一拍子の正しい打突の基本を中心に

・ コックとコースとコントロール

・ 初太刀の重要性（一本勝負の気持ち）

について実技の指導をうけました。初心にかえて気剣体の一致した技が出せるよう基本練習を充分行うよう指導された。

《日本剣道形》

日本剣道形について、太刀、小太刀の理合を深めるとともに、指導上の意思統一を計り、伝達講習ができるよう指導されました。剣道形の意味および指導方法の統一事項は平成九年剣道講習会資料に詳細に搭載されており、研鑽のほど宜しく願います。

以上が講習会の重点事項の概略です。剣道並びに剣道形は、基本を忠実に言い、その所作を適切に実践して行かなければならないと強く実感しました。

西日本女子剣道講習会に参加して

阿南支部 名 蔵 輝 実



私は、今年の春頃から阿南支部の練習会に参加させて頂いています。そのお陰で、手塚先生の方から「講習会に参加しませんか。」と、声をかけて頂きました。始めのうちは、参加してみたいという気

持ちが強かったのですが、資料等を頂き、その資料を見てからは、「自分の様な未熟者、若輩者が参加してもよいものだろうか」と悩みつつ、兵庫県に向かいました。講習会に行くのも一人で兵庫県に行くのも初めてだったので船を降りてからは、「体育館に無事たどりつけるだろうか。」等、思いつつ、体育館に着いて一安心しました。

ですが、剣道着と袴に着がえ、体育館に入った時、「ああ、私は大変な所に来てしまった。」と、痛感しました。とにかく、全体の雰囲気、飲みこまれる様な感じでした。

講習の方は、全日本剣道連盟の先生方をはじめ、兵庫県剣道連盟の先生方、スポーツ医学の先生等、すばらしい先生ばかりで、私のような者にでもわかる様にわかりやすく御指導して頂き、今まで学んできた事以上の勉強ができました。私の不勉強さを思い知らされる講習会でもありました。

全員での練習会もあったのですが、せっかくの練習の最中にケガをしてしまい、二日間で二人の先生に練習させて頂いただけだったので自分で自分に腹が立ってしかたがありませんでした。せっかく参加させて頂いたのに、申し訳ありませんでした。

講習の方も思い出になりましたが、それ以上に土曜日の夜の宿泊組での親睦会でいろいろな剣道の話、仕事上の話、結婚してから剣道を続ける秘訣など、私生活面でも勉強する事ができました。あと、剣道は幼い子供から年輩の方まで「やりたい」と思う気持ちがあればずっとできるという事を再確認する事ができました。

ですから私も、体を治すことに専念し、万全の体調に戻してから、剣道に復帰したいと思えます。続けられるならば、一生続けていきたいです。

講習の全工程終了後、参加した皆さんと、「来年もみんなが集まろう」と言いあって、各自の県に帰りました。

勉強できるという面でもそうですが、いっしょに講習を受けた皆さんに逢う機会を作って頂いてありがとうございます。

できる事なら来年も参加させて頂きたいと思えます。宜しく御願致します。

第九回全剣連公認「社会体育指導員」及び 文部大臣認定「社会体育指導者(剣道)」 養成講習会に参加して

鳴門支部 岡本 茂



「社会体育指導員」という制度をご存じでしょうか？ 段位・称号と同様に全日本剣道連盟(以下全剣連)が認定する三つ目の資格なのです。これには四十時間もの剣道に関する実技・学科の講習を

受けることが義務づけられています。また、文部大臣の認定の資格でもあり、剣道の実践的指導にたずさわっている指導者の資質の向上を計り、剣道をより充実し正しく普及させることと指導者に必要な知識・能力を得ようとする人達の養成を目的とされています。なお参加資格は原則として年齢三十歳以上の男女で剣道三段以上で所属都道府県の剣道連盟の推薦が必要とされています。

平成九年八月二十九日午前九時、中国・四国地区講習会場である岡山県玉野青少年センターに中国四国地区から八十九人が集合しました。地元岡山県が最も多く六十二名、四国からは四名(徳島二名 香川・愛媛各一名)でした。十時より開講式が始まり、全剣連社会体育指導委員の福本先生から「二十一世紀を間近に控え剣道の今後の発展を考えたとき、正しい剣道を系統立てて整理

し、次代に継承していくには地域レベルでの指導者の質を向上しなければならぬ」と熱っぽく話してくれました。私はこの資格が発足したばかりで取得してすぐにどうにかなるものでなく、認知されるには時間がかかりそうだが、全剣連が力を入れていることは確かで、将来の発展が期待できるのではないかと思いました。講師はそれぞれの部門の超一流の先生方です(別表1)。開講式の後、講師・講習生の記念撮影があり、早速講義が始まりました。日程表(別表2)を見れば分かりますが朝から夜まで頭と体をフルに使う講習内容です。また日程表にありませんが、朝六時十五分から七時までの朝稽古と夕食までの残り時間までの稽古がこれに加わりました。ある程度の講習のカリキュラムが終わると「講義科目テスト」というハードルが待っています。どんな講義かと楽しみな反面、講義についていけないのではと不安にもなりましたが、ここまでできたらやるしかないと思えました。簡単に特に印象に残った講習カリキュラムについて述べてみたいと思います。

一日目に早速、五・六時限目の講義の後に「講義科目テスト(日本概史上での剣道の歴史)」が行われた。幸いにもテキスト持ち込み可で安心した。十一時限目の「試合審判規則の意義と役割の理解」の時間は、審判員としての心構え・役割を再認識させられる時間となりました。試合とは、競技者と観客が一同に会し、その中で競技者が日頃の練習でその競技の特性を生かし、工夫した最高の技術を体現する場であり、観客はその勇姿を見ることに

感銘する場なのです。このような場を作り出すには競技者間に一定の取り決めが必要です。ここに審判規則の意義があります。特にその試合を円滑に運営する審判員の使命は大変重要で、講師の福本先生からも「公平・公正無私・平等であり目的主旨を遵守し、審判技術の向上に努め、有効打突を見誤らず反則については厳格にとること。そして勇氣・決断がなければ駄目。」とのことでした。あっという間に第一日目が終わりました。

第二日目（八月三十日）朝稽古、さらに頭と体をフルに使う講義が始まりました。二日目より午前中は座学中心で午後より実技のパターンとなりました。一時限目の「剣道の正しい基本技術を体得する指導法」の中で効率的かつ能率的な助力を与えることによって、学習効果を高めることであるということまで以下のこと講義されました。運動技術の指導法として

①個性に応じた指導＝学習者の個人

別表1 第9回全日本剣道連盟社会体育指導員講習会講師一覧（担当時間割順）

氏名	職業・役職（平成9年6月現在）
福本修二	慶應義塾大学総合政策学部教授 全日本剣道連盟常任理事 社会体育指導者委員会委員
杉江正敏	大阪大学健康体育部助教授
百鬼史訓	東京農工大学教授 全日本剣道連盟参与 科学委員会委員 剣道和英辞典部会委員
脇本三千雄	東京都中野区立中野富士見中学校校長 全日本剣道連盟参与 社会体育指導者委員会委員 剣道和英辞典部会委員
網代忠宏	東海大学教授 社会体育指導者委員会委員 剣道和英辞典部会委員
熊本正	広島県警察本部剣道主席師範
角正武	全剣連社会体育指導者委員会委員 福岡教育大学保健体育科教授
林邦夫	中京大学体育学部教授 社会体育指導者委員会委員
井上茂明	全日本剣道連盟常任理事 社会体育指導者委員会委員
岡村忠典	全剣連理事 全剣連社会体育指導者委員会委員長 全国高等学校体育連盟剣道部部长 都立竹台高等学校長
渡邊博義	国立療養所 長島愛生園整形外科医長 全日本医師剣道連盟会員
村山慶佑	財団法人 修武館師範 兵庫県剣道連盟審議委員
吉田泰将	慶應義塾大学体育研究所専任講師 社会体育指導者委員会幹事

別表 2

第 9 回全剣連社会体育指導員養成講習会・ 日程表
[平成9年8月29日(金)～9月1日(月)於・玉野青少年スポーツセンター]

時限	時刻	第1日目(8/29金)	第2日目(8/30土)	第3日目(8/31日)	第4日目(9/1月)
	07:00 ↓ 08:00		朝 食	朝 食	朝 食
1	08:30 ↓ 09:15		剣道の正しい基本 技術を体得する 指導法 (福本修二)	技術の指導効果の 評価法 (岡村忠典)	剣道の技術・体力 トレーニング (基礎) 1 (林 邦夫)
2	09:25 ↓ 10:10	9:00 受付開始	講義科目テスト (採点者・百鬼・福本)	対象別初級者の 指導法(興味を持た せる工夫) (岡村忠典)	剣道の技術・体力 トレーニング (基礎) 2 (林 邦夫)
3	10:20 ↓ 11:05	10:00 開講式 ガイダンス	個人指導法 (基本技術の指導) (脳本三千雄)	指導計画の立案 (年間・月間計画 の工夫) (岡村忠典)	実技・実習科目テスト (日本剣道形理論)
4	11:15 ↓ 12:00	剣道の特性に関する 概要 (福本修二)	集団指導法 (指導形態・運営法 の実践と工夫) (脳本三千雄)	傷害・疫病の観察と 対処 (渡邊博義)	実技・実習科目テスト (基本技術理論)
	12:00 ↓ 13:00	昼食・休憩	昼食・休憩	昼食・休憩	昼食・休憩
5	13:00 ↓ 13:45	日本概史上での 剣道の歴史 (杉江正敏)	審判の基本技術 実習 1 (網代忠宏・熊本 正)	剣道形の太刀の操作 と作法 (太刀1～3) 1 (村山慶佑・熊本 正)	実技・実習科目テスト Aグループ 日本剣道形 Bグループ 基本技術演技 14:00
6	13:55 ↓ 14:40	剣道の歴史的背景と 剣道具及び服装) (杉江正敏)	審判の基本技術 実習 2 (網代忠宏・熊本 正)	剣道形の太刀の操作 と作法 (太刀1～3) 2 (村山慶佑・熊本 正)	休 憩 14:15
7	14:50 ↓ 15:35	講義科目テスト (採点者 杉江正敏)	審判の基本技術 実習 3 (網代忠宏・熊本 正)	剣道の基本技術実習 及び指導法 5 (井上茂明・網代忠宏)	実技・実習科目テスト Aグループ 基本技術演技 Bグループ 日本剣道形 15:15
8	15:45 ↓ 16:30	剣道技術構造 (技術のしくみ) (百鬼史訓)	剣道の基本技術実習 及び指導法 1 (角 正武・林 邦夫)	剣道の基本技術実習 及び指導法 6 (井上茂明・網代忠宏)	着替え・休憩 16:00
9	16:40 ↓ 17:25	剣道具の衛生と竹刀 の整備・身体の安全 (百鬼史訓)	剣道の基本技術実習 及び指導法 2 (角 正武・林 邦夫)	剣道の基本技術実習 及び指導法 7 (網代忠宏・熊本 正)	結果発表 閉 講 式 16:30
10	17:45 ↓ 18:30	剣道に必要な基本的 体力(筋力) トレーニング論 (百鬼史訓)	剣道の基本技術実習 及び指導法 3 (角 正武・林 邦夫)	審判の基本技術実習 4 日本剣道形補習 1 (福本修二・吉田泰将)	※実技実習には担 当講師以外の先生 も指導補助につく。
11	18:40 ↓ 19:25	剣道の試合審判規則 の意義と役割の理解 (福本修二)	剣道の基本技術実習 及び指導法 4 (井上茂明・林 邦夫)	審判の基本技術実習 5 日本剣道形補習 2 (福本修二・吉田泰将)	形 採点官 村山 慶佑 基本技採点官 井上 邦夫
	19:25 ↓	夕食・自由時間・入浴	夕食・自由時間・入浴 (懇親会)	夕食・自由時間・入浴	

差に応じた指導法（身体面・精神面・技術面）

② スキル（技・技術）の種類に応じた指導として

オープンスキル（予測できる技・予測が可能な技）

クローズドスキル（予測が不可能な技・変化に富む）

③ 言語による指導＝言葉によりわかりやすく指導する。手順を指導する。意味付け。

④ 視覚的指導＝正しい指範を示す。見せて凶解する。（ビデオ等の活用）

⑤ 運動感覚的指導＝経験を持たせることにより自信を持たせる。

⑥ メンタルプラクティス（イメージの連想）

メンタルリハーサル（予備的・心理的な調整）

イメージトレーニング（心理的なコンディショニング）

昼から審判の基本技術と剣道の基本技術について実習が行われました。審判実習は講習生同士が試合をして実際に審判を行うわけですが、審判実技テストも兼ねている関係で緊張した中で行われました。チェックポイントとして

① 有効打突の判定

② 審判時の姿勢・位置

③ たっている時に両足のかかどがついているかどうか

④ 旗の保持（基本姿勢の時両旗は体側につけること）

⑤ スムーズな動きができるかどうか（いかに見やすい位置に素早く動けるかどうか）

⑥ 宣告の声が明瞭でわかりやすいかどうか

⑦ 旗を斜め上方に上げるとき指の先から腕までピンと伸びているかどうか

⑧ 分かれの宣告のタイミング

等で細部にわたって指導が行われました。また疑わしい判定については試合を止めて一本にしている技、いけない技などが具体的に説明がありました。

剣道の基本技術の実習については、短い時間で集中的に行うように配慮するようにと次のような具体的な指示がありました。

(1) 初心者には「打ち」の感覚を理解させるために、まず、その場で足を動かさずに打突させ、次に一歩前にでて軽く打突を行い、さらにそれができれば大きく一歩前にでて強く打ち二歩さがって繰り返し練習を行う。

(2) 飛び込み面を打たせる時には元立ちは後ろにまっすぐに下がる。

(3) 段階を踏んで教えることが大切である。①その場で打つ②すり足で打つ③踏み込んで打つ④飛び込んで打つ⑤一歩攻めで打つ。この①～⑤を面、小手、胴で練習を行う。

(4) 払い技についても払い面・小手を一拍子の動作で手先だけでなく腰を入れて手足体を一致した動作で行う。

あくまでも内容は指導法であり、自分の剣道をより高めるようなレベルではないと思ったが、原点にもう一度帰ることにより自分の剣道を見直すことができたのが大きな収穫でした。夜は講師の先生を交えての懇親会があり、酒・ビール等を酌み交わしながら

ら講習生同士で自分の剣道観を互いにぶつけ合い夜遅くまで剣道談義に花が咲いたことは言うまでもありません。

三日目(八月三十一日)、午前中は、技術の指導効果の評価法・対象別初級者の指導法・指導計画の立案等指導法についてより専門的な講義があり、時間がたつにつれ、だんだん熱気にあふれる講習となりました。午後からは剣道形の講習で、一本目から三本目までで自分の剣道形をもう一度見直すこととなりました。

最終日(九月一日)一・二時限日は剣道の技術・体力トレーニングでストレッチの実技が行われた後は全てテストです。日本剣道形の筆記試験、実技の筆記試験が午前中に行われ、昼からは実技のテストです。筆記試験では日本剣道形理論は「形の効果・目的について」、基本技術理論は「二つの疼痛について(腰椎分離症・オズグッド病・右踵骨骨端症)」と応じ技について技を一つを抽出してその技がどのようなものか説明するというものでした。実技試験は会場中が張りつめた緊張感の中で行われました。AグループとBグループに分かれ、二つのコートで日本剣道形三本と基本技術の演技を行いテストを受けました。

剣道形は三本目まで打太刀・仕太刀を交代して行い、基本技術は講習で学んだ基本技と面返し胴・小手抜き面を仕掛ける側・応じる側交代しながら全員が両方行いました。

全日程が終了して帰り支度を整えた後、閉講式が行われ、講習生全員の合格が発表されました。石原岡山県剣道連盟会長が「参加者が定員に満たなく少々寂しい講習会になるかと思っただが皆さ

んの熱意で大変実りのある講習会になりました。中四国地区は弱小地区で肩身の狭い思いをしているが地方でもやればできるんだという強い意志で、社会体育指導員として頑張ってもらいたい。」と話してくれました。閉講式が終わり後の諸手続きを済ませ解散となりましたが、班の人とはまたどこかの段審査会場・道場・大会等で再会をと約束して帰途につきました。

講習が終わった二週間ぐらい後に全剣連から認定証(サイズは段の免状を一回り大きくしたくらい)と記念写真と試験結果が送付されてきました。結果は合格だがコメントとして審判技術・基本技術・剣道形のワンポイントアドバイスが添えられており、私にとっては大変ありがたいアドバイスとなりました。私見ですが、この資格は現在、少年剣道教室等で指導されている先生方は言うまでもなく、学校の先生方(中学校・高校)で特に剣道経験がなく剣道部顧問になっている先生方には是非この講習会に参加してほしいと思いました。また参加資格も現在は三段以上であるが、三段以下(初段・二段)でも参加できるような方向も考えてほしいものです。

最後になりましたが、この講習会に参加のチャンスを与えて下さった県剣道連盟の諸先生方に感謝を申し上げると共に「社会体育指導員」として恥ずかしくないように日々努力精進していきたいと決意しています。今後ともよろしく願います。

アメリカ派遣 日本武道代表団に参加して

警察支部 近藤 巨

巨



《はじめに》

日本武道館、国際親善協会等の主催により日米両国の友好親善、相互理解を図る目的で去る六月十三日から二十日まで

の八日間日本武道代表団のアメリカ派遣が行なわれました。

派遣団体は、現代武道九団体・古武道二流派の十一団体で、各団体六〜七名が参加し、総勢七十六名の編成となりました。剣道は、原田源次範士八段（岩手県）を団長に、青木彦人範士八段（大分県）・飯島栄範士七段（茨城



演武会

県）・今田富士夫教士八段（大阪府）・滝川貞司教士七段（静岡県）・森田讓教士七段（全日本剣道連盟）に私の七名が参加しました。

今回の派遣先は、カリフォルニア州の南部に位置するロングビーチ市と、ハワイ州ホノルル市の二箇所でした。

ロングビーチ市では、市庁舎訪問・体験稽古会・演武会・交流稽古会、ホノルル市では、交流稽古会と、忙しい日程でした。

《体験稽古会》

六月十四日午後からロングビーチ・コンベンションセンターにおいて、日本の武道を知ってもらう体験稽古会が行われました。各武道ごとのコーナーに分かれ、集まった観客の中の希望者に指導するものです。

剣道は、明日行なわれる演武会の予行演習を兼ね日本剣道形・基本技等をしていたところ、まわりに見物客が集まってきました。その中の子供を含め七名が体験稽古会に参加しました。



体験稽古会

今田先生が片言の英語と身振り竹刀の握り方・足さばき・素振りなど基本の指導を懇切丁寧に行ないました。そのあと私が防具を着け実際に打ち込みをしたのですが初めての剣道に大変興味を持ったようで真剣そのものです。熱心に取り組みすぎて足裏のマメを潰す者まで出てくる程の熱の入れようで、予定の二時間があつという間に過ぎてしまいました。

《演武会》

六月十五日、ロングビーチ・コンベンションセンターのアリーナで演武会が行なわれました。

午前中は、各武道毎にリハーサルを行ない午後二時から演武会が始まりました。アリーナには約一〇〇〇人ほどの観客が入っていました。会場が広いため少なくて感じました。

入場行進・開会式、両国の国家斉唱（アメリカ国歌を歌ったのが十一才の女の子で、澄み切った歌声に感動しました。）ロングビーチ市長の挨拶の後、いよいよ演武が始まりました。

各武道十分余りでそれぞれ趣向をこらし演武を行ないます。まず弓道から厳かに演武が始まりました。剣道は、少林寺拳法の後三番目に行ないました。原田八段、青木八段による日本剣道形、つぎに森田七段の元立ちで私が基本打ちを行ない、引き続き地元元少年剣士三十名が参加し、我々が元立ちとなって切り返し・掛かり稽古を受け、最後に、今田八段、滝川七段による模範稽古を披露し演武を終了しました。会場からは惜しみない拍手を頂きました。

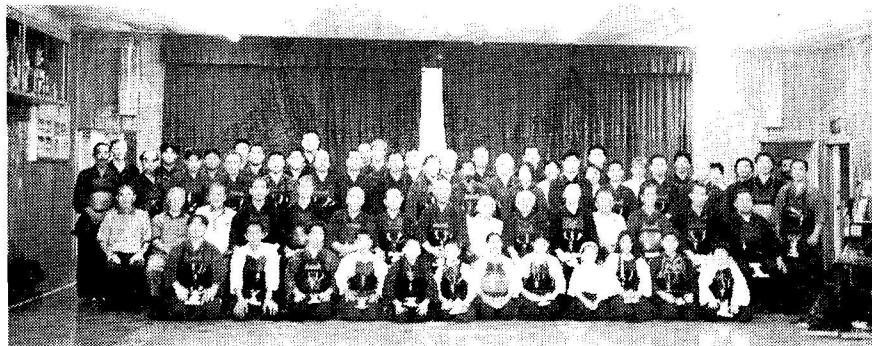
その後も、各武道それぞれに気迫あふれる演武を披露し、無事演武会を終わりました。

《交流稽古会》

ロングビーチ市では、六月十四日（ノーオーク道場）・十六日（ロングビーチ道場）の二回、ホノルル市では、十八日（謙志館道場）の一回稽古会を行ないました。

地元の剣士は、日本の剣道を実際に目にする機会がほとんどなく、両市の方とも、私たちの訪問を心待ちにして下さったようです。

アメリカでは、約一〇〇〇人程の剣道人口があり、その内の約六〇〇人程がこの南カリフォルニアで行なっているそうです。現在、南カリフォルニアには、十九の道場があり、普段は個々に稽古を行なっているようですが、日本から剣道にやってくるという事で、今年の世界剣道選手権大会にアメリカ代表で参



交流稽古会（ロングビーチ市）

加していた鬼塚・古村・揚選手をはじめ大勢の人が稽古に駆けつけてくれました。ほとんどの人が日系の方で、稽古中何度も日本で稽古をしていると錯覚するくらいでした。

少しびっくりしたことは、道場に土足であることです。公民館を道場に使っていたためかも知れませんが、日本では絶対に考えられないことで少々面食らっていました。

稽古の後は、お母さん方の手料理に舌鼓を打ちながら剣道談義に花を咲かせ友好を深めることができました。

ホノルル市の謙志館道場は、ビルの一階にある立派な道場で、ハワイ剣道連盟会長以下四十名程と稽古を行いました。

《おわりに》

八日間という短い日程でしたが、期間中見るもの聞くものすべてが新鮮に感じられ、本当に貴重な体験をさせて頂きました。

また、異国の地で日本の伝統文化である剣道を、用具不足など不自由な環境の中で一生懸命行っている姿を見て、環境の整った日本で稽古できる幸せを改めて噛み締めるとともに、もっと真剣に剣道に取り組んでいかななくてはと、心が引き締まる思いがいたしました。

このような機会を与えて頂いた関係者の皆様にお礼申し上げます。報告いたします。



この講演は、平成九年四月五日に中四国学生剣道連盟が主催した「平成九年度リーダーズセミナー」（鳴門教育大学主管）で行われたものであります。 文責 木原資裕

私と剣道

堀江 幸夫

剣道への憧れ、恩師との出会い

私は大阪生まれで、それも河内というみなさんには馴染みの薄い所なんですけれども、河内の金剛山という名を言いますと楠公さんということが昔から出てくるんですけれど、皆さんには楠公さんと言っても誰だろうということだと思います。とにかく大阪の南の田舎ということです。

私が剣道と関わりを持ったのは、十歳の時だったと思います。当時、喧嘩早いじめっ子だったので親が心配して何かさせよう、精力善用ということだったんだと思います。それともうひとつ憧れを私は持っていました。

当時、河内に四條畷中学を出て一高、東大と進学された安岡正篤という方がおられまして、この方は陽明学の日本的泰斗といわれ言うなれば人間学の大家です。東大を出られて一カ月くらい文部省で勤められ、そして勤めをやめて自分で塾を開いて生涯を生

き抜かれ、昭和二十年八月十五日の終戦の詔勅に手を加えられた方です。現在の日本の財界人のほとんど、あるいは政治家も安岡先生に教えを求められたと言う人なんです。四條畷中学時代には朝から晩まで剣道ばかりしていたそうです。親御さんが、特にお母さんが勉強せず剣道ばかりするということで心配されていたのですが、それでも一高へ入られた。そして、東大を受験され、その発表を見に行かれた所、人間の情と言いますか後ろの方からずっと見て行きました。前百番位で疲れてもう落ちたんだらうとあきらめて帰ろうとしたところで（その当時は成績順に合格発表されていました）、友達にばったり会って「お前一番だ」といわれ、ほんとうに一番で合格された方なんです。そういうように剣道をしながら東大を出たといった話に憧れをすっかり持った気がします。

そして稽古をはじめて五年くらいしてから、ふと大阪の天王寺の武徳殿に稽古に行ったときにすばらしい先生に会ったわけなんです。その方は鹿児島出身の酒匂久（さこうひさし）という先生です。その先生のすばらしい剣道に魅せられてからいよいよ剣道にのめり込んでいきました。

恩師は終戦後、剣道ができない状態でしたので、郷里の鹿児島へ帰られました。当時、初めて選挙で町村長を決めるという制度になった時、第一号の町長さんになられました。我々が長い間ご指導いただいた先生が町長になるということは、想像もしない事でした。しかし、わずか四十三歳で亡くなったわけですが、その

先生の後ろ姿を慕うて今日まで剣道を続けてこれたんじゃないかなという気もします。剣道との関わりあいは、やはりすばらしい師匠に会ったということではなかるうかと思えます。



菩提心を発すること

そういうことで今日の話の本論に入ります。私が稽古を続けて今日まで続けている間にいろいろな壁に突き当たりました。随分稽古をしてきたつもりですが乗り越えられない壁が幾重にもあったということ。どうしてこの壁を破ろうかということ、いろいろと暗中模索したわけです。そのうちふと目にとまった本、それが道元禅師が書かれた「学道用心集」、この書物は禅の修行の入門書と言われる心得帳で十カ条からできております。特にそ

のうち前の五カ条が剣道におき比べて見ますと非常に役立つと思ふのです。

第一には「菩提心を発すること」。いわゆる仏教の本当の心を知って初めて修行の第一歩へ入るということです。これを剣道へ置き換えますとなぜ剣道をするのか、剣道は何か、と全剣連では剣の理法による人間形成の道だという説き方をしている訳なんです。要は、剣道をする目的は、剣の修行、錬磨によって人間としてのありようを探って行くことになろうかと思えます。ですから、ただ漫然と面をつけ、小手をはめ、竹刀をもって相手と打ち合いをする、その打ち合いの巧拙だけで剣道の全てだというのはなく、「剣道とは何か」、それを通じて自分は何を求めていくかというようなことをまずしっかり踏まえたうえで稽古をして行かなければ得ることが少ないと思えます。

最近、私の周囲でも高齢の方々が「もう最近若い人は自分の前に稽古に来てくれない」とそういう愚痴をこぼされる方々がたくさんおられます。それにはいろいろ理由があると思いますが、考えてみるとなぜ剣道を今日までしてきたか、何を求めるのかという考えを抜きにして、ただひたすら竹刀を振りまわしてきた結果でなかるうかと思えます。

プロ野球で川上哲治という巨人の監督がおります。現在も評論家として活躍されています。川上さんは私と同じ年なんです。その川上さんが三十代の現役のときに打席に立つと「球が目の前で止まる。だから打つんだ。」という有名な言葉を残しております。

す。当時、私はその言葉を聞いて、何と思ひ上がった事を言う奴なんだというような感じを正直いってもっていました。しかし、私も最近になって目の前で、相手の小手がとまる、さあ、打ってくださいと言わんばかりの相手の面が見えるというようなことがたまたまあるわけなのです。そこでかつて川上監督が言ったあの言葉は本当だったということがわかりました。本当に剣の修行の目標がしっかりしておけばそのところまでいけるのではないかと気がするわけです。いずれにしましても稽古をしている以上、剣道をやる以上、どこへその稽古の目標を置くかということが一番大切なのではないかと思ひます。

正法にのっとり剣道をする

二番目には、「正法にのっとり修行をして行くこと。」これを剣道に置き換えますと基本をしっかりと身につけることです。基本の修行に卒業はありません。また、基本と共に忘れてならないのは礼法、特に最近よく稽古しながら感ずることは非常に礼法が乱れています。と申しますのは、稽古の前後に必ず礼をしているのですが、礼の仕方が少しも上手になってこない。あれだけ毎日稽古する度に行っている礼をしているのに。そういう感じを最近すぐくうけるわけです。

日本の礼儀というのは三つから成り立っています。三儀といつて一つ目は辞儀、二つ目は行儀、三つ目は書儀。この三儀をもつて礼儀といわれているのです。ちょっと簡単に説明しますと辞儀とは言葉使いの事です。常に相手を尊敬する姿勢があればくずれ

た言葉遣いはいできないのですが、さりとして友達同士で肩肘はった言葉遣いというものもこれは面白くないことなので、一応相手をみて言葉を改めるといふ事が大切ですね。朝会えば「おはようございます」、昼ならば「こんにちは」、夜なら「こんばんは」と、そういうような言葉が自然にでる、また、自然に行われるということが辞儀ということだと思ひます。

二つ目の行儀、これはいまさら言うまでもなく、一挙手一投足の節度という事だと思ひます。電車の中で狭い通路に足をくんで乗る人の衣服に靴の裏が触るといふことをもう平気でやっているのが現在の姿です。他人に迷惑をかけない、嫌な思ひをさせない、そういう配慮が行儀です。

三つ目の書儀というのは、これは古い時代からせめて手紙は筆で書くくらいの字を心得ましようということです。自分の名前、あるいは手紙ぐらひは墨をすって筆で書けるといふことが大切です。

そういう意味で剣道で言う基本のほかに礼儀も含めてしっかりと基本を止しく身につけましようといふことに置き換えられるのではないかと思ひます。

徹底的に稽古する

三番目は「行ずる」といふことです。剣道で言えば稽古をするといふことです。技をしっかりと稽古により磨いていく。ともかくにも私どものやっている剣道というものは稽古をぬきにして語ることのできないのが剣道なのです。ですから、徹底的に稽古

をする。徹底的に技術を磨くということが大事なのです。昔から日本のことをことあげしない国と言われてきているのです。それはどういふことかといいますと、行ずることによって得たものの上で語れといわゆる机上の空論はやめて自分がしっかりやりぬいたその中で得たものを出すという意味です。ともかくにも、徹底的にやり抜いた上で得たものをいわゆる単なる知識の受け売りではなくして、いったん自分の腹の中にしっかりといれて、徹底的に咀嚼して、そして自分の血肉になった自分のことばで表現するということです。その意味でもいかに行ずることが大変大切なことになろうかと思えます。

特に剣道の場合、私は座右の銘を「只管稽古」、ひたすら稽古をするというそういう言葉を座右の銘として今日までやって参りました。これは禅宗の中に「只管打坐」、ひたすら座れ、なにも言うことはない、とにかく座禅するんだ、黙々と座れとそういう意味の言葉をちよつと拝借してきて、座ることと、稽古すること置き換えているわけです。そして最近では「稽古見性」と、平たく言えば悟るという意味になる訳ですけど稽古することによって自ら悟る。ですから、稽古すれば稽古するだけに壁に突き当たってどうしようもないことに何度か突き当たるといふ繰り返しの中で稽古をしていく。そうすると前の壁が少し風通しがよくなる。そして、得たりとまた頑張ればまた突き当たる。それをまた乗り越えてと繰り返しの中でだんだん稽古の何か分かりかけてくるのではないかと思えます。

ですから、今は皆さんの時代は徹底的に稽古するといふことが大切なのではないかと思えます。

もちろん、剣道の場合、徹底的に稽古する、問答無用、とにかく徹底的に行ずる。やってやってやり抜くんだというそういうことで生涯、あらゆる問題を乗り越えていけると確信をもって言えるように思います。また、そのことによつて先程の川上監督の目の前で球が止まるのだという心境までいけるのではないのでしょうか。そのためには行ずることが大切であるということがあります。

純粹な心をもて

四番目には「有所得心不可」。所得を期待する心はだめですよ。これはどういふことかと申しますとこれをしたらこんな見返りがあるんだという計算づくでやるようではだめ、見返りを期待しない、純粹な気持ちをもちなさいということですよ。

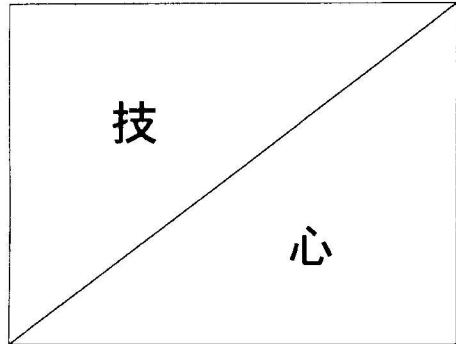
皆さんの知っているダルマさんというのがありますね。あのダ



ルマさんは達磨という禅の大和尚をかたちどったものですが、この達磨大師はインドの人ですけれどもインドから中国にいったときに非常に仏教に力を注いだ皇帝がいたわけです。その皇帝が自分の国にたくさんのお寺を建てて仏教の信仰に非常に努力しておったときにそこに達磨大師がいかれたらしいのです。そこで皇帝はこれだけわしは仏教に力を注いでおるからどんな見返り功德がありますかとという問いかけをしたようですが、達磨大師は一言「無(何も無い)」と答えたそうです。皇帝陛下は、随分と不満だったらしいが手法を変え、質問したが達磨大師は「全て無」と答えたそうです。そういう伝説から道元禅師も有所得心不可というのをここに持ち出してみたのだと思います。

これは剣道に置き換えたとしたら、二人で稽古をするので、本来剣道の稽古というのは切磋琢磨なのです。お互いの欠点を指摘しながら向上していこうというのが稽古の心なのです。ですから、自分だけが打って相手には打たさないというようなことではだめですよと、そのように受け止めていけばいいのではないのでしょうか。さらっとした純粋な心、そういうものを大切にしましょうという事です。もちろんここで一番考えないといけないことは、理業一致という言葉があります。技と心の関係を図解してみますと、仮に出発点が初段、弐、参、四段と考えていくと初段のときは全てが技であり、心の分野はまず本当には、箸の先でつついたくらいしかない。五段くらいまでなると技と心の兼ね合いが半々位になる。そのあとはほとんど心がウェイトを占めます。八段に

段位 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10



心である訳なんです。いわゆる理なのです。ですからいつまでも技だけで剣道をしていこうという考え方をしているとそれは到底できないと、ですから、理合いというものを、しっかりと身につけることが大切になるわけです。稽古をすれば稽古をしただけにそれが自然と分かってきます。理が無くして打てないとよく皆さんの試合のときに前へ前へという前へ出たら必ず打つ、大事なものは相手が自分の攻めに恐れているかどうかということの確かめがないままに前へ出ればいい、先に打てばいいと、そういう感覚で稽古をしている限りではこれは到底年いって面は付けられる

なりますと、もう技はどうでもいいんだ、心だけだ……ですから先程の話ではないのですが年いって若い人が稽古にかかってくる若い人はいというのは、もう技では到底、若い人にはついていけない、いわゆる瞬発力、スピード、体力、そういうことを十分に考えての上での考え方ですけど、それに対抗しようとしても到底かなわない訳で、それをどうカバーするかということが

状態にならん訳です。ですから、剣先の攻めあいの中でいかに自分の剣先が相手の心の平安を乱しておるか、それをしっかりとわきまえてそして打つか、あるいは引き出して打つか、その辺の理をしつかりと考えていく、それが大切なわけです。ただいたずらに打ちたい、勝ちたい、それだけでやっておると理が見えて来ないということが言えるのではないのでしょうか。ですから、心のこだわりを捨てて、打たれれば打たれたでいいわけです。それは反省の大きな材料になるわけです。ただ打たれた、悔しいということだけで、解決していくと理が見えてきません。どうして打たれたか、その反省があれば、理はおのずからみえてくるということではないかと思えます。昔から「打たれて強くなれ」ということをわたしの子供のときからよく言われてきた言葉です。打たれることを恐がる心を除くために、また、打たれると打たれることを嫌がる心のこだわりを除くそのために打たれていくということでしょう。

ちょっとおかしい言い回しですけど、自分だけがいい子になって相手にはいい子にさせない。そういう気持ちがあったのでは到底ほんまものに届きません。それがこの四番目の所得を求めるなということに、つながるのだと思います。要は、心のこだわりを持たずに稽古することが一番いい方法だと思います。

正師につけ

五番目は、「正師につけ」、正しい、素晴らしい先生につけたいということです。本当は私はこれが一番目にくる方がいいのではと思

うのですが。しかし、まあ五番目に道元禅師が書かれたんですから、五番目が正しいかも分かりません。いずれにしてもいい先生に師事するということの大切さをここで言っているわけです。これは禅の道も、剣の道も変わらないわけで、常に素晴らしい先生に付くということが大切なことだということは皆さんもよく理解されていることだと思います。

最近、名鑑なんか見ますとあなたの師匠という欄があります。その欄に随分の多くの先生の現代のそうそうたる先生の名前を羅列しての方が多いようです。私はそういう欄にはじくなった酒匂久先生の名前だけを書いておられます。というのは、私の剣道の日々の修行の目標は師匠でした。師匠の一挙手一投足、本当に私は指導していただいたのは僅か六年間だったのですが、ただ六年間の指導をいただいたことが、剣道生活六十年以上になります。私が依然として私の脳裏から離れません。先生だったからこそ言われたとか、先生だったからこの

堀江幸夫先生



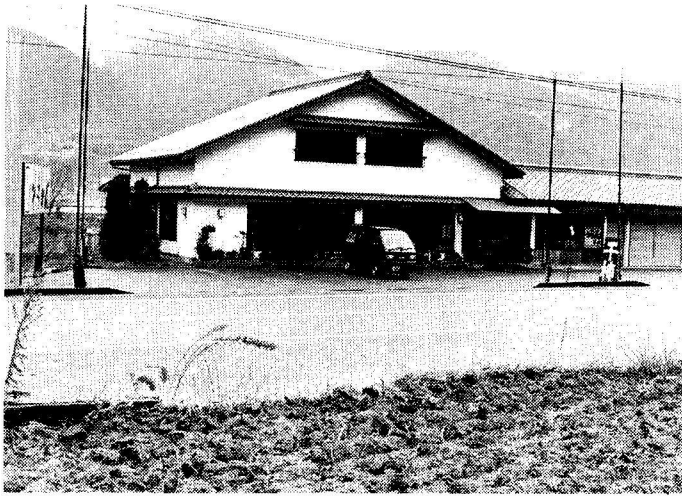
技をこうせられたとか、なんとなく幻のような現のような、そういう繰り返しの中で今日まで続けられてこれたような気がいたします。

いずれにしても大切なことは、我々が日常の生活の中で本当に真剣に取り組んでおらなければ、どんな素晴らしい先生にお会いしても、どんな素晴らしい先輩に出くわしても、どんなに素晴らしい書物に出くわしても、それは一介の行きづりの人ということで済んでしまいます。大切なのは自分の受け皿をしっかりと大きなものにしていくことです。いい先生を求めるといことは、求める自分をいかに向上させていくかということが大切なのではないかと思うわけです。

私は自分を人生の宿屋にたとえております。いかに素晴らしい人を私の宿に泊まってもらうか、いかに素晴らしい人をこの宿へ引き付けるかということで、常に自分は人生の宿屋をもって任じております。そういう意味で皆さんもこれからの長い長い人生どうぞしっかりと自分自身を大きい器にさせていただいて、素晴らしいものを全てその器の中に吸収していくようにしていただければ、豊かな人生が開けてくるのではないかと思います。私自身、剣道文化という中で今日まで七十七年の人生を送ってきたということが本当に私から剣道を除いたら何にも残らない人生であったわけですが、剣道をするることによって多くの書物とも触れることができましたし、多くの素晴らしい先輩にも会えましたし、

素晴らしい先生にも巡り会うこともできました。また、中四国学生剣道連盟の中で多くの若い皆さんたちともお付き合いできたということ喜び、誇りとしております。





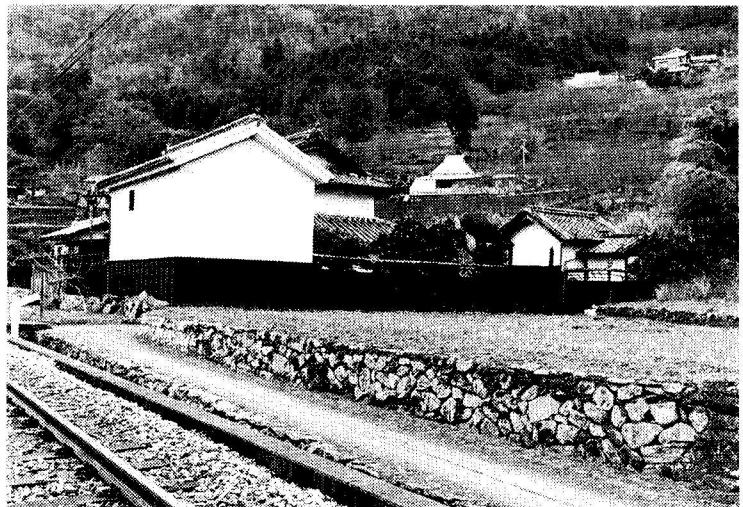
資料二 国道112号線沿いの前田屋敷跡、現在は岡部飲食店
このウラに道場があった。

代庄屋職を勤めた。
安永五年（一七七

出口は不詳であるが、讃州十河存保の家臣であったが、後讃岐の生駒氏に仕えた。故あって前記毛田村に来て土着し、農を営み生計を立てていた。天正十三年（一五八五）蜂須賀氏阿波に入国するや、前田は政所の職に任ぜられ、以後七

代日前田源藏光康が富田元藏に宝暦十年（一七六〇）六月吉日に授与した免状で、うかがうことができる。（資料一）それには、天台山大僧正頭軍 衣非丹石入道——飯沼太左衛門尉——堀隠岐守——石田小兵衛尉——鈴木意柳入道——松田宗波入道——都筑伝兵衛尉——前田馳龍敦当——前田源藏光康と書かれている。この都筑伝兵衛は備前国岡山藩の浪人で讃岐から阿波の美馬郡郡里に来て、対岸三加茂村毛田馳龍敦当に伝授した。それから前田家が代々丹石流の師家となっている。前田家の

（六）十二月十七日 国老稲田九郎兵衛に、冥加銀を指し上げて譜代家米に取り立てられた。このような格式を持つ家柄で、前田家の元の屋敷は今の国道一九二号線沿いの岡部飲食店の所にあった。（資料二）その北方に現在も『ならい場』という地名があるが、そこに道場があった。その後、屋敷は現在の国道、JR線の上手に移転した。（資料三）そして、この道場の庭には門人達が建立した丹石流開祖衣非丹石入道の石像があったが現在は毛田小学校の上手にある。この石像を土地の人々は『丹石さん』と呼んで尊敬し、戦時中は武運長久に御利益があるとして、参拝者が絶えなかったという。（資料四）前田家は丹石流師家として左記のように明治まで続いた。



資料三 現在の前田邸、JR徳島本線の上手

馳龍敦当——如流光康——将常入道——玄路味蔭

元文四年 宝曆十年 享和三年 文化十三年

(一七三七) (一七六〇) (一八〇三) (一八一六)

没 頃 頃 頃

倩朔——黄流利方——龍子利和——○——清八

文政十二年 天保十三年 文久四年 明治四年

(一八二九) (一八四二) (一八六四) (二九〇五)

頃 没 没 没



資料四 丹石入道石像

馳龍敦当(元文四年五月廿七日卒、法名諦義常通)は丹石流兵法書『兵法独劇目録』に註を施し刊行した。(資料五)

その上巻には

「武士尊□一何之

事 武ハ戈ヲ止メ

ル事ナリ。上ハ六

芸五常之長タリ、

故上書ク一と書き

始め、百箇条の武

士として戦陣にお

ける戒めが書かれ

ている。下巻には

紅葉之巻、守護之

巻、実録之巻、の

四章に分かれ、切

の理合が書かれて

いる。

馳龍敦当は三好

郡昼間町の垂水六郎助に丹石流剣術を伝授した。垂水家では昼間で

五十町歩を持つ大百姓で、一族には宝曆四年(一七五四)に南宇

帯刀を許され無役人になった者や家老の池田氏の譜代家来となり、

岩水の姓を賜った家来もある。今も三好郡の昼間幼稚園の近くに

『道場跡』という地名が残っている。(資料六)六郎助の子信郎監

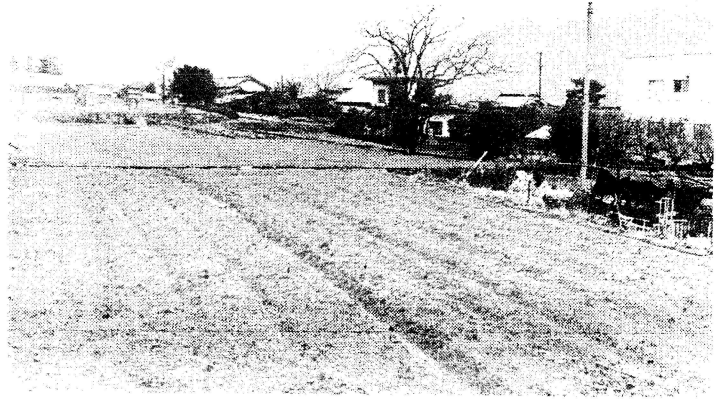
清は法名「泰鏡院而覚了心居士天明三癸卯年(一七八三)二月五日卒」(資料八)父六郎助よりも優れた達人だった。この信郎は



資料五 馳流敦当の刊行した兵法独劇目録

三好郡州津村の郷
鉄炮小頭来代・宇野
右衛門裕英に指南
した。裕英の法名
は『浄生院密室照
闇居士 文化十三
年（一八一六）季
二月二十一日卒』
（資料七）と記さ
れている。

来代家の家祖は
北代甚内家定とい
う、土佐長岡郡の
小城主で長宗我部
氏に仕え、度々
軍功があり、元親
に従い阿波大西に侵攻して以来、三好郡津村に永住（この間に北
代を来代と改姓）した。子来代雅楽は出子城を修築し、此処によ
り戦乱で荒廃、散逸した農民を集め、村の復興に尽力した。四代
の後裔弥五右衛門の二男六左衛門は分家して、郷鉄炮小頭、苗字
帯刀を許された。この五代の孫が宇野右衛門である。この宇野右
衛門裕英は寛政元年（一七八九）に徳島藩が幕府に五十名の剣術
指南を選んで付け出したその中の一人である。その子来代半三郎



資料六 昼間村垂水六郎助・垂水信郎の道場跡 中央の畠



資料八 州津鉄炮小頭来代宇野右衛門裕英の墓



資料七 垂水信郎盈清の墓

資料十の解説

元治元年甲子年九月十一日拝上 御触之事

急々御意を得候。然らば御郡代様 来る廿日池田において

劍術御見分、仰付けられ候につき、左記名面の内、他参等いたし

居候者は、早々罷歸り御見分に間違ひ無く罷出候様

相配申さるべく候、万一病氣等にて罷出難き者の義は

有姿書付を以て、来る十二日迄に申し出られるべく候

随て右十三口中庄野村長善寺境内又は八幡宮社地

にて、下稽古いたし申すべく間、不参こり無き様

人別へ申し廻わし其村々庄屋宅へ打揃い、同村へ

朝四ツ時、右場所へ罷出候様、重々相配申さる

べく候、且、此状明日中に毛田迄相達し申すべく候、

以上

九月十日

古郷 吉右衛門

三木 直三郎

西加茂、東加茂、中加茂、西庄、中庄、毛田

右村々庄屋衆中

中庄村

田中岩太郎、沢田平三郎、大野兵衛、仁右衛門、宇藏、伊之吉

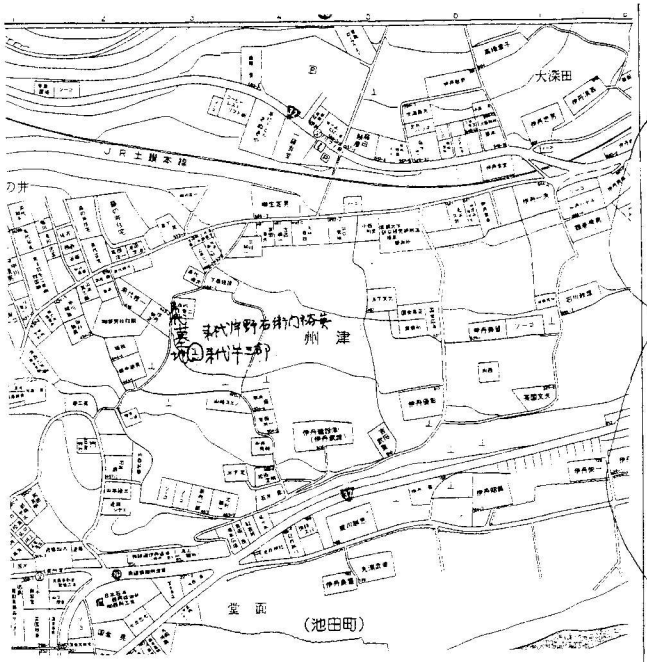
国太郎、光藏、清兵衛、厩藏、友三郎、幸三郎、岩太郎、由太

郎、林五郎、虎藏、喜三郎、源太郎、松藏事淺藏

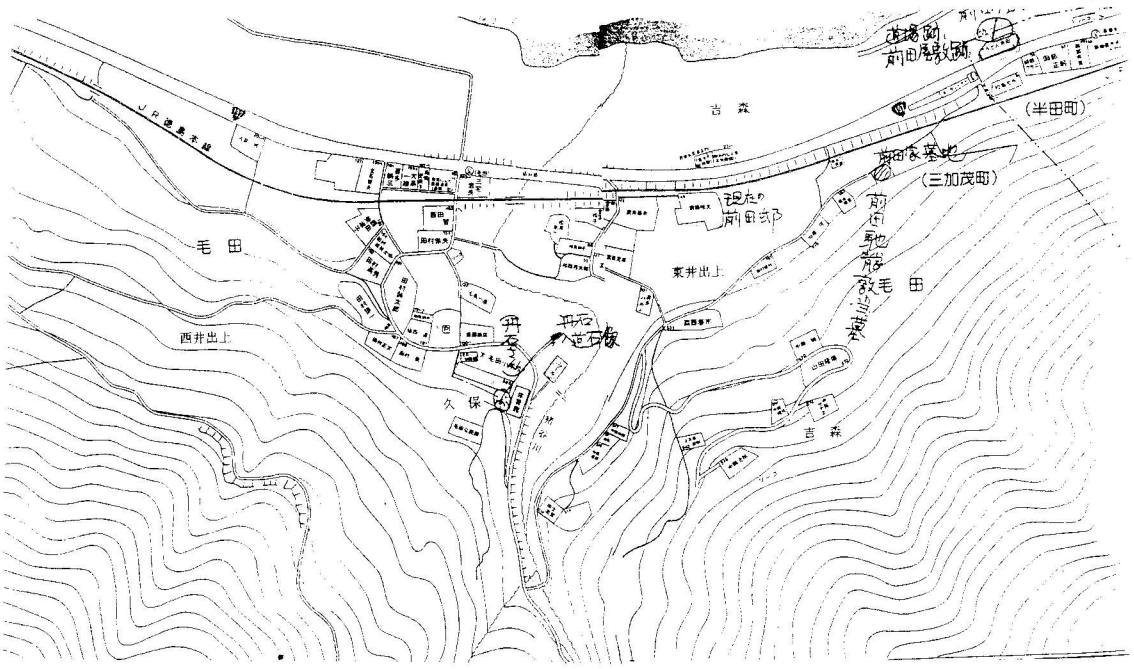
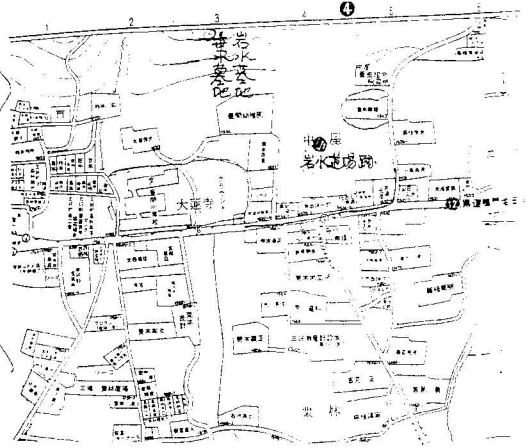
毛田村

武井藤十郎、大嶋宇兵衛

尚以、右名面の外にも劍術稽古いたし居候者にも夫々通達いたし
申さるべく候、此状毛田村より指し戻さるべく候、以上。



谷間村



支部だより

〈板野西支部〉

支部長 金 西 重 記

支部の会員五十名、阿讃山脈と吉野川に挟まれた東西に長く約二十五km、上成町、吉野町、上板町、板野町、藍住町の五町で形成する支部が板野西支部です。会員のほとんどは、地元の先生方ですが、五町の中でも藍住町、板野町は特に、新しく住民なられる方が多く、その中からの会員も増えつつあります。私自身も十数年前に藍住町の住民に成った者の一人です。そういった事情で、要請されている剣道史の調査も、支部の歴史についてもよく理解出来ておりません。心苦しい思いをしています。支部長としての任期も四期目に入っており、今支部が持っている行事を大事に取り組むこと、県剣道連盟からの案内を支部内で周

知徹底させることが重要な仕事だと思いいれからも頑張りたいと思っています。

今支部では、教士七段高田豊先生、高田亮先生を筆頭に現在実際に竹刀を握り稽古をしている会員の先生は約四十名です。

総会を三月に各町持ち回りで、板野署防犯剣道大会を県予選会を兼ねて四月か五月に藍住町で、県民スポーツレクリエーション祭を十月か十一月に板野町で開催しています。支部の運営は、支部顧問・副支部長・

会計・各町理事・監事・県剣道連盟役員の方を中心に行っています。各行事開催は開催日の数ヵ月前に集まっていたたく会議で、内容等について検討し実行しております。

各町には、クラブ、教室、スポーツ少年団と名称は色々ですが少年剣道の教室が一つずつあります。各教室とも指導者の不足に悩んでいます。

また、一般の先生方の稽古会は、各教室とも少年指導の合間に行っていますが、藍住町武道館での稽古会は、毎週火曜日、木曜日、土曜日の午後八時より一時間余り、

少年指導の終了後十分な時間を取り稽古をしています。最近では、他支部の七段、六段の先生方も含め多数参加していただけるようになり、常時十数名(多い時は二十名を超える)先生方が、汗を流しておられます。尚、初心者から有段者、しばらく剣道から離れていたが再開してみようという方、近隣の先生方のご来訪を心から歓迎している道場です。

平成九年・十年度 支部の役員構成

支部顧問	出口 嘉平	教士六段(土成町)
〃	高田 亮	教士七段(藍住町)
〃	高田 豊	教士七段(藍住町)
〃	高橋 栄	練士五段(板野町)
〃	糸谷 文雄	練士六段(土成町)
〃	岡島 茂雄	練士六段(吉野町)
支部長	金西 重記	六段(藍住町)
副支部長	岡田 良人	四段(板野町)
支部会計	兵頭 新平	練士六段(徳島市)
支部理事	出口 正春	三段(土成町担当)
〃	高木 一重	三段(吉野町担当)
〃	板東 伸光	五段(上板町担当)

” 福永 徳 練士六段

(徳島市・藍住町担当)

” 加集美由岐 三段(板野町担当)

支部監事 渡辺 正光 三段(藍住町)

” 森本 敦子 五段(吉野町)

県剣道連盟役員

審議員 高田 豊 教士七段(藍住町)

理事 高田 亮 教士七段(藍住町)

中部理事 兵頭 新平 練士六段(徳島市)

事業部長 高田 亮 教士七段(藍住町)

評議員 本浄 光男 練士六段(土成町)

” 国友 雅彦 五段(藍住町)



各種大会に参加して

第十九回

全国スポーツ少年団

剣道交流大会に出場して

徳島至誠館 中山 希実子



「絶対、全国へ行くんだ」と強く心に誓って出場した、全国大会県予選の五・六年女子の部で優勝することができました。今まで一生懸命練習をしてきてほんとに良かったと思います。

全国大会は団体戦が四年生から一名、五・六年男子が二名、五・六年女子が二名の計五名が出場できます。中学校は個人戦の、男女二名です。私の道場では、全国大会に出場することを目標にしています。今年

至誠館から選手として三名が、いっしょに出場できてとても嬉しかったです。

一月の終わりから全国大会までの二ヶ月間、週一回の強化練習をしたり、警察学校へ練習に行きました。選手全員おそろいのユニホームも作りました。

全国大会は三月二十八日から三十日まで千葉県安房郡富山町で行なわれました。

富山町には広い海水浴場がありました。夏には、高校や大学の水泳訓練や合宿で百軒以上の民宿がいっぱいになるそうです。私達が泊まった民宿は料理がとてもおいしかったです。

大会一日目は午後から入場行進と開会式でした。その後で全国の選手と監督の先生方との合同練習をしました。

二日目は団体と個人戦の予選リーグです。徳島は一試合目で岩手県と対戦して四対〇で勝ちました。二試合目は地元の千葉県と対戦して三対一で勝ってベスト十六に勝ち進みました。中学校の個人予選リーグは、楠原君が二勝してベスト十六へ進みました。小林さんは一勝一敗で、惜しくも決勝トー

ナメントへは進めませんでした。負けた試合では、小林さんの方が攻めていたし、一本に近い技をたくさん打っていたので勝つと思っていたのに残念でした。予選リーグ終了後、みんなが用意したおみやげを輪になって回して行くゲームをしました。私達が用意したのは阿波踊りの竹人形でした。私のは誰に行ったかは分かりませんが、私に回って来たのは福岡県の選手の博多人形でした。今も大切にしています。

最終日は団体戦と個人戦の決勝トーナメントが行なわれました。徳島は北海道と対戦しました。先鋒が一本勝ち、次鋒が二本負け、中堅が一本勝ちして二対一で徳島リード。いよいよ副将の私の出番がきました。勝って勝負を決めてやると思って戦いましたが、メンの二本負けをしてしまいました。軽くて打たれた気がしないのに、相手に旗が上がっていて、悔しくてたまりませんでした。大將が頑張ってくれたけど、相手はまったく勝負をせずに守ってばかりで引き分けられました。結果は勝者二対二、本数四対二の本数負けでした。私が勝っていた



らと思うと、みんなに悪くて涙が出ました。個人戦の楠原君は得意のメンを決めました。が、コテ二本を返されて負けてしまいました。閉会式では団体、個人のベスト十六の選手全員に敢闘賞の賞状をもらうことができました。徳島に勝った北海道チームは準優勝をしました。

私がこれからはなければいけないことは、前に攻めて一本になる面技を覚えることです。それと、試合中に必じ技を自由に出せるようにすることです。

この大会が小学校最後の試合となりましたが、中学校へ行っても一生懸命練習して、全国大会優勝を目指して頑張ります。

決勝トーナメント

徳島 2 (2) 1 (4) 2 北海道

※個人戦試合結果

男子個人予選リーグ

楠原 メー 中石 (和歌山)

楠原 不戦 1 谷藤 (岩手)

決勝トーナメント

楠原 1 ココ村山 (広島)

女子個人予選リーグ

小林 1 ド 山田 (青森)

小林 コメー 中谷 (福井)

出場選手

団体戦 (小学校)

監督 中山 繁輝 (至誠館)

先鋒 河田 真良 四年 (至誠館)

次鋒 瀬口 裕子 六年 (延野)

中堅 横田 直也 六年 (至誠館)

副将 中山希実子 六年 (至誠館)

大将 久保 美栄 六年 (海川)

個人戦 (中学校)

男子 楠原 光謹 (阿南中)

女子 小林かおり (阿南中)

※団体戦試合結果

予選リーグ

徳島 4 (8) 1 (1) 0 岩手

徳島 3 (6) 1 (1) 1 千葉

全日本都道府県対抗 剣道優勝大会に参加して

次鋒 白木洋一



五月三日の大会に向けて本県選手団は、二日に徳島を発った。今大会の徳島県チームは、

監督に近藤 百先生、先鋒 長井 薫（教員）・次鋒 白木洋一（教員）・中堅 吉田 茂生（県警）・副将 臼木 崇（中央武道館）・大将 木原資裕（教員）という布陣で臨んだ。

大会会場は、本年度なみはや国体の体操会場となると聞いていた。前日、高速艇から会場へと練習に出かけた。会場は、半地下になってい上に屋根の大部分は盛り上がなされ一見したところでは、大きな体育館があるように見受けられず、全員が入り口を探すのに迷ってしまったほどである。しかし、体育館内に入るとまさしく新築間

もないといった感じで、まだ塗装のにおいのするサブ道場で稽古をした。本会場となるアリーナも見学したが、「こんなところで試合ができるのか。」と感激を覚えるほど立派なものであった。

宿舎に帰り、明日の対戦相手を聞くと、予選リーグは北海道・佐賀の両県であった。北海道は昨年準優勝、さらにその前は二年連続優勝という輝かしい戦績を誇っている。もちろん今年も優勝を狙っているメンバーで、特に中堅からは栄花直輝・副将 林朗・大将 古川和男選手という最強の布陣であった。また、佐賀県も中堅に実力のある稲富政博選手を置き、まとものあるチームであった。我が徳島県チームは開き直った気持ちで、「全力を出しきる」を合い言葉に試合に臨むことを約束した。

余談になるが、私はプログラムで自分のポジションである次鋒の参加選手を見ていて驚くべきことに気がついた。次鋒の中で、年齢を見ていくとなんと全国一番目の年齢であったのだ。ちなみに次鋒の部で最年長は、秋田県の進藤選手であった。いつの間

にか自分が次鋒の部では年長者になるのかと思うと、何ともいえないものがあった。それとともに、他県から出場している若い選手には負けられないという気持ちもわいてきた。また、徳島県の若手教員の奮起を期待しつつ、こうなれば最年長になるまで出場してみたいとも思った。

話を元に戻すが、大会当日になり予選リーグ一回戦。相手は北海道、ここはなんとしても勝たなければならぬ。チーム全員、負けたらその時点で決勝トーナメントへの進出は厳しいということをおわかっていた。先鋒戦、長井選手は北海道の福井選手を良く攻めるも互いに決めてなく引き分け。続いて次鋒戦、相手は佐賀選手。気持ちの若さだけは負けないつもりでがんばったのがよかったか引き分けに持ち込むことができた。

中堅戦、吉田選手と栄花選手との対戦。栄花選手は四月に京都で行われた世界選手権にも出場しており、稽古十分の様子。吉田選手も勝負強さを発揮して、相手に打ち間をつくらせず、実にうまい試合運びをし

ていたが、後半にさしかかったあたりで突きを取られてしまった。

副将戦、白木選手対林選手の一戦。白木選手は私と名字が似ているためによく間違えられるときがあるのだが、剣道においては私とは全く違う。まさしく勝負に関して抜群のセンスの持ち主である。試合の展開は、白木選手が仕掛けて林選手がその起りを狙うといった展開となった。私は林選手の間のとりのうまさに改めて驚かされた。白木選手が二段・三段の連続技を仕掛けてようやく面金にとどく程度なのである。しかも林選手はそんなに大きく退いているように見受けられない。そして、最後には中心をしっかりと取って相手に一本になる打突を許さない。さらに驚くべきことに後半、白木選手の面をすりあげ面にかえし「面すりあげて面」という技の説明付きの発声。試合を見ていた他のチームからもどよめき。こんな大舞台でよくできるものだと敵ながら感心した。そんな林選手を相手に、白木選手大健闘の引き分け。まさに勝ちに等しい引き分けであった。

いよいよ大将戦。このころになると北海道相手に接戦している我が徳島県チームの後ろには多くの見学者。差はわずか一本のみ。後は我が大将、木原先生に託すのみである。

静かな立ち上がりから若干の攻防の後、古川選手のかつき小手。実に機会よく決まったかと肝を冷やしたが、一本にはならず。(このかつき小手は、この後何回となく木原先生をおびやかすことになる。)後半になり古川選手が、じれたような感じで十分に間を詰めずに面に跳ぶと、木原先生は待ってましたとばかりに見事な返し胴。審判の旗は一斉に挙がる。我慢して相手の攻撃をしのいでしので、本当にこの機会しかないというところをとらえた返し胴は、今でも私の脳裏にやきついていてる。

試合はそのまま時間となり、大将戦は一本勝ち。この結果、北海道とは引き分けという結果になり、徳島対佐賀・北海道対佐賀の結果次第で決勝トーナメント進出の可能性がでてきた。

徳島県対佐賀戦は先鋒惜しい小手を放つ

もその後相手の面(部位はとらえていなかったように思うが)が一本となった。しばらくして小手を決められ二本負け。

次鋒戦、自分ではいいところをとらえた面が二本あったように思えたが有効とはならず引き分け。

中堅戦、吉田選手と稲富選手も双方決めた引き分け。同じく副将戦も引き分け。大将戦、先に面をとり、小手を返され、面を決めての勝ち。その結果本数差で佐賀県の勝ちとなった。佐賀対北海道は三対〇で北海道の勝ち。北海道が決勝トーナメント進出となった。決勝トーナメントは北海道が優勝し大会の幕を閉じた。

この大会に参加して私なりに考えたことは、徳島県の剣道のレベルは全国的にみるともなら劣ることなく、あえて差があるとすれば勝負への執着心・決定力不足ということである。優勝を飾った北海道と、初戦とはいえ引き分けたということがそれを表している。

貴重な体験をさせていただいた報告としてはあまりにも簡単なものですが、試合の

「この時点での展望」

午前中の試合が終わったこの時点での四県の戦績は別載成績表の通りでした。ご覧のように徳島二勝、愛媛と高知は一勝で一見徳島の優位と見えますが、得本数で愛媛が多く、勝者数も一者差という内容で徳島としては次の香川戦に是非勝つて三勝にしておかないと愛媛対高知戦の結果如何では愛媛に優勝をもって行かれる可能性が……、ということ。私香川戦に必勝を期すよう要請しました。

③第三試合（対香川戦）

試合は私の期待通りには進まず香川の優位の内に進み七将終了時で④～④⑨の大苦戦となって、先の私の要請がかえって選手にプレッシャーをかけたものでは……と強い反省の念にとらわれていました。ところがやはり徳島デス。ここにきて又々ネバリの真価を発揮し、六将鈴木選上が難敵真鍋選上を③二本ストレートにほぶり、名手木原選上がこの日好調の三浦選上を目的の覚めるような②二本に決め、次

いで近藤選士が①の一本勝とし、ついに四⑨～四⑩に追いつきいよいよ試合は大詰となりました。三将香川の坂口選士は難剣の試合功者、これに對して本県北条選士の堂々とした正剣の見事に心底拍手を送りました。惜しくも引き分け、副将戦にバトンタッチ。香川北条選士は気力体力抜群の歴戦の上で、これを如何にサバクか？が勝負のカギと思われました。予想通りの大迫力の前に場外反則二回が勝敗の分れ目となり、大将坂下選士の一本勝も及ばず結果は五⑩～五⑩と一本差に泣いたのでした。

「優勝への道」

それにしても「そうならないように……」と願っていた他力本願の姿となり、「神様、仏様、高知様」の心境。愛媛が勝者数七以上取って、勝となると愛媛の逆転優勝となる訳です。しかし結果は吾に味方し、四⑩～四⑩で代表戦となり、更に延長戦となって、攻勢だった高知の吉野選手が③を決め、高知が辛勝し、自動的に徳島の優勝が決定した訳です。まった

く最後の最後まで苦しい大会でありました。

「むずび」

以上が大会の詳細です。選上諸士は本当によく頑張ってくれました。又諸先輩、そして剣友の皆さんのご支援を頂きましたことを心から感謝致します。連盟の定例稽古会も定着し、素晴らしい若い力が育っています。これを基盤に更に精進し来年の四国大会も強力メンバーを揃え万全の三連覇が成るよう大きい夢を抱いて筆をおきます。

多謝

〈選手名簿〉

徳島県剣道連盟	年令別		女子		20代		30代			40代			50代		60代
	監督	高田 豊	先鋒	次鋒	十一将	十将	九将	八将	七将	六将	五将	四将	三将	副将	大将
	氏名	高田 豊	木下文江	山崎砂織	飯田栄一	吉田茂生	白木 崇	佐々木和人	福多雅英	鈴木伸一	木原資裕	近藤 亘	北條憲治	柏原 浩	坂下孝之
	年令	72	22	23	27	29	32	35	37	41	42	42	50	56	60
	段位	七	四	三	四	五	六	六	六	七	七	七	七	七	七
	職業	無職	公務員	会社員	教員	警察官	団体職員	教員	教員	刑務官	大学教授	警察官	自営	自営	無職

〈第1試合〉

県名	順位	先	次	11	10	9	8	7	6	5	4	3	副	大
愛媛	氏名	河野	小笠原	三浦	井上	濱田	片上	村上	大城戸	光宗	田辺	戸梶	山本	酒井
	得点	10/5	⊗ ⊗	⊗ ⊗	×	一本勝 ⊗	⊗ ⊗	×	⊗ ⊗	⊗ ⊗	⊗ 一本勝	一本勝 ⊗	一本勝 ⊗	一本勝 ⊗
徳島	氏名	木下	山崎	飯田	吉田	白木	佐々木	福多	鈴木	木原	近藤	北條	柏原	坂下
	得点	8/6	⊗ ⊗	×	一本勝 ⊗	⊗ ⊗	×	⊗ ⊗	⊗ ⊗	⊗ 一本勝	一本勝 ⊗	一本勝 ⊗	一本勝 ⊗	一本勝 ⊗

〈第2試合〉

県名	順位	先	次	11	10	9	8	7	6	5	4	3	副	大
徳島	氏名	木下	山崎	飯田	吉田	白木	佐々木	福多	鈴木	木原	近藤	北條	柏原	坂下
	得点	8/5	×	⊗ ⊗	×	一本勝 ⊗	×	×	×	⊗ ⊗	⊗ 一本勝	⊗ ⊗	⊗ 一本勝	×
高知	氏名	和食	門田	坂田	東野	三谷	宇賀	中越	石川	大西	坂本	辻	岡本	吉野
	得点	4/2	⊗ ⊗	⊗	×	一本勝 ⊗	×	×	×	一本勝	一本勝	一本勝	一本勝	×

<第3試合>

県名	順位	先	次	11	10	9	8	7	6	5	4	3	副	大
徳島香川	氏名	木下	山崎	飯田	吉田	臼木	佐々木	福多	鈴木	木原	近藤	北條	柏原	坂下
	得点	$\frac{10}{5}$	⊙ ⊗	⊙					⊙ ⊗	⊗ ⊙	⊖ 一本勝			⊙ ⊗
	点	$\frac{11}{5}$	⊙	⊙ ⊗	⊗ ⊙	⊗ ⊙	⊙ ⊗	⊗ ⊙		⊙	一本勝	⊗ ⊙	⊗ ⊙	
	氏名	秋山	香西	福井	石川	西本	旭	玉浦	真鍋	三浦	国重	坂口	北條	今川

<第49回四国四県剣道大会成績表>

	愛媛	高知	徳島	香川	勝数	勝者数	得本数	順位
愛媛		$\frac{10}{4}$	$\frac{10}{5}$	$\frac{8}{5}$	1	14	28	3
高知	$\frac{10}{4}$		$\frac{4}{2}$	$\frac{7}{4}$	2	10	21	2
徳島	$\frac{8}{6}$	$\frac{8}{5}$		$\frac{10}{5}$	2	16	26	1
香川	$\frac{7}{5}$	$\frac{5}{3}$	$\frac{11}{5}$		1	13	23	4

<四国四県剣道大会成績一覧表>

回	年次	優勝県	開催地	回	年次	優勝県	開催地	回	年次	優勝県	開催地
1	昭24	香川	高松市	18	昭41	愛媛	高知市	35	昭58	愛媛	松山市
2	25	高知	高松市	19	42	愛媛	北條市	36	59	愛媛	池田市
3	26	香徳	高松市	20	43	徳島	鳴門市	37	60	香川	宇高市
4	27	徳島	高松市	21	44	香川	丸亀市	38	61	香川	高松市
5	28	香川	高松市	22	45	高知	高松市	39	62	愛媛	愛媛市
6	29	高知	高松市	23	46	愛媛	山形市	40	63	愛媛	鳴門市
7	30	愛媛	居浜市	24	47	香川	徳島市	41	平1	香川	丸亀市
8	31	高知	新徳市	25	48	愛媛	高松市	42	2	香川	丸亀市
9	32	香川	坂出市	26	49	高知	高松市	43	3	香川	丸亀市
10	33	高知	高松市	27	50	香川	山形市	44	4	徳島	丸亀市
11	34	愛媛	高松市	28	51	香徳	阿高市	45	5	徳島	丸亀市
12	35	香川	高松市	29	52	香川	高松市	46	6	香川	丸亀市
13	36	香川	高松市	30	53	香川	高松市	47	7	香川	丸亀市
14	37	香川	高松市	31	54	愛媛	今治市	48	8	徳島	丸亀市
15	38	愛媛	高松市	32	55	香川	鳴門市	49	9	徳島	丸亀市
16	39	香川	高松市	33	56	香川	高松市				
17	40	香川	高松市	34	57	香川	高松市				

西日本勤労者 剣道大会を終えて

警察支部 平野 誠 司



毎年六月に行わ

れるこの大会は、
県警剣道部にとっ
てその年の行方を
占う大会として貴

重な存在である。さらに今年には連覇のかかっ
た大事な大会でもある。

大会は相変わらず三百余りのエントリー
数があり、我々もA・B・Cの三チームが
出場することになっていたが、勤務の都合
で結局Aチームには、先鋒に吉田茂生、中
堅に山室雅幹、大将に私といった布陣で、
連覇に挑むこととなり、Bチームとともに
二チームの出場となった。

予選トーナメント。試合数もバカになら
ない。試合と試合の合間に一時間から二時
間の待ちがあり、何度となく集中力が途切
れそうになる。結局、予選トーナメントが

終了してベスト十六が出揃ったのは、午後
四時を過ぎていた。

決勝トーナメントには、警察六チーム、
教員二チーム、実業団八チームが残り、い
よいよ勝負はこれからといった雰囲気であ
る。

決勝トーナメント一回戦。相手は西日本
銀行Aである。特に実業団と対する時には
相手は負けて当然、当たればラッキーとで
もいうか、捨て身で襲いかかってくる。こ
ちらも必死に凌ぐ。結果は○対○の代表戦。
相手は先鋒が、こちらは私が代表となり、
開始間際私の打ったかつき気味の小手が決
まり、どうにか退けることができた。

準々決勝の相手は、香川県警Bチーム
(坂口、玉浦、寺岡)で、これは強敵であ
る。しかし、この対戦から新鋭・山室の動
きが変わった。持ち前のガッツで先を終始
取りきって玉浦選手に諸手突きを炸裂させ
た。この一本で逃げ切った。

準決勝は愛媛県警Bチームである。先鋒
戦は、全国警察個人戦で四段以下の部優勝
の高宮選手に対し吉田は、出小手を先制さ

れるも引き面で追いつき引き分け、中堅・
成長株の門田選手に対し山室は豪快な面を
二本連取、依然好調。大将戦も勝って二対
○で下す。

いよいよ決勝戦。相手は先程下した愛媛
県警のAチーム。A・B共に倒されてはと
相手も相当気合が入っている。

先鋒戦。相手池内選手に対して吉田は、
積極的に取りにいったところを逆に小手二
本連取される。後がもうない中堅戦。新谷
選手に対し山室は、果敢に攻めまくるも両
者有効打なしの引き分け。

そして大将戦。二本勝ちで代表という苦
しい状況で、大将浜田選手に対し、私も一
本も奪うことができず、そのまま一対○で
惜しくも最後で涙をのんだ。

連覇は逃がしたものの、準優勝という結
果で終わった今年の大会も、やはり三人制
がゆえに、団体戦の難しさ、怖さ、反対に
おもしろさ等、他にない実感がたくさんあっ
た。多人数制であればあるほど、流れはゆっ
くりで小さいかも知れないが、いざ三人制
ともなると、一つの流れは、速く強烈であ

る。したがってその勢いを食い止め、又はその流れを変えるには、大変なパワーが必要で、容易なものではない。ここで大切なのは、やはり「先」であろう。個々の立合いの中の「先」は言うまでもないが、チームとして見た時、この「先」という流れをつかんで、リードしていくことが、勝利へ連がる重要なポイントであろう。三人制であるがゆえに、最初の一本、初太刀をとるということがこの大会で大切なことだと思う。

今後、これらのことを頭に置きながら、常に頂点を狙って、尚且その内容も注目される県警剣道部であるように修練を続けたいと大会を終えて、そう思うものである。

全国家庭婦人 剣道大会に参加して

女子部 北村 環

平成九年八月四日、初めての全国家庭婦人剣道大会へ向け出発しました。予定の飛行機の到着が遅れるというアクシデントにみまわれ、少々不安な気持ちになりはしたものの、ベテランの四人の先輩方との会話がはずんだおかげで、無事東京に着くことができました。

試合当日の八月五日、監督の手塚十三子先生をはじめとし、先鋒 北村、次鋒 岩見さゆりさん、中堅 竹内佳代子先生、副将 木村みどりさん、大将 長谷川陽子さんの五人のメンバーで緊張の中、順番を待ちました。メンバーの中には、足の痛みを我慢して出場されている方もあり、まず第一は怪我をしない様に、そして全力を出しきろうとお互いを励ましあい、奈良県との対戦をむかえました。結果は

奈良 三〇 徳島



手塚監督から一人一人に対し、的確な指示をしていただき、それらを反省しながら福島県戦にのぞみました。結果

徳島 2(3) - 2(2) 福島

本数での勝ちをおさめることができました。五人が力を出しきったものの、一勝一敗という成績で残念ながらトーナメント戦には

県名	順位	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝者数	勝本数
奈良		北村	鎌塚	安田	長岡	椎葉	3	(6)
		×	☉×	☉☉	×	☉×		
徳島			☉	☉			0	(2)
		北村	岩見	竹内	木村	長谷川		

県名	順位	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	勝者数	勝本数
徳島		北村	岩見	竹内	木村	長谷川	2	(3)
		☉		☉☉		×		
福島			×		×	×	2	(2)
		根本	白戸	氏家	國井	鈴木		

勝ち残ることができませんでした。

今回、この大会に出場させていただいた事は、私にとって、大変貴重な体験となりました。日本武道館で試合をしたいという学生の頃からの願いがかなったこと、はりつめた緊張感の中で団体戦に出場できた事、全国の女性の剣道を見ることができ、勉強になった事など……。これも剣道連盟の先方をはじめ、御指導いただいた多くの方々のおかげであると、心から感謝しております。本当にありがとうございます。今後、この貴重な体験を生かし、自分の目指すべきところへむけて、努力してゆきたいと思っています。

第十回全国警察少年 剣道大会に参加して

徳島至誠館 副館長
徳島文理中・高校教諭

中山 繁輝



本大会には、阿南警察署チームの監督として三年連続で出場することができた。また、

幸運にも昨年も全国大会で準優勝することができ、本誌の十三号で『決勝戦に駒を進めて』と題して大会報告をさせて頂いた。今回は阿南署チームの選考会である、阿南防犯大会から県大会、そして、全国大会までをご報告する。

平成九年五月二十四日(土)阿南市武道館に於いて、阿南警察署管内防犯大会が開催された。阿南市、那賀川町、羽ノ浦町の剣道教室・道場の十一チームの小学生四十四名と中学校七校の二十八名が参加し、熱

戦が展開された。各チームの出場枠は五・六年生から四名と少ないため、選手の選考に頭を悩ます。私の道場では、強化練習を重ね大会に望んでいる。試合の結果、小学生四名、中学生三名の阿南警察署の代表選手は左記の通りである。

小学校ノ部

優勝 大石 真也(桑野川)

準優勝 玉田 康朗(徳島至誠館)

第三位 山脇 英資(新野)

第三位 湯浅 和俊(徳島至誠館)

中学生ノ部

優勝 住友 直城(阿南一)

準優勝 山ノ井 徹(阿南一)

第三位 中西 啓(阿南)

監督は小学校ノ部で出場選手が多いチームの指導者を選出されることが慣例になっていた。今年も有賀先生から私が任命を受けた。監督をさせて頂くことは嬉しいことであるが、阿南署は昨年までに、七年連続八回の全国大会出場を果たしているだけに、

『負ける怖さ』へのプレッシャーを感じる。しかし、この不安を取りのぞくには『常に挑戦者の気持ちをもって、他のチームに負けない練習をすること』を目標に、県大会優勝を目指し強化練習に取り組んだ。遠藤一美先生・河田(富東)・村井(阿南一)・曾根(阿南工)・玉田(文理)の各先生方からご指導を頂くことができ、選手達は苦しい練習を乗り越えた自信と試合に対する心構えが出来てきた。

六月二十七日(金)県大会前日、午後六時から一時間の練習を開始。気持ちが集中したところに、台風接近の為に明日の大会が延期された連絡が入る。選手達も気が抜けた様子であったが、『もう少し稽古する時間ができた』と選手に声を掛け、気を入れ直す。

七月十二日(土)警察学校に於いて、県下十五の警察署チームの精鋭が参加し、県防犯大会が開催された。二チームの予選リーグが行なわれ、二年連続で決勝戦で顔を合わしている川島署と対戦。粘り強い勝負をするチームであったが三対一で勝ち、続く

脇町署にも五対〇で勝利。決勝トーナメント一回戦、毎年優勝候補に挙げられている驚敷署との対戦。攻撃力があるだけに恐いチーム。中堅までが勝負と思っていたが、先鋒が勝って波に乗り中堅まで三連勝で三対一で勝利して、今日一番の山場を乗り切る。準決勝は徳島西署を四対一と快勝し、決勝戦は毎年安定した力をもっている小松島署と対戦する。結果は二対二、本数五対四の辛勝であったが、試合内容は各自の持味を生かした剣道が出来ていて安心して見ることができた。両チームの戦いは決勝戦にふさわしい素晴らしい内容であった。勝因は『どのチームよりも、全員が全国大会に行くんだ』という気持ちが強かったことだと思う。この気持ちは強化練習によって生まれたものだと思う。

県大会終了後、引き続き週一回の強化練習を実施し、たくさんの方にご指導を頂いた。中でも、本年度全日本選手権に出場する福多先生(城北高教)にご指導頂く機会を得た。上段対中段の素晴らしい模範稽古を見せて頂いたことは、選手達にとっ

て貴重な体験となった。

八月四日(月) 出発前日、毎年恒例の稽古会並びに激励昼食会が阿南署で行なわれた。遠藤一美先生、阿南署長、防犯協会の方から激励のお言葉を頂き、選手達も全国大会での健闘を誓い合った。

八月五日(火) 選手、監督、阿南署から青木博志先生(元県警機動隊で活躍)の九名。そして選手の家族十八名の応援団で出発。

八月六日(水) 東京江東区新木場の警視庁武道館で大会が開催された。会場は冷房が完備されているので、真夏であるが疲れを感じさせない。開会式終了後全日本女子選手権優勝の経験を持つ警視庁の寺地甲美対川畑百重の両選手の模範試合は印象に残った。あの力強さとスピードは日頃の練習の厳しさを物語っていると感じた。いよいよ大会開始。予選リーグ一試合日広島と対戦し三対二で勝利。

続く大阪戦では四対二で快勝し、ベスト十六に進出。決勝トーナメント一回戦は、三年前本大会で準優勝をしている長崎県の

橋道場チームであった。結果は二対〇で敗れたが、全員が互角の勝負をし素晴らしい試合内容であった。

橋道場はその後勝ち進み、決勝戦では岡山を敗り、優勝を果たした。悔しさは残ったが、選手の健闘に『負けて悔いなし』の心境で、すがすがしい気持ちであった。

特に決勝戦の長崎県橋道場と岡山県水島警察署の対戦を観戦して次のことを感じた。

一、終始攻撃の剣道をしていた。受けるだけの技はなく、必ず必じ技が出ていた。間合いの取り方が絶妙である。

二、打突の好機を逃がしていない。技が尽きたる所を、追い込んだり、引き技を多彩に出して一本にしていた。

三、全身に気力がみなぎっていて、一本を大切に試合を展開していた。『気迫と勝負への執念』を感じた。

日頃の厳しい練習の成果が、この大舞台上で発揮されるのだろうかと思った。

日頃、全国大会に参加の機会が与えられない私達にとって、今回の全国大会出場は良い経験と素晴らしい思い出を残すことが



出来た。十数回に及ぶ強化練習に耐えぬき、県大会、全国大会共にあふれる闘志と精神力で活躍した七名の選手に対し惜しめない拍手を送りたい。また、全国大会出場までお世話を頂いた阿南警察署並びに阿南防犯協会の皆様、強化練習にご指導を頂いた遠藤先生はじめ多数の先生方に心からお礼申

し上げます。

最後になりましたが、徳島県剣道連盟の今後益々のご発展をお祈り申し上げ大会報告と致します。

試合結果

予選リーグ

徳島 3 (6) ー (3) 2 広島

徳島 4 (8) ー (1) 1 大阪

決勝トーナメント

徳島 0 (1) ー (5) 2 長崎

(ベスト十六チーム賞受賞)

準決勝

長崎 4 ー 0 岩手

岡山 3 ー 1 鹿児島

決勝

長崎 2 ー 1 岡山

四国高校選手権大会で 個人優勝して

富岡東高校 一村 美穂子



平成九年六月十日・十五日に、愛媛県で四国高校選手権大会が開催されました。私達

富岡東高校は県総体で個人ベスト8に六名入ることができたので、今度京都で開催されるインターハイへの第一歩として四国高校選手権大会に挑みました。そして私にとってこの大会に出場できるのは最後なので、団体・個人ともに上位を目指してインターハイの自信につながりたいと思っていました。一日目の団体予選リーグが終わるとすぐに個人戦が始まりました。四国各県のベスト8に入った実力のある人たちがばかりなので、私は緊張して不安でいっぱいでした。一回戦は高松南高校の柿下さんと対戦しました。先に団体戦に出て体は温まってい

ましたが、個人戦というまた違った雰囲気、少し緊張して思うように試合をすることができませんでした。しかし自分のペースを心掛け、延長戦で小手を決めて二回戦へ進出しました。

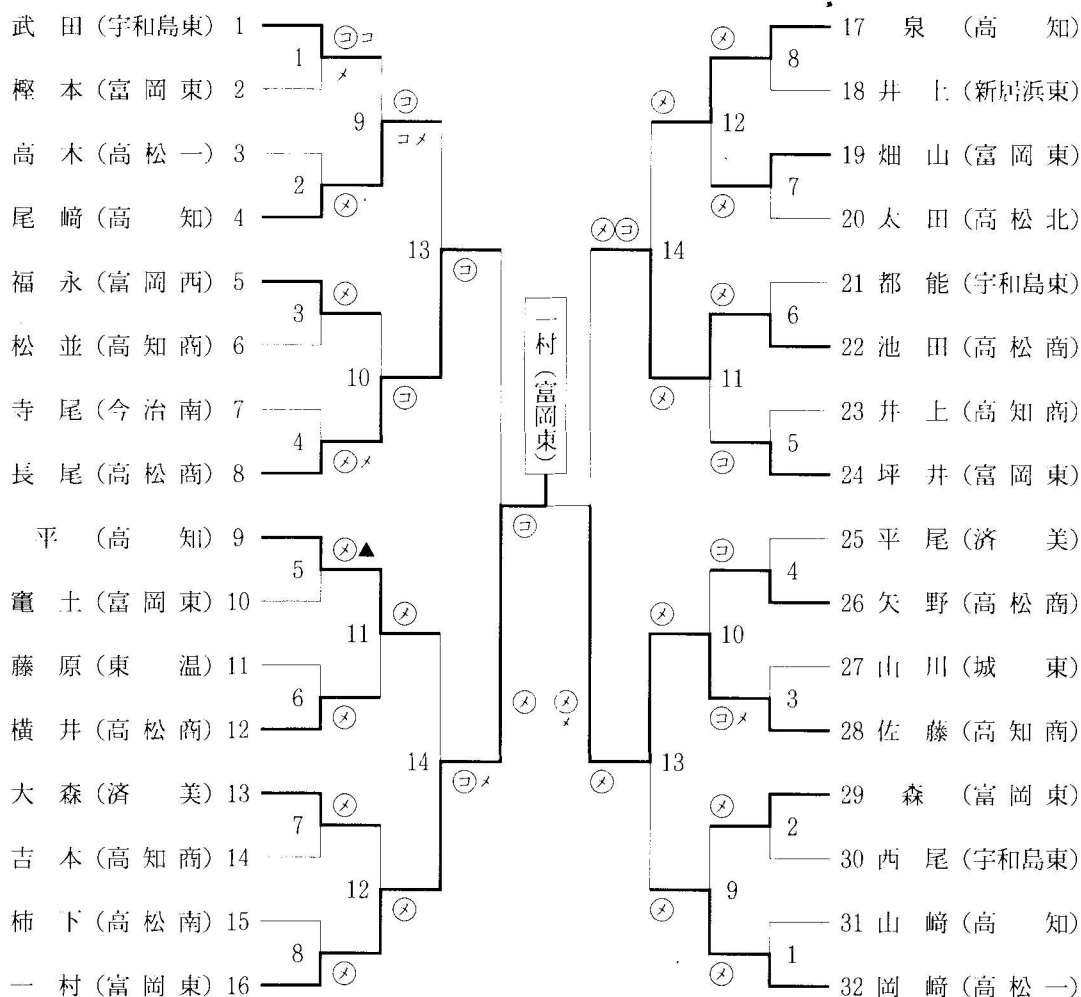
二回戦は地元の済美高校の大森さんと対戦しました。延長が続き、相手に押され気味でしたが、疲れてもあきらめず思い切って打っていき面を決めました。

三回戦は前の試合のように気迫負けしないように気合を入れ直し、高知高校の平さんと対戦しました。あまり対戦したことのない上段でしたが、河田先生の上段に対する御指導や仲間のアドバイスのおかげで二本勝ちすることができました。

次の準決勝は高松商業高校の長尾さんと対戦しました。試合前に長尾さんが「次にあたるけど、お互いががんばろうな。」と一言してくれたのが剣道をしている仲間として、とてもうれしかったです。私はいい試合になるように思い切って打っていき、面を決めて決勝戦へ進みました。

そしていよいよ決勝戦になりました。相

女子個人戦組み合わせ



手は何度も対戦したことのある高知商業高校の佐藤さんでした。優勝まであと一歩というところまで近付き、河田先生は「お前の好きなようにやってこい。」と声をかけてくださいました。そして私は決勝戦の雰囲気には負けない気迫で試合に望みました。結果は延長戦で小手を決め、優勝を手にすることができました。

この結果は、毎日道具をつけて丁寧にそして厳しく御指導してくださって河田先生をはじめ、いつも励ましてくれた仲間や時間を見つけてお世話をしてくださった保護者の方々の存在が大きかったからこそ得ることができたと思います。私にとってこの四国高校選手権大会は一生忘れることのできない思い出になりました。本当にありがとうございました。先輩のみなさん、これからもがんばってください。

インターハイに出場して

富岡東高校 畑山 尋美



平成九年八月二日から、いよいよ私達三年生にとって最後の大会となるインターハイが

京都府立体育館で開催されました。この日のために、私達は毎日の苦しい練習にも耐え日々努力してきました。しかし試合の前日の夜は緊張で寝つけず、夜中に何度も目を覚ましては、いろんな思いが脳裏をよぎりました。その度私は「自分の剣道をするぞ。弱気は最大の敵だ。」と言いきかせました。

予選リーグが始まり、私達の試合が少しずつ近づいてきました。近づくにつれて私は自分に「落ちつけ。三年間、練習」という薄い紙を毎日積み重ねてきたんだ。」と励まし、自分たちの力を信じて、みんな

円陣を組み、もう一度気合を入れなおして試合に臨みました。一回戦は千葉県立船橋高校と対戦しました。初戦ということもあり、みんな緊張していましたが、日頃の河田先生の教えを思い出し、いいところを

確実に決め、二対一で勝つことができました。二回戦は地元の京都府吉ヶ岡高校でした。相手高は強豪でしたが、気迫とチームワークで試合に臨みました。先鋒、次鋒と惜しい技をだしながらも引き分け、中堅が一本とられ、副将の私が延長でとられ、試合は終わってしまいました。何も考えられず、先生の顔だけが浮かんできました。涙が後から出て来て止まりませんでした。しかし、インターハイで学んだこと、富岡東高校で培ってきたことを忘れず社会に出てもいろんなことに挑戦し、根性と精神力で頑張り抜いていきたいと思えます。

私達のためにいつも一生懸命御指導くださった河田先生をはじめ、温かく応援してくださいくださった保護者の方々、体育後援会の皆様、励まし合い一緒に頑張ってきた先輩の皆様、本当にありがとうございました。

全国郵政武道大会に

三連覇

徳島支部 木下文江

平成九年九月二十一日、金の鯨で名古屋の地において第三十九回全国郵政武道大会が開催されました。今年でこの大会に出場するのも、四度目になります。

一年に一回、なつかしい顔ぶれに出会い、剣道の事、仕事の事と、話に花が咲くと、一年なんてあっという間という気がします。おかげ様で、今大会で、個人戦三連覇を成し得ることができました。以前、東京郵政の武井さんが三連覇しており、それを目標



に私も頑張ってきました。そして、今大会で一回戦から、その武井さんとあたり少し気負いましたが、初対戦できることがうれしくて、思いきって試合に臨むことができました。

試合会場に入り、剣道着に身を包むと、とても気持ちがひきしまり頑張るぞ！と気合がはいります。それと同時に、この一年間の自分の姿を見直すことができます。それは、やはり試合に出るからには、良い結果を残し、内容のある試合をしたいと思うからであって、怠けていた自分を思い出すと、試合前に自信喪失してしまいます。そうなる事のないように、常々の稽古も、マイペースに少しムチ打ちながら、研究心をもって続けていくことを目標としております。

この度、この様な好結果を残すことができましたが、以前にもまして、剣道に対する疑問点が湧いてきました。それを知るには、継続して続けることが大切だと私は思っております。「継続は力なり」この言葉を大切にし、剣道をする上でも仕事をする上

でも、それによって培われた心身の力をもって様々な疑問点を乗り切っていきたいです。そして、職場の皆様方のご理解、家族の協力をもって成し得られたという事を念頭に、今後共、努力していこうと思えます。来年、試合会場に入る時は、自信を持って一年を振り返り、試合に臨めるよう精進するつもりですので、今後とも御指導のほどよろしくお願い致します。

※なお、木下さんは、平成十年一月に、県警の山室雅幹さんと結婚されました。次回は山室文江として全国郵政大会初の四連覇を目指すことになりました。

全国教職員 剣道大会に参加して

先鋒 福多博史

平成九年八月十日、第三十九回全国教職員剣道大会が慶應義塾大学において盛大に開催された。六月に県予選が行われ団体、個人（小学校、中学校、高校・大学・女子の部）に出場する選手を決定し強化を重ねながら本大会に臨んだ。私自身教職員大会には過去二度出場しており、二回とも一回戦敗退という結果に終わっている。今回こそは良い成績をとるという気持ちで会場へ向かった。九日宿舎に到着し、明日の試合の対戦相手を、強い相手と当たっていないようにという願いを込めてパンフレットで確認した。一回戦東京……。東京都は大学時代、また社会人としても活躍している選手が多く常に上位に入賞しているチームである。しかし、今回の徳島県チームも私以外はすばらしい選手がそろっており、何とか後ろにつなげれば勝機はあると気持ちを引き締め試合に臨んだ。

試合結果は、先鋒私が引き分け、次鋒飯田選手が圧倒的に相手を攻め続けたがポイントにならず引き分け、中堅白木選手は過去、全国警察剣道大会において個人優勝している田島選手と対戦し、互角の攻防を繰り広げたが惜しくも一本負け、そして副将福多雅英選手が引き分け、不利な状況で大將西谷選手へとつないだ。大將戦時間終了間際西谷選手のツキが見事に決まり、試合は代表戦へと持ち越された。徳島県は福多雅英選手が、東京都からは田島選手が選ばれ、代表者戦が始まった。時間内には勝負がつかず、延長戦へ手に汗握る試合が展開され、福多選手も一本に近い技を放ったが田島選手のコテに旗があがり残念ながら一回戦突破はならなかった。しかし、強豪チームと互角の試合ができたことで今後強化を積み重ねることにより、上位入賞も期待できることを実感した。

私自身の試合を振り返ってみると、対戦相手が強いという意識を持ち過ぎ、始めから引き分けをねらった消極的な戦い方になってしまい、たいへん悔いの残る試合であっ

た。今回、すばらしい選手の試合をたくさん見ることができ、普段の稽古不足を感じ、もっと力をつけて試合に臨もうと決意を新たにしました。

最後に、本大会出場に際し、御指導、御支援して頂いた剣道連盟、学剣連の先生方に心から感謝をするともに、今後はこの経験を生かし、更に精進していきたいと思う。



第十七回四国教職員 剣道大会に参加して

一七年ぶり三度目の優勝を飾って一

鳴門工業高等学校教諭

監督 藤 本 雅 史



盛夏の一大イベントである阿波踊りも終わった八月の暑中十八日、徳島中央武道館に於

いて四国教職員剣道大会が開催された。本大会は故下村富夫先生が提唱され、四国の先生方の親睦と剣道の向上を目的に第一回大会が徳島で開催されて以降、四国四県が持ち廻りで開催されている。過去十六回のうち、徳島の優勝は二回であった。今年度は地元開催ということで、精鋭十三名が選出された。女子二名、二十代三名、三十代五名、四十代二名、大將五十代という布陣であった。強敵は過去七回の優勝を誇る香川県である。

第一試合は対愛媛戦である。

先鋒引き分けの後、次鋒長瀬選手国体成年女子の強化練習でよく稽古ができて見えて積極的に攻めて◎を決め先手を取ると、九将飯田選手、八将玉田選手とポイントを重ねる。中盤戦は実力者揃いで貫禄の圧勝、結局七勝二敗の成績で好調なスタートを切った。

第二試合は対高知戦である。

先鋒戦は落としたものの、この日好調な次鋒長瀬選手から副将河田選手まで相手に一本も許さず九勝二分の圧倒的な勝利であった。結局取られたのはわずか三本という見事な戦いぶり、本来の実力を十二分に發揮して圧勝した。

昼食となり、それぞれ涼を求めて移動。

二戦全勝して快調なためか食もすすみ、笑顔も浮かぶりラックスした昼食時間がとれた。

そしていよいよ第三試合である。

強敵香川であるが、第二試合で愛媛に大将戦の末敗れ一敗を喫している。もし香川との決戦に負けた場合、香川、徳島、あるいは

は愛媛との勝者数の争いになると思われる。

意を決して整列!! これまで一分一敗の先鋒吉岡選手が奪起◎を連取して意気が上がると、九将まで引き分けた後、ここから八将玉田、七将佐々木、六将白木、五将富浦各選手が連続勝利を納めて優勝を決定づけた。中でも白木選手の絶妙な攻めからの初太刀◎一本、富浦選手の勝利を決めた出◎など口を見はるようなすばらしい技であった。そして副将河田選手が相手に剣道をさせずにストレート勝ちを納め、終わって見ると相手に一ポイントも与えず六対〇の完勝であった。こうして七年振り三度目の優勝を飾ったのである。

全試合を通じて玉田、白木、富浦、河田の四選手は三戦全勝であった。特に三十歳代四十歳代選手の心技体の充実した剣捌きが冴え、日頃の精進の積み重ねの大切さ、稽古は嘘をつかないことを証明した戦いであった。高下先生初め学剣連OBの先生方にも大変喜んでいただき、選手の皆さんの検討に拍手を送りたい。今回、学剣連事務局長の富田先生より、左うちわで見ている

下さいの言葉通り、優勝監督として楽しい想いをさせていただき感謝しています。又前日から準備、合同稽古、そして夜遅くまで接待、親睦を深められ優勝に貢献していただいた?先生方に深く感謝を申し上げ、報告とします。



<第1試合>

県名	先	次	十二	十	九	八	七	六	五	四	三	副	大	得点
徳島	吉岡	長瀬	福多	岩原	飯田	玉田	佐々木	白木	富浦	福多	木原	河田	沢井	
	×	⊗	⊗	×	⊗	⊗ ⊙	⊗	⊗	⊗ ⊗	⊙ ⊙	⊗	⊗ ⊙	×	7 (14)
愛媛	×		⊗	×			⊙ ⊙		⊗		⊗ ⊙		×	2 (6)
	松木	小笠原	若岡	二神	矢野	綱本	田中	近藤	芝	信尾	高田	近藤	戸梶	

<第2試合>

県名	先	次	十二	十	九	八	七	六	五	四	三	副	大	得点
高知	前田	町田	谷本	米田	東野	濱田	田村	柿本	岡本	杉村	森下	中山	内村	
	⊗		×				×						⊗ ⊗	2 (3)
徳島		⊙ ⊙		⊗	⊗	⊗		⊗	⊙	⊙	⊗ ⊙	⊙ ⊗		9 (12)
	吉岡	長瀬	福多	岩原	飯田	玉田	佐々木	白木	富浦	福多	木原	河田	沢井	

<第3試合>

県名	先	次	十二	十	九	八	七	六	五	四	三	副	大	得点
香川	山本	倉知	銭谷	村上将	竹下	村上盛	好井	松原	大林	氏家	梶原	西山	小田	
			⊗	⊗										0 (2)
徳島	⊙ ⊙	×	⊙ ⊙	⊙ ⊙	×	⊙	⊗ ⊙	⊗	⊗ ⊙	×	×	⊙ ⊗	×	6 (12)
	吉岡	長瀬	福多	岩原	飯田	玉田	佐々木	白木	富浦	福多	木原	河田	沢井	

夢舞台、

日本武道館に立つて

徳島錬成館 水上 玲子



今回、六年生の長男にとって、二回目の全国少年剣道錬成大会への参加となりました。

剣道が続けていたおかげで、こうした得難い経験をさせていただき、光栄に思っています。

七月三十日、三十一日の大会開催でしたので、二十九日に出発し、三泊四日の旅行でした。

出発から、乗り慣れない飛行機に乗れるというところで、子供達は大喜びといった様子でした。丸一年空けての東京でしたが、なんとか無事に宿舎へ到着し、その後は見物や買物、東京ドームでの野球観戦、一番楽しみにしていた東京ディズニーランドの一日、などなど。親も子も、心から楽し

めた四日間となりました。

その中でも、やはり日本武道館で試合をすることができたということが、一番大切な思い出となりました。

三十日、地下鉄九段下駅で降りて、長い坂道をせみの声を聞きながらのぼって行きます。途中、大きな門をふたつくぐり、重そうに防具を持って歩く子供達の顔は、晴れがましきでいっぱいです。まずは、大きな日本武道館にびっくり、中へ入ればあまりの広さに、またびっくり。迷わないようにしなければ。全国から二日間、五千人の少年剣士達が集まるそうです。

そして、そこに防具を着けて並ぶ長男の姿を見て、『本当に、よくがんばってきたな』と思いました。一年生の夏、初めて防具を着けての暑中稽古。先輩達の、小手だ、面だと、くり出してくる竹刀に立往生してしまい、くやしさと暑さから、泣きだしてしまったあの日。「もういやだ」と、防具を外してしまったあの日。それでも続けていたから、こんな日がきたんだと。あの時は、かわいそうなことを、無理強いしてい

るような気もしたけれど、続けていてよかったと、そんな思いで見えていました。

試合の成績は、みごとに負けっぷり。五人共、臆することなく思いきって、竹刀をふってきたという感じでした。

三十一日は、全日本選抜少年剣道個人錬成大会へ出場でき、もう一度、日本武道館へ立つことができました。しかし、相手は強くて、上手で、そして静かに剣道をします。あまりの力の違いに、負けてすがすがしい気持ちすらしました。

その後、中学生の優勝戦まで見て、日本武道館を後にしました。

この夏の経験は、子供達の自信となり、誇りとなり、そこからまた一步を踏み出してくれることと信じています。そして、全国大会へと導いてくださった、大澤先生をはじめ、日本武道館への道を拓いてくれた先輩達に感謝をし、先輩達がひとりでも多く、この貴重な経験ができるようにと願います。

私も、五年前から、大澤先生に剣道を教えていただいています。そして、次男も剣

道を始めました。二人三様の剣道ですが、稽古が終わって面を外した時の爽快感は、同じものだと思います。子供達は、いろいろな経験をこれからも重ねていくことと思います。私も、剣道を続けながら、そんな彼らを見守っていきたいと思います。

全日本少年剣道 錬成大会に参加して

鴨島少年剣道教室

井上 崇希



緑の木々に囲まれ、八角形の大屋根につつまれた日本武道館は、ぼくたち剣道を志すものにとってあこがれの場だ。

そしてこの夏、ぼくはこの日本武道館で行われる全日本少年剣道錬成大会に二度目の出場をすることとなった。

去年、ぼくは次鋒として参加したが、一回戦負けという残念な結果となった。会場あまりの広さと参加者の多さとに緊張してしまい、声も出せなかった気がする。そんなくやしき思いをしながら帰るまぎわに、あるチームの大将が試合をしている姿が強烈に心に残った。一本勝負、「始め」の合図とともに、すばらしい小手一面があっ

という間にきまっていたのだ。

「井上、今の小手一面、見たか？よく覚えておけ。」

という、力のこもった笠井先生の言葉に、ぼくは来年ここへ来た時は必ず勝ってみせると心にちかかった。

平成九年の夏、この夏も去年と同じように暑かった。それ以上にぼくたちもやる気で熱くなっていた。先鋒―新居君、次鋒―三木君、中堅―須見君、副将―岩本君、大将―井上、そして桑原君の六人は、この日をめざして真剣に練習にとり組んできた。

先生や父、母の見守る中、打ち鳴らされる太鼓の音とともにいよいよ入場行進が始まった。不思議と去年のような緊張感はなかった。

一回戦はついていた。不戦勝だ。でも、一回戦は、茨城県の青雲塾剣誠会。強いチームが多いと言われる茨城県だ。基本判定試合では、二対三とリードされてしまった。あれほど基本を大切にと先生から注意を受け、くりえかえし練習してきたのにと思いうとつらかった。次の一本勝負で、一勝しな

ければ勝ち進めない。先鋒、次鋒、中堅が引き分けている中、副将がみごとな一本を決めた。もう後はない、いくぞという思いでとびこんだ。すぐに小手が決まった。勝者数四対二でベスト8に進むことができた。本当に信じられないくらいにうれしかった。ベスト8からは、二本勝負となる。相手は千葉県の双葉剣友会だ。これは、先鋒から大将まで全員二本勝ちで快勝だった。これでコートベスト4に残ることができた。みんなの顔から緊張がとれ、じょうだんが出るほど気持ちがリラックスしてくるのが分かった。

続く四回戦は、山口県の岩国警察少年部が相手だ。先鋒から副将までで二対一という少しの差で負けていた。大将のぼくで勝負が決まる。相手はとも体が大きく、なかなか一本がとれない。やっと小手があき、打ちにいったが相手の面がはやかった。くそっと思ひ今度は思いきりせめた。ぼくの小手が決まり同点になった。あと一本とらなくてほしいという思いがあせりになり、ついには面をとられてしまった。こんなにくや

しいことは、今までになかった。泣くまいと思っても、くやし涙があふれてきてしかたがなかった。

ぼくにとつての、最後の東京大会、全日本少年剣道錬成大会は終わった。結果は、決して満足できるものではなかった。けれども、自分の剣道をふりかえることができ、よい機会であったと思う。まず第一に、いつでも、どこでも力を出しきって自分の剣道をするこの大切さが分かった。そのためには、ねばり強い練習を積み上げて技を身につけておくこと、負けないぞという強い気持ちを持つこと。第二に、体も心も健康でいることの大切さ。そして、第三に、心を合わせるこのすばらしさだ。それまでぼくは、剣道は一人のものと考えていた。それがここでは、試合の間じゅうずっと先牛方、そして父や母の心が一つになって戦ってこられた。うれしかったこともくやしかったこともみんないっしょだった。剣道をやってきて本当によかったと思った。

この体験から学んだことを、これからのぼくの剣道に、そして生活の中に生かして

いくことができると信じている。

日本武道館、またいつかここで仲間といっしょに剣道の技と心をきそい合ってみたい。

全日本女子剣道 選手権大会に出場して

大阪体育大学二年

敷田 美紀



全日本女子剣道
選手権大会に出場
するのは、高校三
年生の時と、今回
とで二回目です。

徳島県で予選が行われてから、本大会まで少し期間があり、大学の稽古や合宿などがある中で、うまく調整する事は、難しいものがありました。というのは、夏合宿で、長野へ行き、その最終日ぐらいに腕を痛めてしまい、稽古も思い切つてできず、出発の前日まで、大学の先生から進められた病院へ通っていました。当日、腕はよくなり、あまり痛みを感じなくなっていました。でも、稽古ができていない事で、自分の心の中は、すごく不安でした。

しかし、自分の気持ちだけは、しっかり

と充実させて強く持つ、という事を念頭に置いていました。

前回の大会では、会場の雰囲気は圧倒されていたので、今回は、絶対自分の剣道で試合するという事が目標でした。その中でも一回戦は、高校や大学でも実績のある、鹿屋体育大学の緒方さんでした。今までに、何度か試合を見たりした事があり、どんな試合の組み立てにしようかと、いろいろ考えていたものの、時間だけが刻々と過ぎて、あっという間に、自分の試合になりました。自分は、個人戦が好きで、どうしてかという点、相手と自分の戦いだけ、最後は、やっぱり自分との戦いになるからです。

その一回戦の相手は、初太刀から、左手の手を浮かせるような、九州らしい剣風でした。でも、それに対してあまり動揺する事はなかったものの、どこを攻めたらいいのかなど、自分らしさを少し忘れていたようにも思います。そのようなことで、時間がたち、延長戦へとまりました。始めの四分間で、この攻めに対して、どう出てく

るかということが少しずつ分かってきました。延長に入った事で技数も少なくなり、でも気持ちの面では、ぜったい勝つと言いきかせていました。攻防が続く中で、相手が面に出てこようとする所を出小手。相手が無理に打ってきたのかもありません。自分では、相手との様々なかけ引きがあり、とてもたのしかった試合でした。聞いた話によると、一回戦が三十分ぐらいで、二試合目の鹿屋体育大学の岸本さんとは一時間ぐらい試合してみたいのです。自分でも、このような長い試合は初めてで、とても疲れたけど、それ以上に得るものが、たくさんあったし、楽しかったです。

最後に、全日本女子剣道選手権に出場するにあたり、いろいろ応援して下さった方々へ厚くお礼申し上げます。

一回戦

敷田 ○ー 緒方(熊本)

二回戦

敷田 ー⊗ 岸本(岡山)

全日本東西対抗 剣道大会に参加して

警察支部 近藤 巨



(日)、武田信玄公ゆかりの山梨県甲府市において開催されました。

今年の大会は、全日本剣道連盟設立四十五周年記念ということで、女子の部五名による試合が加えられると共に、選考により「優秀試合賞」「優秀選手賞」と与えられることとなりました。

試合は、女子の部、男子の部ともに大将戦に持ち込まれ、女子は東軍、男子は西軍が優勝いたしました。私は、二十四将で出場し東京の西川選手と対戦いたしました。

第四十
三回全日

本東西対
抗剣道大

会が平成

九年九月

二十八日

大会の三週間あまり前に私の対戦相手が警視庁の西川選手であることを知りました。西川選手と私は、過去三回対戦し、一勝一敗一引き分けという結果でしたが、平成元年の七段審査での対戦以来剣を交えていませんでした。今回は八年ぶりの対戦ということで、白ずと燃えてきました。

大会までの間、とにかく竹刀が振れるようにしよう、基本稽古はしっかり行ないました。大会の二週間前、京都府国体選手、続いて広島県警の選手が米県して試合並びに稽古ができたことは、私にとって幸いでした。大会に向け気分を高め、試合勘を呼び戻すことができましたように思います。

大会一週間前、堀江先生に稽古をお願いし反省点を伺ったところ、

○攻められて打たされている。

○小手を打つとき逃げて打っている。打てば突くぐらいの小手を打て。

の指摘を頂きました。もっと気力の充実を図り、受けの状態を作らないことが大切と感じました。

大会出発前には、「いい剣道をするこ

が大事。」との言葉を頂きました。自分の気持ちのうえでも、昨年の東西対抗(長崎県)で、独り相撲をとり破れた一戦が頭にあり「ああいう試合はしたくない。負けてもいいから自分の納得のいく試合をしたい。」と考えていました。

「剣道時代一九九七・十一月号」より

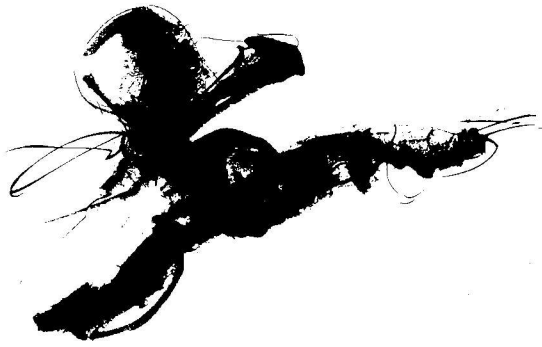


大会当日は、「死ぬまで全力を出し切る。」と、自分に言聞かせ試合に臨みました。

サブ道場で体ならしを愛媛県の宮脇さん
にお願ひし、調整の後、試合会場に入ると、
進行が以外に早く、二試合前の二十二将戦
になっていました。面を着け、腹式呼吸で
気持ち落ち着きました。二十三将の香川
県、山神選手が二本勝ちを納め、いよいよ
私の出番となりました。礼をして三歩進み
ながら西川選手の目を見ると、気合が入っ
ているのがわかりました。蹲踞から立ち上
がりつつ一歩前へ出たところまでは覚えて
いるのですが、その後のことははっきり思
い出せません。試合に集中していたのでし
ょう。結果的に、面二本を連取し勝つこと
ができました。西川選手の気迫のこもった剣
道に対し、こちらが全力でぶつかってい
た結果、持てる以上の力が発揮できたもの
と思います。私にとって今回の経験は、本
当に得難いものになりました。

閉会式において、優秀選手賞まで頂き二
重の喜びを味わうことができました。これ
も日頃ご指導頂いております堀江名誉会長、

遠藤会長始め剣道連盟のかたかたのお陰で
感謝申し上げます、簡単ではありますが大会の
ご報告に変えさせて頂きます。



第五十二回 国民体育大会剣道大会

徳島商業高校教諭

大将 手塚 十三子

昨年まで行われていた成年男子二部に代
わり、今回から成年女子の部が新設され、
十月二十八日(火)・二十九日(水)の両日、
岸和田市の総合体育館において全国の厳し
い予選を勝ち抜いた十六チームが参加して
熱戦が繰り広げられた。

緒戦は長野県であった。本原資裕監督
(鳴門教育大・教)の温かいアドバイスと
応援の拍手に送られ、選手はやや緊張した
面持ちで檜舞台へ上がった。先鋒を務める
猪尾満紀選手(大阪体育大)は、立ち上が
り早々目の醒めるような鮮やかな小手技を
連取。続く竹内佳代子選手(鳴門第一中・
教)も慎重な試合運びで自分のペースを作
り、得意とする小手技で一本勝ちを収めた。
大将手塚(徳島商業高・教)は面を先取し
ながらもその後二本取られたが、先鋒・中

出場が可能と言える大会である。時間的に、精神的に正に鑄を削り合う大会であると言っても決して過言ではない。剣道の本質を辿る努力は言うまでもなく、自らが心身ともに健康であることを基盤として、その上で日常生活と稽古の調和を如何に図るかが私たち女性の今後とも大きな課題である。

本県は他府県に比し、人口密度と相俟って剣道人口も少なく、特に各年齢層の強化を実施するにもかなり厳しい面が多い。三月に行われた県体育協会のヒヤリングでは、予選突破率を七五パーセントと書き記し、再度数字の意味の確認を受けた次第である。持ち前の阿波女の意地と粘りと明るさ、そして何よりもチームワークの良さは「日本一」という自信がその数字となって現れた。たとえ少人数であろうとも剣道の本質を見極めたいと願う一人ひとりの全身にほとばしるような情熱と、その実践こそが、全国第五位の成績につながったことを素直に手を取り喜び合いたい。

本日まで御指導・御支援いただきました関係方面の方がたに心からお礼を申し上げ

ますとともに、次年度に開催されます神奈川県でのさらなる活躍と女子部の発展を祈念いたし、大会の報告とさせていただきます。



なみはや国体 O S A K A '97 (秋季大会) 平成9年10月25～30日

全日本居合道 大会に参加して

居合道部 坂本 憲一



六段の部のトーナメント表に目やる。参加人員は全国都道府県代表総勢五十人、私の

試合は一回戦シードという幸運に恵まれた。しかし、自分の試合開始は三十一番目。こんな長い待ち時間は今まで経験したことがない。一試合六分を基本にしてざっと計算しても三時間はかかる。なんとも長い待ち時間である。

受付終了後、サブ道場での練習はイモこぎ状態だけに一応の、体ならしの練習に止め、二階に設けられた徳島県選手の待機場所に陣取り、試合の経過を見守ることにした。

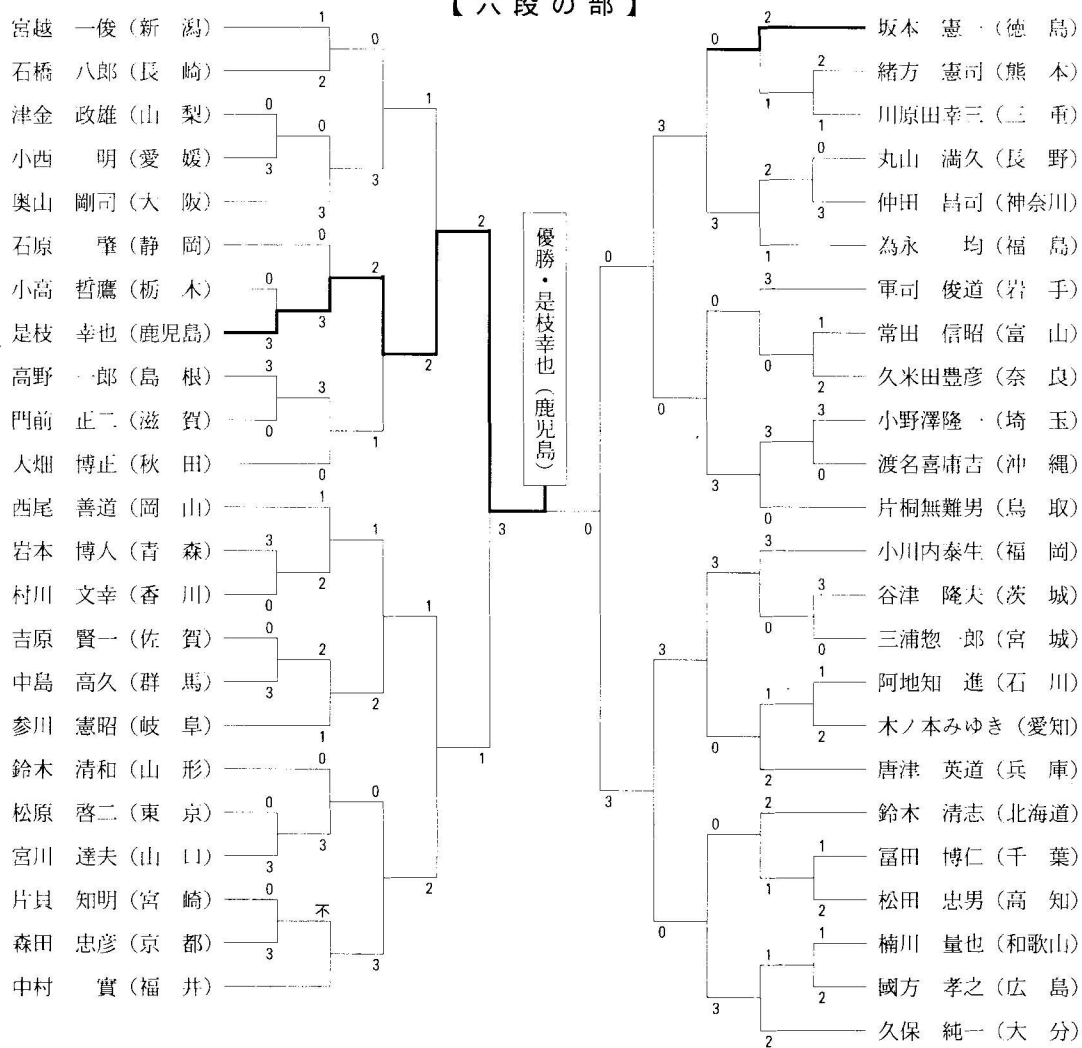
目の前では段ごとの試合が順調に進行している。時折拍手が起る。勝ち負けの判

定がおりた瞬間だ。次々に試合は勝敗を決して行くが、さすがに全国人公ともなると私の見た目には両者甲乙付け難く、どれを見ても見事な試合展開である。それぞれの術技は、正確で実に「うまい」の一言に尽きる。居合の試合は、総てが型の演武の善し悪しで決まることから、巷でよく言われるところの「強い」・「弱い」という言葉はあまり聞かれない。

また居合道は剣道と違って防具もなく素面で終始無言（流派によっては発声がある）である。そのうえ、激しい竹刀の打ち合う音もなく場内はいたって静かである。呼出しや判定の声に交って太刀風の音が聞こえるくらいで、むしろ静寂といった形容が相応しい。それだけに順番を待つものに取っては、その静けさがかえってプレッシャーになる。こうした状況・雰囲気は、居合道がよく「精神性云々」と言われる所以の一つだとも思う。

それにしても待ち時間が実に長い……雑念を払おうと努めながらも余計な思いが脳裏をかすめる。試合が目前に迫ってきた。

【六段の部】



いろんな思いが交錯しながら、ゆったりと動いていた時間が、急激に動きだし、胸の鼓動が次第に高鳴ってくる。ついに試合開始の時間が来た。待機位置に着き、心静かに出番を待つ。とはいいいながら雑念に交じってまた不安がよぎる。落ち着けと自分に言い聞かせる。演武種目を繰り返し頭の中で反芻し、それぞれの型をイメージで追ってみる、不思議に雑念が消えた。これは、師匠や先輩から教えられた試合前の心の制御法の一つだ。開始線に立つ。半分自棄きみ

かも知れないが意外に落ち着いている。大会の演武種目は古流二本と全剣連居合三本で行われる。古流は個人の選択だから「八重垣」と「月影」と選ぶ。六段の部の指定技は四本目の「柄当」、七本目の「三方切」、九本目の「添手突」の計五本である。

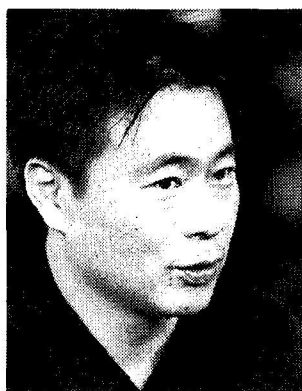
短いようで長い六分という試合時間が過ぎた。相手のことは解らないが、自己採点ではそれぞれの技は無難にこなせた気がする。審判員の判定が降る。結果は二対一、二回戦での勝利を得た。

二回戦の相手は、関東の著名な若手選手だ。多分取れるであろうという想いと、勝てるかなという想いが交互に起こり、この試合にかたばベスト8に入るという欲目の気持ちもちらつく。結果は期待はずれの三対零。見事な負けであった。

鹿児島県で開催された全日本居合道大会の試合を省みての自分の心の動きを率直に述べて見た。今まで五段・六段の部で全日本大会に二度ほど出場させていただいた。今回のベスト16という成績は、過去の対戦記録に比べて、自己ベストでもあり、私にとっては喜ぶべき事実であるには違いない。だが、それにもましての成果は、本大会への参加が、「もしかしたらベスト8」という甘い考えが生じたことへの反省の機会を与えてくれたことである。努力なくしては好成績はあり得ないのである。この反省を糧に一層の上達を目指して修練を積んで行きたい。

全日本剣道選手権 大会に出場して

城北高校教諭 福多雅英



平成九年度の剣道日本一を決める第四十五回全日本剣道選手

権大会が、各都道府県の代表選手六十四名を集め、十一月三日に東京北の丸公園にある日本武道館で開催された。私にとっては、十四年ぶり二回目の大会出場となったが、これまでに大会出場資格がなくなったり、ケガによる二度の手術・入院の為に剣道ができない時期があったりと、色々な事があっただけに大変心に残る大会出場となった。初出場の第三十一回大会では、出場選手中三番目に若く、まさに恐いもの知らずの若さと勢いだけで三位、来年も頑張ろうと

希望に胸を膨らませていたのであるが、翌年の第三十二回大会から出場資格が六段以上と変更され、当時四段の私はしばらくの間県の予選大会にも出場する事ができなくなりました。その当時は大変ショックな出来事であったが、それ以来「もう一度全日本に出場する」という事が、私にとって夢であり剣道を続けて行く上でのひとつの大きな目標となっていた。

「全国大会に出場する」・「試合に勝つ」という事が、剣道のすべてではない。「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」とされている剣道の理念のとおり、剣道は人間形成の道であり人間形成の為の手段であると思う。しかし、十四年ぶりの大会出場で「全国大会に出場する」・「試合に勝つ」という事を目標にし、粘り強く努力して行く事や学ぼうとする姿勢や向上心を持ち続ける事が人間形成につながっていくひとつの要素である事を再認識させられたし、私自身反省させられた。また、私にとって「成せば成る」という事を実感できたことは、本当に幸せな体験であったと思



「剣道日本 1998. 1月号」より

う。未熟な私がこのような貴重な体験をする事が出来たのは、ひとえに多くの方々からの御指導・御鞭撻・御支援のお陰であり、家族の理解や支えあつての事であると深く感謝している。

さて、今大会の試合は東京代表の寺地賢二郎選手と一回戦で対戦した。胸を借りる

つもりで臨んだ試合の後半に小手を取られて一本負け、心・技・体どれをとっても私の方が劣っていて悔いの残る試合であったが、学ぶべき事が多くさんあり久しぶりに胃の痛くなるような緊張感を味わうことができた。

今大会出場した選手の中でも三番目の年長者であり、だんだん体力的にも厳しくなってきたり、校務の都合上、自身自身の稽古時間を確保しにくい現状にあるが、今大会の感動を忘れずに新たな夢や目標を持ち生徒達と共に精進して行きたいと思う。また、本県の剣道発展の為に微力であるが、少しでも貢献することができれば幸である。

第四十六回全国 青年大会に出場して

相生町青年団 岡崎 研吾

十一月七日から十日までの四日間、全国青年大会があり、八日に団体戦、九日に個人戦が東京武道館で行われました。本県からは相生町青年団六名が出場させて頂きました。

団体戦の初戦は宮崎県でした。一回戦はシードだったので、相手の試合をよく見ることができました。大差はないという印象でしたが、結果的には三対〇と大敗し、一人ひとりの持ち味が出せないまま、不本意な成績に終わってしまいました。個人戦の方も原君が三回戦まで進んだのが最高といった残念な結果になってしまいました。

私たちの実力不足は勿論ですが、他県のレベルの高さには正直なところ驚きました。各試合の内容も充実しており、上位の試合は目を離すことができませんでした。

大会に出場するまで、仕事を持つと稽古

をする時間がないのは仕方がないと思っていました。他県の選手の剣道を見ているうちにそうでないことに気が付き、これまでの自分の取組みの甘さを実感しました。

試合終了後、親睦の稽古会があり、一時間程度でしたが、他県の選手と試合に負けたことも忘れて、気持ちのよい汗が流せました。稽古会が終わると、会場全体にとっても親近感を覚え、会場を出るときには「お疲れさまでした。」という言葉がこちらからこちらから聞かれ、それがとてもですがしく、新ためて「剣道」の競技を越えたすばらしさを感じました。

試合では結果的にも、内容的にも悔いの残るものになってしまいましたが、それ以上、大きな充実感を得ることができました。本当によい勉強になりました。

最後に、出場に際し、連盟、有志方々より沢山のお心遣いを頂き、この場をお借りして御礼を申し上げます。ありがとうございました。



《団体戦》十一月八日

【男子】

・一回戦 シード

・二回戦 対宮崎県

徳島県

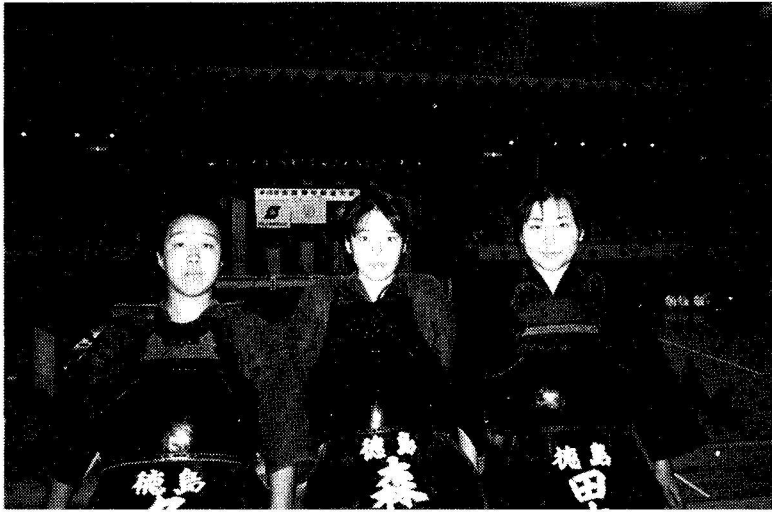
宮崎県

先鋒 原

ド 中 武〇

次鋒 岡崎 引き分け 黒木

また、団体戦終了後の合同稽古では、他の多くの選手達と剣を交えることができ、剣道ならではの方法で青年交流を深めました。これによって、学生剣道とはまた違った、社会人剣道の難しさ、素晴らしさを身を持って実感することができました。個人



戦では運よく二位に入賞することができたわけですが、試合内容に反省する点は多く、自分の剣道を見つめ直すのに大変よい勉強となりました。結果に甘んじることなく、また一から出直すつもりで稽古に励んでいきたいと思っています。

この大会に出場して、剣道の奥深さ、素晴らしさを節に感じることができ、数多くのことを学べたのではないかと自負しております。このような貴重な経験からできたのも、ひとえに県剣道連盟の先生方をはじめ、阿南支部の方々、諸先輩方の御指導、御支援のおかげだと感謝しております。この誌面をお借りしまして厚く御礼申し上げます。今後も一層の精進を重ねていきたいと思っています。

《女子個人》

一回戦

・〇 森 不戦勝 竹端(富山)

・田中 メ 菅野(宮城)〇

・名蔵 コメ 永田(鹿児島)〇

二回戦

・〇 森 メメ コ松村(宮崎)

三回戦

・〇 森 コ 岡本(東京)

四回戦

・〇 森 コメ 菊池(新潟)

準優勝

・森 ドド 占谷(東京)〇

森 三位入賞

《女子団体戦》

・一回戦 対岡山県

徳島県

岡山県

先鋒 田中 メメ 市〇

中堅 〇 森 コ 定方

大将 名蔵 コ 福島〇

全国警察剣道

大会を終えて

監督 近藤 巨



平成九年度全国警察剣道大会が、十一月十四日(金)日本武道館において開催されました。

大会は、今年から二部制から三部制(一部十二チーム・二部十二チーム・三部二十四チーム)に変わり実施され、本県は二部で出場いたしました。

二部の試合は、十二チームを三チームづつに分け予選リーグ戦を行い、勝ち上がった四チームのトーナメント戦で優勝を争います。なお予選リーグで勝ち上がった四チームは、次年度一部に上がるため各試合とも白熱した試合となりました。

本県は、予選リーグで福島県・愛知県と対戦いたしました。両県とも今年の管区大会で優勝しており、特に愛知県は、一部の

実力を有する強豪チームです。

結果は、福島県に三対二で逆転勝ちし、勢いによって愛知県と対戦しましたが、○対五で破れてしまいました。しかし、内容的には対等あるいはそれ以上であったと白負しております。

《大会結果》

一部	優勝	大阪府警
	準優勝	警視庁
二部	優勝	愛知県警
	準優勝	埼玉県警
三部	優勝	北海道警
	準優勝	山口県警

《出場選手》

監督	近藤 巨
徳島西署	山室 雅 幹
機動隊	富田 圭 介
〃	富 沢 憲 一
〃	小 坂 治
〃	茨 木 基 良
〃	岩 木 一 功
〃	吉 川 茂 生
〃	平 野 誠 司

〃 平尾 満 紀

次に試合状況をお知らせします。

◇リーグ一回戦

(試合時間五分三分引き分け)

徳島県警③(6)	1	2	(4)	福島県警
先鋒 山室			1	一本勝ち③根本
六将 茨木			×	鈴木
五将 小坂①			1	②柴崎
四将 吉田③	1	1	一本勝ち	平野
三将 岩木			×	星
副将 平野②			1	川上
大将 平尾②			1	②増井

先鋒山室選手、この大会初出場ながら先鋒らしく元気のいい試合を展開したが、根本選手の動きもよく一瞬手元の上があったところを小手を打たれ惜しくも一本負け。六将茨木選手、ここで勝って対としたところ。少々慎重になりすぎたか、お互い有効打なく引き分け。五将小坂選手、気合い十分で臨んだが、面を先取され、胴を返したものの再び面を打たれ負け。○対二と厳しい展開となってきた四将吉田選手、相手の強引ともいえる攻めに対し、冷静に見極め

的確な小手で一本勝ち。三将岩木選手、よく攻めたが有効打なく引き分け。副将平野選手、気合い十分、実力の差をみせつけ面を二本連取。二対二で大将戦に持ち込む。大将平尾選手、試合巧者の増井選手を積極的に攻め、面を先取したが直ぐに面を返され勝負となった。ここで平尾選手本領を發揮し、相手の面に対し見事な返し面を決めた。結局三対二の逆転勝ちを納め、チームの士気は白々と高まってきた。

◇リーグ二回戦

徳島県警0(1)	—	5(9)	愛知県警
先鋒 山室	—	②	安藤
六将 富田	—	③	近本
五将 茨木	延長	④	勝野
四将 吉田	—	⑤	山部
三将 岩木②	×	⑥	中村
副将 平尾	—	⑦	大河内
大将 平野▲	×	⑧	穂園

先鋒山室選手、学生選手権者の安藤選手に対し、一步も引かず積極的に攻め、有利な試合展開と思われたが、もう一つ有効打とならない。攻めの単調となったところを

胴・面と連取された。六将富田選手、終始

相手のペースで自分の掴めぬまま突き・面を連取された。『やはり実力の差か』『いやそんなはずはない』。五将茨木選手、気力溢れる試合を展開し、相手に思い切った技を出させなかった。延長戦となり、茨木選手の思い切った面。『やった』と思ったら、以外にも審判の旗は相手に上がっている。審判は勝野選手の小手がいいとみたのか。四将吉田選手、上段の山部選手にうまく攻め、機会といい強さといい絶妙の小手を打った。しかし、審判旗は一本しか上がらない。時間終了前、上段からの面。『入っていない』と見えたが、旗が上がり、一本負け。三将岩木選手、思い切った面で一本先取。二本目となり相手の小手・面の連続技。『入っていない』と見えたが旗が上がり、

結局引き分け。副将平尾選手、開始直後面を打たれる。二本目となり、相手の小手に対し返し面を打ったが旗はあがらず。その後、引き胴を打ち下がったところ面を打たれた。大将平野選手、お互い有効打なく引き分け。結局○対五で破れたが、納得のい

かない試合結果となった。

以上が今大会の試合状況です。

結果的には大差で破れましたが、選手は持てる力を出し切って、内容的には強豪愛知県に引けをとらない試合ができました。このことは、選手にとって大きな自信になったと思います。

しかし、反省のないところに前進はありません。今大会での試合内容、又、稽古のあり方等十分反省し、そして、来年こそ『一部入り』ができるよう益々精進しなければと決意を新たにしております。終わりにになりましたが、今大会に向けてご支援ご激励いただきました皆様方にお礼を申し上げご報告いたします。

随
想

韓国からの手紙

副会長 大澤 孝 彰



二十三回国体選
手として参加した
思い出を三回位に
亘って、「徳島の
剣道」にのせて頂

こうと第一回目を書いている最中に韓国から私あての手紙と立派な大学の機関誌が飛び込んで来ました。韓国の剣道に対する情熱を深く感じ、日本もうかうかして居られないと思ひ、我田引水ではありませんが、手紙の日本語の所だけを以下にそのまま書き写しました。



韓国成大道場で

水原大学校経商大学貿易学科教授
経済学博士 李 鍾 垣
(大学剣道聯盟研究理事)
わたしが教わった思い残る剣道

大澤八段範十(六十七歳、全日本東西対抗大会西軍大将)に約二年前、成大道場で稽古をお願いした。大澤範十との十分間の稽古を通じて教わったこ

とを書くことにする。背の小さい出合のおじさんのようなかっこうではあるがまず、先生は最初からずっと先をとった攻撃をされる。稽古中にたった一度も迎え突きをされないのみならず胸にひっかかることもなかった。先に技を出したり、相手が攻撃をすると直ちに反撃する。下級者に対する礼儀が本当に正しい練習態度を見せてくれる。七十歳に近い年にもかかわらず本当に素晴らしい攻撃能力を持っている。私は小手打ちを主な技としていながら、小手ばかりを打つのを恥ずかしいと思ひ、面を攻撃しようと努力している。又そのことも教えていただいた。小手を打つ時は姿勢は少し左側へとかたよる傾向があるが、面を打つ場合は刀と姿勢が正しいわけでこの主張はそれなりの説得力があると考えられる。一度は、私が七、八回最善を尽くして連続的に攻撃したが、先生は全部防ぎ守ったあとの九回目に私の出ばな面を勢いよく見事に打っている。舌を巻いてしまっ

た。本当の達人の境地に至った人を見たような気がした。驚くべき経験だった。

対戦が終わっていくつかの質問をした。

第一、「なぜ先生は全然迎え突きを出さないのか。」

突くと相手が少しなめに避けるだけで、私は決定的なチャンスを相手に与えてしまう。ですから、あなたとは真剣勝負の気持ちで練習したつもりだ。

第二、「幼稚園の頃から今まで剣道をして来られたのに運動障害はでないのか。」

脚と腰が以前ほど強くはないが、これは年を取ったせいだと思う。

第三、「私も、もう五十歳近い。以前に比べて体の機能が落ちたらしい。歳を念頭に置くことはないのか。」

まだ若い、熱心に稽古しなさい。

第四、「剣道が上達するための秘訣があるのか。」

カラオケボックスに行き、丹田に力を入れて歌をうたってよく踊ること。その理由は歌と踊りを通じて気合いと

体の柔軟性及び拍子感覚を身につけることができるからである。

一回の稽古を通じて、思い出に残る本当にいろいろなことも教わった。これがいい剣道ではないかと思っこの文を書くことに決めた。日本の剣士として、いろいろなことを教えてもらえる方だと思う。

李虎岩先生のこの前の「大学剣道報」

(一九九六年秋号) 寄稿によれば、大澤先生が我が韓国代表選手達の稽古を見て、先をとった攻めがあまりないと指摘されている。先生のおっしゃることは今の我々剣道人に大きい意味を持つ。謙虚な心構え、礼儀正しい態度、攻めのある剣道が本当にいい剣道だと思う。「大学剣道報」一九九七春号

真剣に取り組んで居られる剣道人には冗談まじりに云った言葉が素直に受取られませぬ。ほんとうに気をつけてものを云わなければいけないと痛感して居ります。

スポーツと健康

新野少年剣道教室後援会会長

馬原医院院長 馬原 文彦



二十一世紀にむけて医学界の大きな課題は、高齢化対策と少子化対策であります。

高齢化対策としては、平成十二年度からの介護保険法の導入にみられるように、治療から介護へ、高齢者のQOL (Quality of life) の向上である。すなわち「健康な生活を楽しもう」、「勝つスポーツから楽しむスポーツへ」の意識の転換です。

一方の少子化は、少年剣道の指導者の方は実感されていると思いますが、これはまた想像を絶するスピードで子供の数が減ってきています。政府や厚生省は、とうとう出産適齢期女性の非婚傾向にしびれを切らして、北欧の統計を持ち出し、婚外出産を奨励するところまで来ています。(若い剣

道家にはチャンスですぞ！）。女性ジャーナリストや大学教授を動員してなりふり構わず子供の数を増やすのに躍起になっているのです。この事は皆様の所に来ている子供達は、再生産出来ない貴重品であることをご認識戴きたいのであります。

人材…才能、能力のある人物

人財…財のある人物

人罪…罪になる人物

人在…ただ在るだけの人物

人財や人在は時に必要かも知れませんが、しかし、人材だと本人は思っている、いつの間にか人罪になっているかも知れません。

私の恥を申しますと、平成三年日本医師会に健康スポーツ医という制度が出来たときに、当時は、新野高校野球部が甲子園大会に出場の可能性が出てきた頃で、何とか選手を強化して筋肉トレーニング法を研究しようと考えている時でした。でも、朝九時から夕方六時までピッシリ二日間、運動

生理学などの堅い学問の講義を聞くことは正直いって決心に勇気がいりました。

ところが講義を聴いてみてビックリしました。まず、準備運動はストレッチ理論により様変わりし、学生時代によくやってたウサギ飛びは絶対にやってはいけないこと。練習のし過ぎによる少年スポーツ障害のオンパレード、有名なオリンピック選手達の想像を絶する健康障害！

それまでの「スポーツ選手は健康の根本」「類い稀なる根性」などの神話はもろくも崩れ去りました。

特に大きな可能性を秘めた小学校・中学校の子供達に、将来を見越した適切な運動指導をする事の重要性、勝負を唯一の目的とするスポーツの弊害を痛感いたしました。

柔道や剣道などの審判も、「一本、反則、引き分け」から、成長期の間は「気合いや声」、「形や素早さ」などで判定する、等の新しい審判基準が望ましいとさえ云われています。

小学生の間は集中力も三十分、長くて一

時間が限界であるので、ストレッチによる準備運動を十分にし、剣道の練習だけでなく、リレーやボール運動（ドッジボールなど）、幅広い運動で子供達を楽しく乗せる運動メニューが必要となります。中学生後半からは個々の成長に合わせて徐々に筋肉トレーニングを開始し高校から上の最も競技に適した年令に向かいます。ここで見落としてならないのがクーリングダウンです。激しい運動で疲労した筋肉を大切にする習慣を身につけて下さい。

剣道でよく痛めるところは、アキレス腱、膝、頸部と云われていますので、特にこれらの部分のストレッチ、クーリングダウンを考えて下さい。

剣道では、寒稽古や暑中稽古など特殊な環境条件下でも伝統的な心身の鍛錬が広く行われています。しかし、日本体育協会の統計によると一九七五～一九九〇年の十六年間で発生した熱中症死亡事故を種目別に分析した結果では、野球、ラグビー、サッカー、山岳につき、剣道でも高率に熱中症

が発生していることが示されています。

剣道では、道場などの施設が風通しなどに配慮が少ないこと、防具と稽古着が熱の放散に不利なこと、伝統的な稽古として高齢者や年長者が「元立ち」として下位の者の相手を務めるため「元立ち」は途中で水分補給や休息の機会が少なく健康維持に無理をしがちなこと、などが要因として上げられています。

私の尊敬するとても熱心な少年剣道の指導者で、ご自分にも厳しい鍛錬を課しておられた先生が、夏の暑い時に九州まで段位を取りに行かれて、帰ってから数日で倒れたことがあります。日頃からの高血圧に加えて精神的な疲労、夏場の脱水が誘因になったことは否定できません。

すこし医学的な補足をしますと、熱中症とは暑熱環境で発生する障害の総称であり、熱疲労、熱けいれん、熱射病などの病型があります。重症な病型である熱射病では処置が遅れると、高体温から多臓器不全を併発し危険です。また、熱けいれんは大量の発汗があって水のみを補給した時に起こる

もので、水分補給は必ず食塩を加える必要があります。運動時の水分補給に際しては、 $5 \sim 15^{\circ}\text{C}$ で、 $0 \cdot 1 \sim 0 \cdot 2\%$ の塩分を含む水がよいとされています。筆者は実際に $0 \cdot 2\%$ 食塩水を飲んでみたが、ほとんど塩分を感じない程度の濃度です。

剣道の指導者は、剣道の種目特殊性と競技現場の実体を踏まえ、あらゆる環境下の稽古に対する準備、稽古の時間や内容のあり方、水分補給の方法、健康管理など多角的な視野から総合的に管理する能力が要求されます。

私共は三年前から毎年夏に阿南市内のスポーツ指導者や保護者を対象に（剣道に限らず）講習会を開いており、ストレッチの実技やスポーツ医学の意見交換を行っております。

また、新野少年剣道錬成大会では選手のみでなく全員が参加できるようにし、表彰規定にも「奨励賞」を設けて勝者だけでなく口頃から努力をしている者を各教室指導者より推薦していただいて竹刀を贈るなど

の試みを行っています。「奨励賞」をばねに次の年に良い成績をあげてくれたりすると、「本当によかったね」と喜びを共有できるのは主催者の楽しみでもあります。口頃からの剣道指導者の方々のご努力に敬意を表すると共に、先生方ご自身のご健康を心から願っております。

術から道へ、 道から芸へ

板野郡西

副支部長 岡田良人

人間は長い間、闘争と共栄の繰り返しによって歴史を造ってきました。個人も、村も、国も同じです。代表者を決める選挙もそうですし、闘争の原因や結果は本題ではないので、今日は触れません。

人間が闘争や生活に使った最初の道具は、自然をそのまま利用した木の枝や、石でありました。木の枝をへし折って棒に作り、自然に落ちた木をそのまま道具にしたりしました。

また石は、小さな石を岩角などに叩きつけて割り、その角を利用して、カズラを切ったり野草を料理したり、そのうち人間はだんだん知恵が増してきて、石と石をこすり合わせて研ぐことを覚え、それで棒を加工して使いやすくし、その棒で高い木の実を叩き落としたり、狩猟用具として獣を追っ

たり、武器として闘争の道具に使ったりしました。その名残として、いや、その技術が発達したものが現在、棒術として、あるいは杖道として残っており、棒は杖や収穫用具、狩猟用具、また武器としても使われました。こうした道具や武器の始まりは、方法や種類こそ違え、世界各国共通だと思います。

武器の数え方も鉄砲は一挺、二挺。大砲は一門、二門。棒は一本、二本。でも、日本刀の場合、一本二本とは数えません。一腰、二腰、あるいは一振り、二振りと数えます。木刀の数え方も、正式には刀と同じです。(拝見の心得、鑑賞等略)

こうした武器をいかに使うか、その使い方によって、それを専門にしている者を、武術家、武道家、武芸者などと呼び、その使う武器、方法などによって、明治以降、剣術は剣道、弓は弓術から弓道、空手は空手道と呼ばれています。おおよそ、それぞれの各流派の武術で、芸と名のつくものはひとつありません。まして、棒と槍は棒術、槍術と呼ばれて、道という名は

ついていませんね。

古代から内乱に明け暮れた日本人にとって、一部の人を除いては、生き方などを考える余地はなかったわけですが、黒船に眠りを覚まされ、殺伐な幕末が過ぎると、急激に押し寄せた文明開化の波に対し、外国人と対等につき合うには、やはり品位というものを必要とし、今までの武士たちは鎌倉時代以降からあった、禅宗や儒教からきた武士道を一層教化させ、殺伐な武術を『道』として修業しました。

道という言葉はよく使われて、武技の場合は『武道』といい、職人の場合は『職人道』といわれます。そして、武士の生き方を探究する道が『武士道』です。もともと武器を手にして戦う武技は、人を殺したり、廃人にする技です。人を殺傷する恐ろしい格闘技の稽古が、道だ芸だと言われるのが不思議ですね。でもこれには大変な意味があるのです。

私などがこんなことを申しあげるのは、おこがましくも恥ずかしいのですが、手合わせをお願いした時、相手の方から本当に

納得の行く面を打たれたとします。その時、負けた、という悔しさよりも、うゝん打たれた！という実感。心に響く面を打たれたら、いい面を頂戴ちやうだいしましたと言うのですが、本当は心を打たれたんですね。人の心を打つ、その技、その至芸、それが武芸という芸術だと思います。

日本の武道のうち剣道を例にとりますと、勝負には勝たなければいけませんけれど、殺人剣から活人剣へ、術から道へ、道から芸へ。剣道の理念にありますように、剣の理法の修練による人間形成の道となりました。稽古の最中に間違つて、防具のないところを打つ場合もあります。その時々すぐに謝る気持ち、常に教えを乞う姿勢、奉仕の心、冬の板の間の冷たさに耐える、強い忍耐の心、心身共に鍛えた強さ、それらは剣道を初め、武道を志にとって一番大切なものであって、それらを身につける過程が道であり、竹刀の一振り一振りに納得の行くいい技が出せたとき、そこに武芸という芸術が生まれるのではないのでしょうか？ 芸術とは、他人に鑑賞してもらおうものだと

いう考え方もあります。審査員の先生に、審判の先生に、自分の剣道のどこを見て戴くか、常にそれを意識して、正しい稽古をするのが大切だと思います。鞘の中に納まった日本刀が、錆びることなく光輝いているのは、常に怠りなく手入れをし、磨いているからです。

また、鰐を始めとした日本刀の外装のひとつ一つは、職人道に徹した職人たちが、刀身を鍛え上げる刀匠と共に、創意と工夫を凝らした芸術品です。剣道や居合道に励む現代の武士たちも、鞘の中、すなわち内面を磨いて光り輝かせると共に、外装、すなわち人間としての外側、服装や態度、姿勢、そうしたものにも心を配り、誰に対しても不快感を持たせないことが大切です。それは武芸という芸術から来たもので、剣道（武道）の心が生活の一部になって始めて可能だと思うのです。要するに、武道の究極は芸術であるべきだと考えます。

今回は歴史小説や時代小説を読む人、テレビなどで時代劇を見る人、これから剣道を始める人などのために、少し解説をして

みましょう。

剣道とはどんなものか、日本人なら誰でも知っていますが、剣を使う武道に居合道というのがあります。居合道とは、真剣をもって敵を斬る稽古ですが、自分が殺される間際でなければ、決して敵に刃は向けないものです。剣道と同じですが、常に修練して、「あいつは強いぞ、喧嘩してもかわんぞ」、ということになれば、誰も喧嘩をしかけないし、自分が仕掛けなければ争いはなく、平和ですね。みだりに刀を抜かない。居合の心は鞘の中にあると師の教えでした。

もともと居合の本質とは、その場においてすぐに間に合う。例えば、子供が転んだ、すぐに起こしてあげる。お年寄りが倒れた、すぐに救急車の手配ができる。その体制を常に整えておく。それが居合の修業だと、恩師の教えでございました。ほかの武道も同じですが、上手になったから、強くなつたからと威張つたら、自分の周囲に人はいなくなります。

宮本武蔵が、「一道萬芸に通ず」と言わ

れました。絵を描いても、彫刻をしても、花を育てても同じですが、それが出来上がるまでの過程には、人にはわからない、目的を持った苦勞と工夫がいります。試験勉強もその通りで、そうした工夫と習熟を積み重ねることを、人間を練るといいます。体を鍛え心を練る。鍛錬と言います。そうやって出来上がった人格を、人間が練れていると社会は表現しています。

次に袴の話ですが、我々がはいっている袴は馬乗り袴という男袴です。みなさん、日本の袴には前に五本の襷ひだがありますね。どうして左右対称の四本乃至六本ではないのでしょうか？これも不思議ですね。『南総里見八犬伝』という物語があります。そのなかに人間の生き方を示した、八つの玉に刻まれている文字に、『仁義礼智忠信孝悌』というのがあります。おそらく中国の古典からとったものだと思いますが、日本でもこの八つを忘れた者を忘八者ぼうはちもの（八つの挫折した曲者）とか、やくざ者とかいって嫌われました。

袴を着用する武道は弓道や薙刀なぎなた、剣道、

居合道、合気道などですが、前の五本の襷は『仁義礼智信』の五つの教えを表し、後ろの二本の襷は日本の一番の美德とされている、『忠と孝』表しています。それから、神主や相撲の行司、女袴には腰板がありませんけど、男袴である剣道の袴には腰板があります。昔の武士は立ち居ふる舞に工夫を凝らし、『襟首袴腰』といって、着物の襟は首筋に密着させ、腰骨は袴の腰板に密着させると、背筋が伸び、顎あごが引けた最高の姿勢になります。先輩たちが現代の武士に残してくれた、『芸術』の財産ですよ。

居合道の話に偏りそうなのですが、居合道のなかに切腹に対する介錯の方法がありますので、ちょっと述べてみます。平安時代に始まったといわれる、権威と誇りに彩られた武士としての最高の自殺法ですが、私の知る限りでは、元弘の変（太平記の時代）で、大塔だいとうの宮護良親王みやのりなかつんのうの身代わりとして、笠木の砦やぐらにおいて村上彦四郎義輝むらむらひよしあきが、櫓やぐらの上で名乗りを上げて切腹したのが、最も古く、最近のものとしては、昭和三十八（一九六三）年、阿波山岳党の末裔、一字

村の村長、桑原熊三郎氏が、伝家の宝刀備前長船祐定の小太刀で、介錯なしで見事に切腹して果てたのと、昭和四十五年の三島出紀夫事件だと思えます。

戦国から江戸の時代になりますと、殿様から死を賜る場合と、良心の呵責かしかくでお詫びのために腹を裂いて死ぬことで、介錯とは、出血多量で長時間苦しむのを助けるために、刀で首を切り落として死を早める、現代では絶対禁止されている自殺幇助ぼうじょです。この自殺法は武士にだけ許されている特権で、武士以外の農工商の人たちは、自分の意思に関係なく、一方的な打ち首という処刑でした。

武士は死に際して、自分の意思で切腹用の純白の袴を着用し、辞世しせいを詠よむことも許され、肩衣かたぎぬ（袴でない部分）をはねて、その裾すそで膝ひざを縛り、四宝しほう（普通の作りは三宝という）に置かれた短刀を取って、体が後ろに倒れないように、四宝を左手でお尻の下へ敷き、紙を巻いた短刀を右手で左腹に突き刺します。ここが武士としての正念場で、右に向かって腹を切りつつ、どれだけ

痛さに耐えられるか、武士の価値観の見せ所です。どうしても耐えられなくなった時、切腹者は首を差し出し、自分の意思で介錯を頼む合図をします。切腹を待っている介錯人は、これから斬らせて頂きますという、神聖謙虚な気持ちで作法どおり待ち、合図があり次第、直ちに介錯しますが、ここに死を賜ったという、大きな意味と意義があるのです。

右の作法は殿様より死を賜った、五百石以上の武士の切腹の場合で、大名家に預けられた赤穂浪士は別格として、五百石以下の軽輩の場合は、よほど人格の高い者でない限り、短刀を腹に突き刺した瞬間に介錯したり、もっと下がっては短刀を手を取った瞬間に刀を振り下ろしたり、ひどいになると、四宝の上に置いた扇子を手を取った時に首を打たれたものです。また、足軽や小者の切腹は、自分の意思で行わない限り認められず、介錯人は同僚などに自分で頼む以外に、家中の役人はつかない、本格的な自殺でした。平安時代に始まったとされる切腹は、腹を十文字に裂いて、最後は

喉のどをついて果てるのですが、戦国時代以後殿様の名で死を賜う者には、介錯人がつけられたということです。

ためらい傷を腹に作ったり、その他、武士らしくない行動に出た者は、蔑あざまれ押さえつけられて、町人や百姓と同じ打ち首です。上位の者は切腹が終わりますと、介錯人が刀に水をかけた後、他の役人が首の検分をすませ、刀に水をかけた柄杓ひしやくの柄えの両端を削ってとがらせ、首と胴体に差し込んで遺体を元の姿に復元し、自分の家に帰らせるか、菩提寺に引き取ってもらいます。これが農工商以下の犯罪人の処刑の場合には、罪状にもよりますが、打ち首獄門ともなれば、吹き溜まりだといって、罪人の首を落とす長方形の穴を掘り、掘った上を盛りあげて三た和土た手法き（石灰とニガリと土の混合）による土壇場どたんばを作り、その後ろに目隠しされた罪人を座らせ、首を刎はねて血と共に吹き溜まりに落としました。人生の瀬戸際、最終を表す言葉に、『人生の上壇場に来て』とか、『人生の吹き溜まり』などがありますが、この語源は斬首の処刑場からきた言

葉です。

処刑が終わった罪人の遺体は横たえて、新しい試し斬りに使われたりします。武士の扱あつかいとは大きな違いですね。

この違いは身分もさることながら、常に刀を帯び、武術に携わる人間たちの、精神性の高さを評価したものです。武芸の鍛錬と同時に学問も必要で、それが兵法（現代では政治の駆け引き）にもつながり、剣道では試合の駆け引きにつながります。私が小学校五年生の頃、『青少年学徒に賜りたる勅語』ちよくごというのが教科書にありまして、その中に、

『文を修め武を練り、以て質実剛健の気風を永世に維持せんとす』という一文がありました。昔の子供には、そんな無茶苦茶にむつかしい言葉が理解できたのですが、不思議です。勅語には、ちゃんと文武両道ぶぶんりやうどうが謳うたわれていましたし、あくまでも清廉潔白せいれんけつぱくを教えられました。

武士の日常は清廉潔白を信条としていて、それは娯楽のひとつである囲碁碁の碁盤にも現れています。碁盤の裏面中央に、

四角い凸型の凹があるのは、武士同士が対局中に、徳島弁でいう、ちやごすいとく、へらこい行為、すなわち武士にあるまじき行為をした場合は、如何に娯楽とはいえ、腹を切るから首を落としてこの上に晒せ、という意味で、基盤の裏側の穴は首が固定して、置きやすいように、四角い特殊な形の穴が開いているんだそうで、この穴を血溜まりといいます。

長い文章終わりますが、最後に、徳島県の剣道、居合道のますますの発展と、皆様の健康とすばらしい交流を祈念しつつ、私も稽古をさせて頂きたいと思しますので、よろしくご指導下さいますようお願いいたします。

※この文章は平成九年一月五日、徳島市中央公民館で話をさせて頂いた、私の講演から抜粋して文章に改めたものです。

もう空白は埋められない

三好支部長 高橋 和宗



泉西の三好郡には又森少佐（山城町出身）が剣道を奨励した歴史がある。幼児期、会場

町村持廻りで青年団剣道大会が盛んに行なわれ、観戦に駆け廻ったものであるが、小学校時代にはその記憶がない。支那事変で大会が中止されたのであろう。中学（現池田高校）に入学するや、郡小陸上大会で百米走の選手権をとっていたので陸上部から強引な入部勧誘があったが、幼児期に見た剣道が心に強く刻みこまれていたのであろう。それをふりきって剣道部に入部した。剣道歴をふり返り誇れるものは、良き師と剣友に恵まれたことである。

中学時代、東京高師を卒業したばかりの阿部鎮先生に手ほどきを受け、三年間仕込まれた。阿部先生は後に山形県の教育長、

全剣連副会長で亡くなられている。朝げいこ、放課後のけいこを夢中になって行なった。しかし、四年の時には先生の転勤のショックも加わって肺門淋腺を患い何日か学校を休んだこともある。

師範学校本科（この時本科予科制となる）に入学し迷わず剣道部を選ぶ。中学から本科に入った者の中でただ一人の入部、沢山と記憶している。幸なことにここでも良き師にめぐりあった。武専出身の御前試合で優勝された藤川市太郎先生にじこかれた。予科から来た林裕一君（県剣連審議員でじこなられた）宮崎、新居、西田、浮橋などとよく竹刀をあわせた。太平洋戦争たけなわ、朝昼晩の食事は茶碗一杯、たくあん、少量の味噌汁で、激しいけいこに寮の自室へ入るや否や倒れ、うつぶせのままじっとしていたことが幾度となくあったことを想い起こす。

折角良き師、良き友に恵まれ上昇気流に乗っていたのに、戦争に邪魔され、二年生の時、尼崎に勤労働員に出動してから竹刀

を握ることも出来なくなった。終戦間際、特甲幹で熊本上官学校あとに居て空襲にあり、岡山へ移動、終戦となる。この間勿論竹刀を握ることがなかった。その後、剣道廃止、「しない競技」で復活と剣道史をにごしているが、二十才代は自分の剣道史は空白となっている。

三十才代、(故)頭師栄一先生の率いる池中剣道部長を引継ぎ、準優勝させた思い出は、頭師先生の偉人さと共に脳裡から離れない。この頃、三段。県大会で準優勝して支部の(故)国金唯義、(故)高岡先生等をよろこばせたこともあるが、三好郡で、国金、頭師両先生と、中学校剣道の草分け的存在となり、剣道後輩の育成に励んだことが誇り得ることである。この事実の証は、鴨島の乾先生とお会いするたび挨拶の次に出てくる。「戦後の中学校剣道の草分けは私等ですよ」との乾先生の言葉である。

学校勤めは、進学主任、管理職、県教委勤務等になると余程意志が強くなければ趣味を継続出来ない多忙さがある。四十才代から退職するまで、自分の意志の弱さから

空白となっている。現在市場署長香川久次先生に子どもの指導をお願いしたのは二・三年前のことであるが、先生は厳しい指導をされる中で「継続は力なり」をよく言われていた。聞かされる度に自己の空白をくやんだものである。

過日、県剣道高齢者剣友会の先生方が井川町「なでしこ祭」に、三好支部並びに少年剣士に指導をしてやろうと全県から二十数名おこし下さった。遠藤県剣連会長さんもお出で下さった。三好支部として県西の剣道発展を常に心に抱いて下さるその厚意に感謝するばかりである。脚の膝関節の痛みのため終始見学させていたのだが、高齢ながら大変お元気で熱心に丁寧な指導される様子に心打たれると共に、香川久次先生の子どもに言われていた継続は力なりの格言を何回かつぶやいた。阿部鎮先生の著書『剣道の極意』の最後にも「兎に角稽古すること」書かれている。竹刀を握らなかつた空白を、年令(七十三才)や体力の衰えを見せかけている今、取り返すすべもない。

高齢者は剣友会の先生方は、根っからの剣道好きで、高齢の現在まで日夜修練を怠らず生涯の剣友が集い切磋琢磨されている。自分も頑張らなければならぬ。空白から生じた心技の未熟は見取り稽古で多少補えるとして、段位取得の欲望を捨て、ただひたすら(十年間週一)日欠かさず子どもの剣道を見てきた)子どもの剣道上達を願って子どもの稽古台になってやり度いと思っ

ている。三好郡では、現在久保副支部長、平田、増田、萩田、合田、徳水、阿佐、山下(敏)、笠井の先生方が郡支部会員の中核となり郡剣道の振興に尽力され、後輩の指導と自己の修練に励まれている。九月から郡内剣道教室の合同練習を月の第二・第四の金曜日夜池田体育館で毎月開催している。指導者十四・五名、少年剣士六十名位毎回参加し約六十名の支部会員が一体となって熱心に後輩の指導と自己修練に励んでいる。これを更によって行く世話をするのも支部長の仕事と自覚し、頑張る決意である。

新しい環境での生活

筑波大学一年 坪 井 さくら

(富岡東高出身)



大学生になって

すぐの頃は生活環

境の変化に慣れる

までに苦労しまし

た。初めての一人

暮らし、周囲は知らない人ばかりで、授業の形式も今までとは全然違っていました。

そして、なによりも剣道に対しての環境変化が一番とまどいました。想像していた生活とは全く異なったスタートでした。今ではその生活にも慣れ、私生活、剣道ともに充実した日々を送っています。

私生活で特に強く感じたことは、「自由」です。筑波大学は一年生の間はほとんどの学生が寮生活しています。寮の管理人はいないし、門限もありません。二十四時間を自分のペースで使えるということです。しかし、あまりの自由さに羽目をはずすと、

あとで必ず痛い目にあっています。体調をくずしても自分ではどうにかするしかないし、ちょっとした隙に盗難にあってしまいます。結局は全て自分の責任となるわけです。この自己管理が難しいですが、うまくやりこなせるようになると有意義な生活を過ごせます。

授業で顔見知りになり、少しずつの会話をかわしていくうちに、友達もたくさんできました。私は体育専門学群生なので、ほとんどの友達が何らかのスポーツ経験者で、なかには日本代表選手とか、オリンピック出場選手もいます。最初はすごい人たちと友達になったんだと思っていました。話しをしてみれば普通の同世代の人たちでした。また、剣道しか知らない私にとって、彼女(彼)らの体験談は興味深くおもしろいのです。とても厳しい世界でやってきた人やそうでない人によって話の内容はさまざまです。しかし、どの人の話にもどこか共感できる場所があり、自分と比較しながら語りあったりもしました。この一年で自分の視野がとても広がったなと思って

います。

授業は体育、スポーツに関する専門的な知識、実技から英語、生理学など一般教養まで幅広く学ばなくてはなりません。難しくてなかなか理解できにくい点もありますが、この大学でしか学べないような貴重な講義ばかりです。

私生活もさることながら、一番勉強させられたのは剣道に関してです。部長、監督の先生はいらっしゃいますが、ほとんど指導していただく事はありません。「大学は自分で考えて剣道をやるところだ」と聞いていましたが、その言葉の意味がよく分かりました。四月ぐらいは先輩方の剣道に対する意識の高さに圧倒され、自分の未熟さをいやというほど味わいました。だが無我夢中にやっていくうちに少しずつ部の環境にも慣れました。技術的なことはよく分かりませんが、精神的に少しはたくましくなってきたと思います。

稽古は学生主体で、練習内容も学生同士で話し合っていて決めています。また、お互いに稽古してみても長所、短所を指摘しあっ

ています。高校までは心のどこかでやらさ
れている部分を感じていたが、大学は違
います。自分で目的を持ち厳しさを求めてや
ていかなければなりません。それを実行す
るしないは個人の自由ですが、その練習の
成果ははっきりと出てきています。高校時
代無名の選手が大学で活躍できるのはそ
にあると思いました。

剣道を通じての人間形成という点にお
いても勉強させられています。剣道だけで
ても人間的なことも認められなければ意味
がないと分かりました。目上の方を敬うこ
とや礼儀、ことば使いなど、直接だれかに
言われるのではなく先輩方の態度や行動から
学ぶことが多くありました。

大学生になってからの数か月は生きてき
たなかで一番内容の濃い時間を過ごしてき
たように思います。つらいこと、苦労した
ことなど山ほどありましたが、その分楽し
いことやうれしいことも経験できました。
これからが学生生活の本番です。もっとい
ろいろなことを経験し、より豊かな人間に
なっていきたいと決意しています。

※なお、坪井さんは、一年生ながら筑
波大の選手として、関東女子学生選手
権で三位、全日本女子学生選手権でも
ベスト8に進出しており、今後の活躍
が期待されています。

社会人としての第一歩

徳島刑務所支部 前 田 秀 一



本年四月一日、
徳島刑務所に採用
されて、社会人と
しての第一歩が始
まった。刑務所で

は、警察と同じく剣道、柔道ともに正科で
あり、基本的には月々金曜日まで勤務終了
後、約1時間ではあるが稽古をしている。
このような練習環境に恵まれている職場に
入れたことにとっても感謝している。

私は、出身地が愛媛県で、大学は鹿児島
の鹿屋体育大学であり、徳島で剣道をする
ことは初めてであり、社会人一年目として
の不安とともに初めての地で剣道をしてい
く不安とが重なった始まりであった。

私がこの一年、社会人として剣道をして
きて感じたことは、学生のとくと違い剣道
に対する取り組みが全然違うことである。
学生のとときは、もちろん人それぞれである

が、いつでも稽古ができる環境であり、稽古をやらされているという雰囲気が多々観

これからもよろしく願います。

られたが、稽古時間が限られている社会人では、自ら稽古に取り組み限られた稽古時間をとっても人切にしていると感じた。私も学生時代と比べると稽古時間は半分以下になっているが、この稽古時間を補うためには、一回一回の稽古の質が大切になってくると思う。限られた時間で力をつけるということは非常に難しいことである。やはり、学生のとくと同じような剣道をしてい

たのでは社会人では通用しないと思う。そのためには、今まで以上に一足一刀の間合

いからの攻防が重要になり、これからの課題になっていくと思う。

社会人になり一年が経過しようとしているが、これから剣道を続けていくうえで役所での稽古はもちろんであるが、週二回の警察の稽古会などに参加し一つ一つ勉強していきたい。そして、四国の矯正の施設對抗、選手権をはじめとし、徳島県下で行なわれる各種大会に参加し、社会人の剣道に通用する力をつけていきたいと思う。



段位合格者

七段に合格して

振り向けば七段

徳島支部 松村和宏



平成九年五月八

日京都審査にて、
七段に合格するこ
とができました。

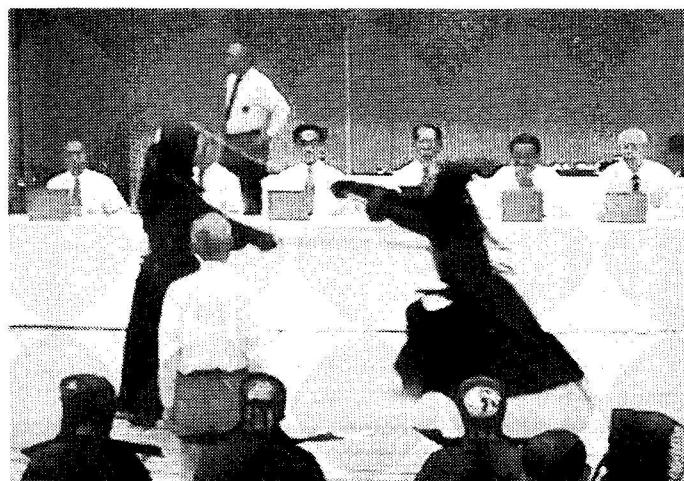
昨年の京都に始ま

り仙台、東京と、そして一年。最初の京都は、六段審査時に一度で合格したせか、練習もそこそこで、かるい気持ちで油断していました。体も思いどおり動かず、気持ちも集中できなかったように思います。

二回目の名古屋からは、稽古はしました。七段はそう甘くなく、独特の雰囲気になり込んでしまっています。しかし、「普段ど

おりの自分を出すことができれば合格できる」とその時思いました。三回目の東京は、最初の一人目は自分のペースでいけたのですが、二人目で失敗し、そして去年からちょうど一年、四回日の挑戦となりました。今回は少々自信があり、絶対合格しなければならぬと思えました。息子も今年就職活動を控えていたので、最初に良い風を吹かせて後へ続けてやりたいと思い頑張りました。審査は得意の面が冴え、普段どおりの自分をだすことができました。

私が剣道を始めたのは中学の時。高校まで稽古に励みましたが、それから十一年間剣道から離れ二十八歳の時に入田錬成会として少年剣道教室を始めました。四年前に地元徳島で国体が開催されたことはまだ記憶に新しく思います。その国体に息子を徳島県代表として少年の部で出場させることを夢み一緒に頑張りました。小学校、中学校とは私が指導しましたが高校は福多先生にお願いしお世話になりました。最初息子は試合にも全然勝てず、弁当もそのまま持ち帰るといいう日が続きましたが、基本だけは忠



京都審査での筆者（右）

実に教えました。国体では少年の部の大将を務め準優勝という素晴らしい成績を修め、息子にとっても私自身にとっても、人生において一つの節目となる大変素晴らしい経験になったように思います。

剣道は青少年の健全育成ならび体力の向上を計る上でも非常に素晴らしいものです。現在少年剣道の指導にあたり子供の心をと

らえ子供の視点で指導してやらなくてはと心がけております。

又、私も、いち会社の経営者として剣道を通して精神の修養、負けん気根性を学ばせていただきました。剣道なくして人生を語ることはできません。今回の七段合格を期によりいっそう精進し、稽古に励みたいと思っております。今後とも諸先生方を始め皆様方のご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

居合道七段に合格して

居合道部 吉岡修一



平成九年七月十

四日、徳島市立体

育館において行わ

れました、居合道

六・七段審査会に

おきまして、七段に昇段させていただきました。これは、ひとえに地元審査会を開催していただきました、徳島県剣道連盟の諸先生、剣友の方、師匠の平尾先生、徹心道場同僚の人達の暖かい、ご指導とご助言を賜わった、おかげであると深く感謝し、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。私の居合道七段合格は、幸運に恵まれていたと思います。徳島で初めて行われました西日本地区居合道講習会（平成九年七月十二日～十三の二日間）と続いて六・七段審査会（平成九年七月十四日）が、私の居合道七段受審できる年に徳島で開催され、地の利に恵まれ、又、二日間講習を受けた

後の審査という、受審者にとっては、気分的にも、スムーズに行ったと思います。また、師匠、先輩、剣友、練習場にも恵まれ、集中して稽古ができたおかげであると思います。

七段受審者は、四十一名で五十六才までが第一会場、五十七才以上が第二会場に分かれました。私は第一会場の最終組でした。実技の抜き本数は五本。うち古流（私は、無双直伝英信流）二本は、正座の部「前」と「附込」。指定技は、全剣連居合より二本。三本目「受け流し」、六本目「諸手抜き」、八本目「顔面当て」でこの三本は審査直前に発表されました。礼法は、全剣連居合の礼法で、前後の礼法を入れ、六分間以内とするという事で審査が行われました。指定技（全剣連居合三本）の間違いと時間オーバーは、不合格となりますので、それらを気にしながらゆったりとした気分では、緩急をつけ受審しました。実技合格は十三名。学科の問題は「居合道の発展普及策について」「抜き付けと切りおろしについて」の二問でありました。

その結果、十三名合格。合格率三十一・七%でした。又、剣友で同じ道場生の鈴江正雄氏が、六段に合格され、二重の喜びでした。

居合は「豪快にして、優美」にせよとよく言われますが、正確で大きく、強くして、もう少し心の修行をと思っております。幸にして師匠の平尾先生よりいただきました「明鏡止水」を座右の銘として、これをよく理解し、その奥にある「無」の境地まで進めたらと思っております、今後とも宜しくご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

素心を貫く

―感謝の心と謙虚さを失うことなく―

阿南支部 芝原 功 一



平成九年十一月二十六日、日本武道館における初めての審査で、思いがけなく七段合格

の栄を賜りました。これまでご指導、ご鞭撻いただきました遠藤一美会長さんを始めとする徳島県剣道連盟の諸先生方、同行諸氏の皆様方には、心から厚く感謝申し上げます。未だ合格の実感は無く、気恥ずかしさと嬉しさが入り混じった複雑な心境です。兄（出葉成一・徳島県警察本部勤務）からは、「おめでとう、ようやった。けどなあ、七段を取ってからが大変ぞ。」と祝いと励ましの言葉をもらいましたが、ずしんと重たい面をくらったような感じがしました。ただ、間違いなく、私にとって剣道との

「新たな出会い」が始まったことは否めません。

この度の審査に臨み、特に意識して努めたことは、いかにして立ち会いに集中するかという点です。言い換えれば、「あがり症」をいかに抑えるかということです。自分の実力は自分が一番よく知っている。審査において実力以上の力が発揮できることはまずないだろう。それならば、今ある力を最大限に発揮できるよう、常に手足・体に命令しておく必要がある。それを可能にするのが「精神力・自分に負けない心」なんだととらえ、自分なりに職場や日常生活はもちろん、数少ない稽古の中で、少年剣道の指導を通して、あるいは審判の経験を積むことを通して等、少しずつ養っていきましました。

「四十歳を過ぎれば、心の修練により重点を置いた稽古が効果的である。」と、故小川忠太郎先生が言われています。地下鉄九段下駅の、あの長いきつい階段を、八十歳過ぎてからも自分で防具を担がれ、武道館に通われるお姿を剣道雑誌の写真で何

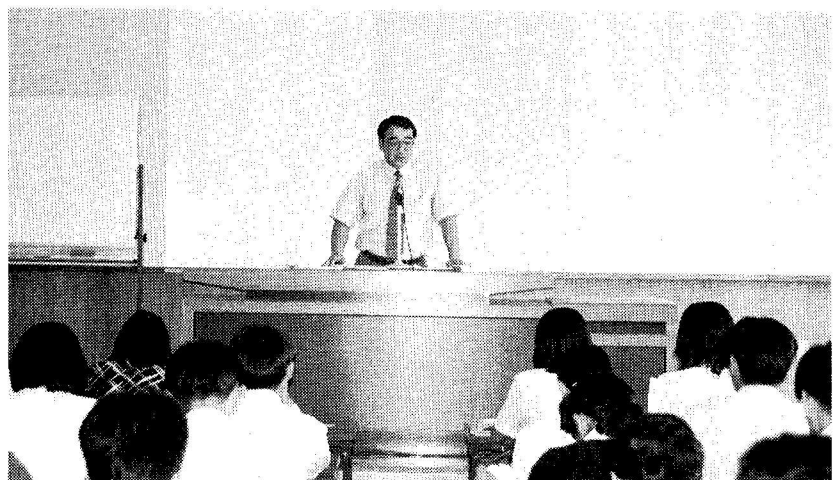
度か見たことがあります。私も審査前日と当日の二日間、朝夕同じ体験をし、先生のお心に僅かながら触れることができたような思いで、熱い感動を覚えました。

さて、いよいよ本番ですが、自分の戦場を知らなければ戦いできません。私は前日の六段審査を終日見学し、受付の手順、フロアーの状態、立ち会いの間隔（構えてみました）、トイレ等を確認しました。「明日、ここで全く同じ段取りで行われるんだから、これで一つのプレッシャーは乗り越えられた。」と確信した次第です。また、何組か我流で審査してみました。昼には近くの靖国神社に参拝し、明日の立ち会いが立派にできるようにと祈願してきました。実科終了直後の私の心境は、平成二年五月の京都六段審査と全く同じでした。「自分の持てる力は出し切った。後は待つだけだ。」と……。立ち会いは、西谷肇一先生に見ていただいております。「一人目はかなり押していたが、二人目はやや押され気味。しかし、構えと姿勢が崩れていなかったから、もしかしたらいけとるんとちがいます

か。」の有り難い評価をいただきました。

私の、本番までの三ヶ月間の稽古方法は、およそ次のようなものでした。メンタル面では、「相手も苦しいんだ。だったら気持ちの上で優位に立て。絶対に退くな、構えを崩すな。」と自ら暗示をかけ、リラクゼーションするとともに「気」を高めることに努めました。実技面では「一発合格」を目指して、常に残心を意識し、自分の得意技「面、コテ・面」を主体とした試合的地稽古と懸かり稽古を集中的にお願いしました。また少年剣士達には、打突の強さ等安全面には十分配慮して、間合いと気位を学ばせてもらいました。その他、着装、構え、姿勢、抜刀、納刀等は常に鏡を見て点検し、これまでの修練を自分なりに整理することにも努めました。袴の畳み方、着装に関しては、三男坊の勇に私の「お師匠さん」になってもらいました。

古米、「白己流の稽古より正師を三年求めよ。」という教えがあります。私は、年齢段位に関係なく、また剣道に全く縁の無い方であっても、すばらしい先生方、人々



初任者研修講座（徳島県教育研修センター）で講義中の筆者

にたくさん巡り合わせていただいております。それは書の世界で巡り会った方々も含めて、これら全ての方々が、私にとっての「師」なのです。これからも感謝と尊敬の念を失することなく、素心を貫いてまいり

たいと思います。

おわりになりましたが、私に正しい修養のあり方をお示しいただき、自信をお与えくださった徳島大学剣道部時代からの師堀江幸夫先生、そして地元の浜田逸郎、尾崎行男両先生、阿南支部の先生方、お稽古で貴重な時間を与えていただきました。羽ノ浦早朝稽古会の先生方、羽ノ浦少年剣道教室（責任者・平正明先生）の指導者の方々、少年剣士諸君、温かいまなざしでいつも支えていただきました保護者の皆様方、さらに兄達夫婦には衷心よりお礼申し上げます。家族にはいろいろと心配をかけました。感謝します。

合掌

七段審査にて

美馬東部支部 柴田宗忠



こうして原稿を書けること、これも諸先生、先輩方のご指導のおかげだと心から感謝しております。

この場をお借りして御礼を申し上げます。審査当日の状況を思いつくまに書いてみます。今回は、立ち会いまでの待ち時間が短く感じられました。なつかしい顔ぶれの先輩や後輩にあいさつをしたり、同級生と冗談を言ったりするうちに立ち会いの順番が来たようです。

リラックスできたなと思うと同時に準備ができていない自分に気づきあわてて小手や柄革を濡らしました。しかし、直前になり、面をつけてパイプいすに座ると急に緊張を感じ、それを抑えるため深呼吸を二・三回して、立ち会いの心構えを思い出しました。

「相手との糸をきらぬよう心がけ、体を崩さず中央で技を出す。」これは、今回の審査用に用意した目標のようなものです。

立ち会いが始まりました。一人目は身長が一八〇センチ以上と上背がある相手。これはまづい、ふところが深く面は当たりそうにないな、しかし、全力でぶつかろうと……。あとは夢中であまり覚えておりません。ただ、二人目の後半から立ち会いが長く感じられました。実科審査が終わったあと、いつも思うことなのですが、あるとき、面を打てばよかったなとか、無駄打ちがあったな、あそこで引いたのはまづかったな等、自己分析や反省をして次からの稽古の方法や目標を考えるのです。この気持ちをおぼれる事なく次回の審査にまで継続できれば、自分なりに進歩があるのではないかと思います。実際は、それを覚えていくのが長くて一ヵ月程度、情けないことです。このような反省のための反省を考えている間に実科審査の発表が始まりました。自分の番号があるのを見つけたましたが、信じられず、二階まで駆け上がり宅急便で送り返すためこん包しておいた防具を解き、垂の番号を

確認しました。再度、発表の模造紙を見ましたが間違いありませんでした。実技審査は幸運にも合格できました。今だに信じられずまだ実感がありません。しかし、次の剣道形審査のことを考えると喜んでゐる暇はありません。形の審査は緊張の連続でした。稽古不足を深く反省しました。

アリーナでは形審査の発表のため混雑し、番号が見えませんが、発表用紙に×印がところどころついています。祈るような気持ちで自分の番号を見ました。×印はついていません。ほっとする間もなく、今度は学科審査を乗り切らなくてはなりません。自分なりにまとめておいた解答を読み返している間もなく黒い下敷きが配られるとハコートある武道館のざわめきが消え、解答用紙に文字を書くかすかな音だけが聞こえます。解答用紙を提出し、二階の控え席で発表を待ちました。全員合格のアクションを聞くと会場は拍手が起りました。無事学科試験を終え、武道館を出たのは午後八時を過ぎ、雨も小ぶりになり風だけが時折強く吹いていました。短いようで非常に長い一日でした。

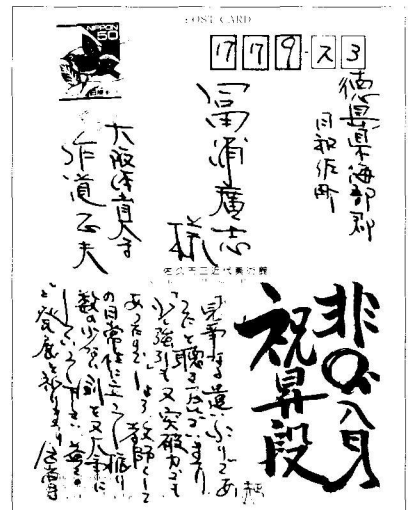
日常と非日常と

海部支部 富 浦 廣 志

剣道を修行するものにとって、稽古こそすべてであると考えている。試合や、昇段審査は非日常の世界であり、日々の修練の結果として現れる。言い換えれば「稽古をする」行為そのものが重要であり成長の糧となる。

それはもちろんな話であるのだが、職業を持ち生きた生徒を目の前にした自分の稽古は決して日々の努力とは言い難い。少ない稽古をいかに補い、気を充実させるかは、長年の課題である。「教える側としての剣道」「審判としての剣道」「生活のなかの剣道」「仕事」を「自分の剣道」(時折の稽古)(試合をする自分)(昇段審査を受ける自分)につなげ、自分を太らせることができるのであれば、稽古不足を補えるのではないかと考える。

師・作道との稽古はまさに非日常である。昇段審査や試合、時折の稽古とは少し違う。



「恐い」のである。「作道は富浦という人間を知り尽くしている」と思われて仕方がない。剣道を人生そのものとして考えている人の前では嘘はつけない。全人格をかけて一本の稽古をお願いする。稽古前には体が震え頭に血が上がる。恐怖で体が硬直する。その恐怖をバネにしてはじける。もちろんお忙しい師には「富浦との稽古」みたいな特別な感情はない。しかし、師・作道との稽古は自分を映す鏡なのである。稽古をお願いして先生の「好、不調」は感じたことがない。まさに壁であり、自分の(私の剣道)を映す鏡である。だから恐いのである。日常をさぼっている? いいわけをできない

人だから全人格で（仕事頑張っている事も含めて）稽古をお願いする。私にとっては楽しい時間だし、かけがえのない時間になる。そして、自分のいたらなさを「気づく」。その「気づき」が自分を支えてきたことを感じてきたから又掛かる。

日常の中にも「気づき」はある。

最初はあきらめだった。三十七歳の年齢から来る衰え。稽古不足も含めての試合での負けや地稽古で打たれすぎていることなどから「あきらめ」の心が湧いてきた。選手としても「一流と言われたかった」という心をあきらめた。全国の大会で活躍する自分の姿を想像していた心をあきらめた。しかし、このマイナスの思考の中にも「気づき」があった。十五センチ構えを後ろに下げることができた。この「気づき」は技能的に大きかった。これは去年の活躍を左右した技能的な「気づき」となった。

仕事の中でも「気づき」はある。「今できることをする」仕事とのなかからの気づきである。簡単な言葉だができていないのである。結果を追ってしまうのである。今

まで以上にプロセスを大切にすると言うことに「気づいた」のである。事象には結果ができる。原因がどの結果にもある。その原因を追う事にした。力を出せない原因を探る。試合の時に自分が考えている以上に思ったように動かない。アップをする。アップの仕方を考える。技を出す前のプロセスを大事にできるようにしたのである。直接有効打突につながる技よりも技前で集中することを念じた。「試合に負ける」「力を出せない」などを、自分の技量のせいにして、相手の強さのせいにして、稽古不足や不調のせいにしていたりした。「力を出す」事を目標にすることで、「せい」にできない自分の剣道が見えてきたのである。自分の剣道の仕組みを律し切った立ち会いをしたいと願うようになった。

日常を大切にしているの剣道、日常があつての非日常であることを肝に銘じ、打ち数の少ない剣道を大切にしていきたい。皆様に生かされているおかげです。

六段に合格して

六段に合格して

刑務所支部 片山 尊 史



幸運にも、平成九年五月の京都審査において六段に合格することができましたが、私は

この紙面を借りて披露するだけの理念・技術が乏しいため、今振り返り感じたままを書かせてもらいます。

私が初めて六段審査を受けたのは、二十九歳の時で、今回と同じ京都でした。

当時の私の剣道は、試合に勝つため、ひたすら相手より「早く」・「多く」・「厳しく」だけを目標に稽古に励んでおりましたが、いざ昇段のための稽古となると「多く打ちすぎるな」「姿勢を崩すな」「返し技を打て」と、型にはまったものでした。

審査当日、私は精一杯型にはまった剣道

に努めました。結果は不合格でした。私の審査会場である第一コートでは、私同様型にはまった剣道と、さながら試合同然相手を打ちのめす剣道との二種類に大別されていました。

合格者の顔ぶれをみると、前者はほとんど不合格であり、後者の中から多くの合格者がでておりました。私なりにこの結果から考えたことは、

一、審査であるからと、急ぎよ取りつくろっ

た剣道をして「ダメ」だ。

二、年相応の年代にあった剣道をしなければ「ダメ」だ。

と言うことだけでした。

他にも自分を振り返り多々考える必要があったかもしれないが、この時は他に考えが浮かばず、結局、自分には同じ五段の人を相手に後者のような剣道ができる自信が無く、当分昇段は締めようと決めました。その後は、六段に対する意欲も無くなり月日だけが流れていきました。

ある時、私の長男が「剣道をやりたい」と言ったことをきっかけに、平成八年五月

から鴨島少年剣道教室に親子ともどもお世話になり、子供達と一緒に、平尾勝美先生・笠井恵之先生をはじめ諸先生方から剣道の基本を教わりました。

今まで、中学・高校・大学・一般と基本打ちの稽古を練習の中で必ずしてきましたが、子供達と一緒に諸先生方から御指導を受けるうちに、今まで忘れていた本当の基本と言うものを思い出させて頂き、また、教わりました。

鴨島少年剣道教室で御世話になり始め一年ががようとした時、自然と「今年は六段審査に行ってみようかな」と言う気持ちになりました。去年の自分と今の自分を比べ、剣道が強くなったとか、技術が向上したとか言うことは全くありません。何か自分の中で信じられるものが見えたような気がただけです。

審査当日は、七年前のような気負いも策略も有りませんでした。

基本どおり、十分気合いを入れ、真っすぐ打ち込み、相手との縁を切ることなく、限られた時間内、精一杯自分の普段の剣道

をしたつもりでしたが、それでも後で、少し打ち過ぎたかもしれないと反省していました。

結果は幸運にも合格しましたが、これらが本当の剣道の修行だなと感じました。

「剣道に近道なし」まだまだ課題の多い私ですが、更に稽古を積んで精進したいと思っております。

最後になりましたが、平尾先生・笠井先生また、日々御指導くださる中村先生をはじめ刑務所支部の諸先生方には厚くお礼申し上げます。

六段に合格して

丹生谷支部 井村 雅人



平成九年五月七日、京都審査で六段に合格できました。六段に合格し

り返りますと、四段・五段と昇段するたびに剣道の深さを知り、剣道の魅力を感じて来ました。今回、六段に合格した今あらためて生涯剣道の大切さを知りました。三段までは強ければ良いという剣道をしていたように思います。それが四段になると強さだけでは、昇段できませんでした。五段になるとより一層の精進がなければ五段になりませんでした。それが、今回の六段合格は、審査員の先生方が、私に「六段としての剣道を錬磨、追求、研究しなさい」という意味があるから下さった六段だと思っています。六段としての剣風・気位を身につけるには日々錬磨、精進が必要です。なか

なか思うようには、稽古ができないと思いますが自分なりに努力していく覚悟です。

現在、鶯敷町に暮らし振武館で稽古しております。館長、吉田租先生にはいろいろと剣道の深いところをお教え頂いております。また、私の剣道の基礎を作ってくれた平岡竹雄先生・中山啓男先生・福井軍二先生達との出会いがなければ剣道を継承していただろうし、先生方の熱意ある指導に感謝いたします。審査前、稽古をしていただいた徳島至誠館の中山副館長をはじめ先生方には御指導ありがとうございました。同期で剣友の（熊沢・福多・本田・桜井）先生達、私の良きライバルであり良き相談相手です、このすばらしい人達と出会えたのも剣道です。

剣道は人を造る道だといわれていますがまさに、そのとおりだと私は思います。私が今稽古している振武館には吉田租先生をはじめ二十名近くの人達が稽古しています。ずっと剣道を続けて来た人、一度は竹刀を置き再び竹刀を持ち構えなおした人、初め

て剣道を始めた人が共に剣道をして語り合う、そして剣の向上、人格の形成を目指しています。この仲間たちと共に、丹生谷の剣道の発展と徳島県の剣道の発展に繋がるよう精進努力したいと思います。最後に、剣道に理解ある家族にありがとう。



平成9年7月31日 恩師中山先生・福井先生、同期生と至誠館にて

剣道再開

刑務所支部 西 宇 康 治



平成九年五月、京都審査において、諸先生方のご指導とご厚情のお陰をもちまして、六段に合格することができました。

昭和六十二年、腰痛に悩まされていたころ、椎間板損傷となったことから、『もはやこれまで』と、剣道を諦めた私でしたが、平成七年四月に長男が、北島町内の誠武館道場で剣道を習い始め、父親として子供を道場へ連れて行っておりましたところ、館長である大野義則先生から、「暇な時に子供たちの指導に来て下さい。」とのお誘いがありました。

しかし、その時の私は、『もう剣道は止めたんだ』との思いから、踏ん切りが付かず、暫らく、子供たちを見守るだけの日々が続いておりましたが、子供たちが、先生

から指導を受けながら、汗を流して向かって行く姿を見ているうちに、私が剣道を習

い始めて、鳴門警察署の道場で、寺西慶裕先生や故山田富康先生に、ご指導を頂いていたころの自分を思い出し、同じようなことで、注意を受けている我が子を見て苦笑し、『あれから三十年余りの歳月が流れたのか』と考える時、体の中から熱いものが込み上げてくるのを覚え、『腰痛も無理さえしなければ、子供たちの指導はできる』
と思ひ、意を決して同年七月から、子供たちとともに締めていた剣道を再開させることにしました。

子供たちに尻を叩かれるようにして再開した剣道も、長い間、竹刀ひとつ握っていなかったものですから、思うように体が動かず、気持ちばかりが逸るため、稽古は基本打ち中心に撤しました。

四十歳からの再開でしたので、特に呼吸と足体のさばきに気を付けて稽古に汗を流し、以前のような動きはできないものの、無理な打突がなくなり、少しでも早く打とうとか、打ち据えようという逸る気持ちか

らくる打ち急ぎがなくなったように思いいます。

お陰で、審査も、相手より早く打とうと
いった逸る気持ちや、気負いがなく、『来るなら来い』と極自然な立合ができ、これが功を奏したわけで、今更ながら、基本の大切さを感じました。

これを機に、『我に克つ』を目標として、稽古に励み、事故の研鑽に努めたいと思っております。

また、これからも誠武館道場で、大野先生や亀田先生のお手伝いをさせて頂きながら、子供たちに、剣道の持つ独特のよさや、礼儀作法を十分に理解させ、少しでも子供たちの人格形成のお役に立てばと考えております。

初一本

阿波支部 藤井利一



メイン、久し振りに会心の面が入った。五月十一日、名古屋は枇杷島体育館である。つい

先程まで、運動会の徒競走直前のような状態であり、平静を取りもどすべく、発声していたのである。(同伴していた家内いわく、掛け声だけで終わるのかと思ったそうである。)一瞬、間合が縮まり、小手にくるなど思いきや、小手、面と打っていた。審査員の目の前であった。後は若干分がよい所はあったものの、これはというのがなかったから、やはり、この一撃を評価してくれたのであろう。願書を出してからの付け焼き刃の稽古、打たれることしきり、自負心はぼろ雑巾のようであっただけに、幸運であり、よく稽古をしていた頃を思い出させる一本であった。

ここに、少なからず、こだわりを持った人々が千人を越えて集まり、なかには、かなり高齢な方もおいでた。真摯な態度で立合をしているのを見ますと、幸運でしただけで済ませられない気持ちになってまいります。つきましては、初一本を大切に精進を重ねますので、連盟会員の皆様、今後ともよろしくお願い致します。

後になりましたが、お手合わせて頂きました皆様に感謝致しております。また、多数の方々からご祝辞を頂戴致しまして、誠にありがとうございます。紙面をおかりしましてお礼申し上げます。

剣道六段に合格して

三好支部 萩田奉弘



平成九年八月三十日、福岡市に於いて六段審査が実施された。私にとりて初めての審査で

あり一度体験してみようと思いたったのは夏の初めの事でした。高橋支部長の一言で決断いたしました。何様にも多方面に体が忙しく、秋から春は毎週のように海に通い、夏は毎日日課として川で魚との出合を求めていそしみ、週二回の練習日は子供達に励まされながら又受験を決めてからは休むことなくいそしむ日々でした。体の方も高血圧の薬を飲んだり、気管支炎の持病をもちながら、よく体がつものだと友達からは感心やらあきられたり毎日の毎日ですが、好きで初めた剣道もはや三十七年になりました。師の国金先生から常に教えられた次のようなことを意識しました。「特に子供達

との練習とてまず気をぬく事は絶対にいけない。中学生・高校生の早さは私達よりスピードがある。真剣に、力をぬくことなく行う事は本人にとって決して悪い事ではない。」とよく教わったものでした。

前記の通りいそがしいものですから、他の先生方との練習量も少なく、年間数えるくらいのものでした。私の教室には師の残してくれた等身大の面をつけた人形があります。もう面はボロボロになっていますが、

たぶん国金先生もこの人形めがけて面打ちの稽古をしたのであろうと思います。私はこの人形をいつも先生と思い、稽古の日は子供達のくるまで数十本の面打を行います。今まで多くの先生方に教わった事を一つ一つ思い出し、姿勢を止し、足元をしつかり、体の力を抜いて間合いに注意して、剣先をゆるめる事なく等々、常々気をつけて一本一本を大切に自分の納得するまで打込みます。又、剣道形も必ず行うようにしています。もうそれだけで冬でも体から汗が吹き出していきます。

審査には前日から出発しました。ホテル

に泊まってゆっくりくつろぎ、九州の地酒も少量ながら楽しみました。朝、会場に入つて、まず、受験する人の多さに会場の人きさにそして雰囲気にも驚きました。私は年令の関係で午後の部でしたが、二階席の良い所で前半の審査を本当にじっくりとみさせてもらいました。しかし、私の目で見て合格かと思う人が合格していませんでした。これはまだまだ勉強不足だとつくづく感じました。

いよいよ、午後の部が始まり、自分の番が近づいてきました。不思議と体の力が抜け、本当に自分でもあきれほど冷静であるのに気がつきました。最初の相手の動きもよくわかりました。よく練習された体の動く相手であったが、まどわされる事なく、先も取られる事なく、何本か打ち込んだ面も納得のいく面でした。後で聞くと形七本目の胴を相手の人に抜かれていたそのためであったと聞きました。相手の方も合格されました。

発表までの間、私は少し打ちすぎたかな

と思いました。小手面も打ちました。相手が技を出して下がろうとした時でしたのでやむをえませんでした。多分、合格してないと思います、着がえを済ませていました。発表をみると合格者の番号の中に私の番号があり、その時はあわてました。木刀のつぼめはどこにあるやら、着がえもしなければなりません。会場では私を呼んでいるしこの時は平常心を失ってしまいました。笑い話です。

このたび授けていただいた段位にはずる事なく、日々の仕事に剣道に人間形成をめざして益々励みたいと思います。

五段位の修行を終えて

徳島支部 近藤 康次

子供の頃、剣道がしたくても貧困、多数の兄弟達の中、学校での授業でしか出来なくあきらめていました。小学校、高等科中退で満州へ義勇軍として渡り、満鉄・関東軍と約八年の間外地生活を続けて、昭和二十一年七月舞鶴へ復員しました。国鉄に入り、昭和五十七年に退職しました。

退職後、一年あまりぶらぶらと好きな魚釣り、凧造り等していました。ある時、近所の孫達が道路で「メーン、コテ」と稽古をしているのを見て、昔の自分を思い出しました。家内と話している内、「あなたもやれば」の一言で、上八万宅宮剣道教室「中川教士」の所へ入門させていただくととなりました。

新しい防具を身に付け、切り返しをお願いしますでしたが、昔の切り返しと違っていいからと言われ、初心者として剣道を始めました。正直な所、五十九才にもなって始め

た剣道ですから、皆様に迷惑が掛かるのでは、と一時はやめようと思いましたが。しかし、幼い時の事が想い出され、「やれば出来る筈だ!。」と思い今日までがんばりました。

今度、五段位の修行を終え、六段位受験への道が開け、去る八月二十日、福岡市立体育館に於いて合格させて頂きました。これは各地方の諸先生方の御指導して下さいましたお陰と心より感謝しております。

これからは、武道人として精進し、人間形成の道を学んで行きたいと思っております。老いぼれ剣士ではございますが、諸先生方始め皆様方の御指導の程をよろしくお願い申し上げます。

合掌

梁はりつたふネズミの道も

道なれど

誠の道ぞ 人の征く道

旅燕



居合を演武する筆者

居合道六段に合格して

鈴江正雄

平成九年七月十四日、地元徳島で実施された居合道六段審査で合格させていただきました。

振り返りますと、十五年前、何一つ居合道の知識のないままに徹心道場に入門以来、私の居合の師である平尾勝美先生を始め諸先輩方の懇切丁寧なご指導を頂いたお陰と感謝している次第であります。



審査日が近づくにつれ、先生の指導もよ

り真剣味が増し、本当に有り難く思い、自分自身、審査に向けての稽古を繰り返し復習するよう心がけました。また、先輩の先生方に判定居合の細かな注意指導や、審査に向けての心がまえなど指導をいただき本当に感謝しております。

佐賀県から始まり、東京と受審してまいりました。不合格の時は反省し、次の審査には平常心で演武が出来るようにと、自分に言い聞かせながら修練を積み重ねてまいりました。

地区講習会に於いては、二日間にわたり、講師の先生に礼法から理合について細かな部分まで注意を指導いただき、私にとって、大変有意義な勉強をさせていただきました。稽古をするたびに剣の奥深さを痛感しております。

私はまだまだ精神面、技術面からも未熟者ですが、今後健康に気をつけ、常に居合道の意義とは何かを自分なりに考え、出来るだけ長く続けていきたいものと思っております。そして今後の人生が豊かなものになるように剣居一体を目指して努力してまい

りたいと考えております。

最後に居合道部の先生方には大変お世話を頂きありがとうございます。今後とも諸先生方をはじめ皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

剣道満勇氣（漫遊記）

名西支部 阿部 金 司



諺に、「好きこそ物の上手なれ」と、上手ではないが、好きやねん！

竹刀、剣を手から

放すことができない。いい齡をして、と笑われても交剣知楽？「楽しみを以て憂を忘れ老の将に至らんとするを知らず」（論語）
剣の道には嘘がない。してはならないことはしない。真剣です。誠に楽しいものではない。が又苦しいものでもあります。耐えねばならぬ勇気が要ります。発憤奮起して破らねばならない厚い壁があります。六段の壁も厚い壁です。

漫遊記の始まりは徳島石武館の創立からです。館長重井好高先生の計いで石武館の専任師範となり、六段に成りたい念願で成田の不動尊のお詣りから剣の神様である香取、鹿島大神宮、居合の神様である仙台的

林崎大明神、伊勢神宮、東西對抗の各御陵を慕いてご利益がありますようにと神だのみの勝手な漫遊旅行をしたのです。

重井館長には誠に申し訳ないことですが、ダウン、ダウン、不合格の連続。京都の西京極体育館へも三回。ダウン。本物の五段に成っていないのに六段受審とは？「あれではアカンわ」の声が聞こえて来ました。

諦めました。受審は諦めたのですが、全本高齢者剣道大会（段位不問）に参加の機会が与えられました。野間道場、三菱道場での朝稽古、小石川の西山道場での稽古など楽しい剣道をお江戸で十回十年間味わうことができました。

此度、美馬、高下両先生から熱心に受審するようにと励ましてくれましたので勇気を鼓舞して受審しました。特に美馬先生には道只の番やら、アドバイスやらと格別にお世話になりました。嬉し
いかぎりです。五段を授与されたのが昭和四十九年でしたので、有に二十五年の歳月が過ぎていました。其の間に人勢の先生方にお世話になり、交剣知愛、温かく育てて

下さったご恩は忘れてはならないと誓っております。今後ともどうぞよろしくお願ひします。

酒天童子呑洋居士

平成九年度

称号・段位合格者一覽

一 剣道一

【教士】

五月八日

山岸 章彦

十一月二十七日

松村 和宏

【錬士】

五月八日

美馬 和義

福多 雅英

熊沢 信行

柴田 宗忠

十一月二十七日

井村 雅人

【七段】

五月八日

松村 和宏

十一月二十六日

富浦 廣志

柴田 宗忠

芝原 功一

【六段】

五月七日

岩木 一功

片山 尊史

井村 雅人

西村 康治

阿部 全司

五月十一日

藤井 利一

八月三十日

吉田 茂生

合田 秀實

萩田 奉弘

近藤 康次

十一月二十三日

生田 浩章

【五段】

五月十八日

佐伯 守夫

南谷 雅彦

宮元 達郎

九月二十一日

阪井 丘芳

高尾 茂

十二月三十日

中尾 幸雄

富永 昭

大野 祐吉

森本 敦子

二月十五日

北村 仁志

花木 正嘉

中尾 青子

九月二十一日

鈴江 俊和

山崎 砂織

十一月三十日

岡田 武治

黒田 正己

二月十五日

小笠原 卓

天野 一志

篠原 永光

岸上 孝司

辻 孝

井村 行宏

山金 直樹

鈴木 啓三

小 路 哲生

菱田 篤篤

古山 有義

住友 久夫

米山 藤男

森本 武夫

松浦 武信

三月 弘子

岩朝 洋平

川人 隆広

五月十八日

遠藤 雅之

抽友 敏明

小原 政実

川人 政利

岡 一 心

六月二十二日

海部 あゆみ

九月二十一日

豊永 剛

小 笹 陸

鈴江 周夫

橋本 陽太

西木 容平

郡 陽 介

株 田 豊

森本 春輝

藤本 常己

畑山 尋美

妹尾 さなえ

井若 絵美

藤澤 朋子

名 蔵 輝実

加集 美由岐

十一月三十日

木村 佳史

馬淵 雅大

日和 田 崇

松村 芳紀

矢野 淳也

森本 年彦

月岡 陽市

岡田 陽彦

西岡 隆英

渥美 隆彩

和田 法子

二月十五日

仁木 祐昭

中野 俊樹

樫本 一成

岡田洋典
福永康浩
寺西裕稔
笠井利求二
堀川修
東條茜
位田夏子

【二段】

五月十八日

大久保竜一
米山貴文
石田明宏
西村亮彰
近藤彰
木原一樹
大西健太
桑村育男
大道史郎
齐藤慎吾
里東俊伸
ジェームス・ホードレイ
射場美恵
川添綾子

小林かおり
天羽けい子
馬原甲
六月二十二日

九月二十一日

佐竹孝文
多川大智
原遼介
東輝記
瀬口智
奥田隆陽
吉岡大介
梅山浩史
坂東和成
田村修平
富森義治
藤本智輝
尾華敬誠
山ノ井敬仁
竹内佑司
久川誠弘

大西聖造
西木将記
喜多卓也
藤川卓仁
大前智仁
森本敦雄
本見克祉
角元和仁
平田守仁
小川智滋
小川美香
栗本和香
藤本智恵
菅野智恵
尾崎志穂
阿部純子
伊藤奈津子
近藤多恵
岡部有紀子
森崎知子
沖津佐智恵
星野佳世
多田真梨
山下横景
山ノ井景子

十一月三十日

仁木進介
森上昌紀
森充正
大尾崇司
松岡尚
小柏祐三
竜田庸平
倉橋孝輔
原田靖宏
中井敏裕
近清素也
根来健二
池添賢次
西岡健次
山崎惠理子
橋本惠子
寺西眞理子
西條沙織
喜田有紀
佐藤綾
米田陽子
庄野早苗
井出賀奈子
志内理恵

二月十五日

【初段】

四月二十九日

藤澤伊佐子
近藤仁美
大西雅照
吉田人輔
矢部宣博
久米隆宏
森下泰治
西原勝志
河野祐美子
竹澤郁美
水澤玲子
谷口順子
梯口周

山ノ井眞吾
竹亭賢一
平野学
田中智也
佐藤英夫
宇都宮隆志
住友直哉
篠原春樹
横手裕一
湊佳郎
中西啓
日下大輔
矢野真一
児島有佑
中川康紀
谷川聡
大岩達矢
畑山秀明
秦野充普
山本伸一
田中翔
谷口直弘
高木直誠
坂本昌幸
佐藤将司

山ノ井徹
竹亭賢一
平野学
田中智也
佐藤英夫
宇都宮隆志
住友直哉
篠原春樹
横手裕一
湊佳郎
中西啓
日下大輔
矢野真一
児島有佑
中川康紀
谷川聡
大岩達矢
畑山秀明
秦野充普
山本伸一
田中翔
谷口直弘
高木直誠
坂本昌幸
佐藤将司
石川貴純
森本岳志
小谷岳央
福井美也
徳井美晃
岡田裕己
湯浅英史
湯浅大吾
鎌矢佳宏
住友喬祐
森本浩二
高谷勝普
久米川智昭
吉岡歩勇
藤川温
小笠原温
寶井義之
篠原春樹
住友直哉
宇都宮隆志
佐藤英夫
田中智也
平野学
竹亭賢一

東雲久美子	田村未嘉	浜口美嘉	拙友由佳	青木真弓	川原ゆかり	藤井恵深子	中川裕美	三好亜由美	亀島美香	村田美香	森岡小百合	西本麻生	紅露瑛子	山崎留美子	藤川裕季子	宮崎加奈子	島田佳織	江富澄	京小瑛里子	三好やよい	美馬裕徳	鶴羽勇貴	三好浩一	坂東大樹	大西康方
板東宏晃	六條勝仁	橋本昌諭	木村昌弘	佐藤慎太郎	平田慎太郎	六月二十二日	武田恵美子	大谷由佳	紅露由佳	森下美有紀	近藤奈緒美	南恭平	藤本麻山	三木直美	一鷹希	北内果奈	重松裕里	清野則子	小野歩花	義本千尋	広原史兼	矢田真奈美	正木真歩	松下優子	
大宗和法	本田啓樹	片山貴資	松島大剛	大谷篤史	大城健志	福家秀和	村上大介	高志正	永田基恭	前橋一篤	竹内高志	藤本浩一	藏本尚文	小倉福生	佐久間大策	佐久間健太	丸岡万高	中内万登	四宮崇作	藤井昌樹	細川泰行	佐藤彰勇	福本泰志	梅田直樹	
小倉紗智	平岡紀子	長尾未来	佐野裕子	富田美加	賀川敬子	高麗あや	仁木典子	山内みゆき	井内ひろみ	吉岡七重	長田亜希美	美馬真奈美	慎野結	崎川加菜	武市英里	堀川陽子	多村和久	辻本良司	柳本浩朗	濱田弘和	大平真和	澤田昌弥	藤本直希	矢野和弘	
川原慎也	竹内義人	坂東大輔	岩見親佑	竹内健二	平岡洋一	吉岡隆二	本見恵太	星野宜哉	中田博之	原田大	長地久有	湊晋史	喜多智久	久津和智裕	喜多義典	上田陽太郎	佐川了祐	板東健二	九月七日	高原明美	秋月三智子	長浜亜矢子	小出理恵	木村久美子	
昇省吾	樫本圭介	十月二十六日	長村聡子	白井知加	松田梢	渡川陽子	鎌田絵菜	大平麻衣	和田文恵	秋田ひろみ	芝野真由	八木聡美	里富友恵	竹内亜紀	仁木由香理	前坂春奈	藤本恵実子	中山真希	濱田千秋	清水由紀	河田美紗	高木麻未	竹治宏奈	市橋秀幸	
長谷川陽介	平尾昂	平尾慧	山上弘純	梶原充規	近藤真一郎	西丸伸治	河井一甫	佐中桂彦	桑内政彦	北野真也	井本輝航	堀尾道大	市谷寿剛	前川和久	元木和哉	藤川力則	木下聡彦	藤井和彦	下久保	堀佐拓郎	岩佐健太	堀口勇介	西江淳一		

葛野正也 日下達也 若林隼司 今泉和之 潮陽二朗 榎本英哲 大場祥一郎 山口隆 森智哉 佐藤正望 桶川義将 矢田治 松本理生 十一月三十日 池添美智代 吉岡優美 粟飯原文恵 竹岡祥代 東根ゆかり 賀川康世 檉本亜矢子 中原徳子 松田正稔 近久寛 岩尾将彦

野々宮康太 大西啓介 佐藤通彦 中尾大孝 株田大樹 藤本広之 齐藤晴亮 谷内和輝 西原弘樹 河原弘樹 黒川修次 松本栄一郎 佐光俊介 伊賀上雅士 板東充洋 中岡昌三 八木晋作 清家義弘 小野秀平 吉田利之 村上利之 二月一日 橋本敏紹 竹崎邦俊 古海圭二

折坂祐一 石山紘平 石本裕善 松本満希子 矢部奈美 石川葉子 矢野あゆみ 寺井春香 西崎幸恵 藤江幸恵 山下久美子 北川希依 山畑麻由美 富永山香理 池添葉月 藤田早苗 田中佳代子

― 居合道 ―

【範士】

五月四日

平尾勝美

【教士】

十一月二十七日

吉岡修一

【錬士】

五月四日

齋藤吉明

十一月二十七日
鈴江正雄

【七段】

七月十四日

吉岡修一

【六段】

七月十四日

鈴江正雄

【四段】

十一月二日

新見和彦 四宮博

【三段】

五月十八日

仲田節稔 吉田愛奈 桑原雄

十一月二日

西原仁 桑原瑞枝

【二段】

五月十八日

米田利彦

【初段】

五月十八日

沼田篤郎 乾貴洋 河野祐美子

十一月二日

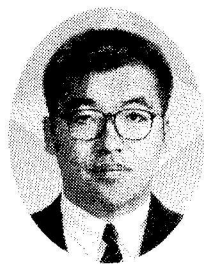
大村猛夫 北川希依 中川典子 清水千裕

がんばろう徳島

今、思うこと

中体連・北島中学校教諭

本村賢二



教職に就いて二年間、私は多くの先生方・保護者の方々にご指導を頂きながら、中体

連の一員として、また社会人として剣道と向き合ってきました。中体連の一員として特に思い出深いことは、平成五年十月の第四十八回東四国国体に向けての中学生の強化です。当時の専門部長の石井博先生を中心に、中学校教員で分担し、主として国体時に少年の部の主力となる学年を対象に強化合宿・遠征を重ねました。当時の中体連の考え方は、国体強化の機会

を少数の限られた候補選手の強化にとどまるのではなく、可能な限りより多くの中学生の向上の機会としてとらえていたと思います。今、当時の中学生が大学生や社会人として元気にがんばっている姿を見聞すると、なつかしくもあり、また大変うれしくもあります。

さて、剣道に関わっている者として最近私自身が強く思うことは、他の運動文化やスポーツにはない剣道特有のすばらしさを少しでも理解し、それを生徒や仲間と共有したいということです。剣道の理念は、「剣の理法の修練による人間形成の道である」とあります。剣道をどのように考え、どのように取り組むことが、人間形成にどう貢献できるのか、時に考え込んでしまします。現実には、各中学校の剣道部は、年間を通して県下各地で開催される各種大会に参加しており、日々行われている練習もおそらくそれに向けての準備を中心とした内容と方法であると推察します。この状況の中で先ほどの「人間形成」の問題や、剣道本来のもつすばらしさをどうとらえ、どう

実践していくかは重要な問題だと考えます。この課題に対しての解答を求める一過程として、最近中体連で新しく取り組んでいることを紹介します。

その一つとして、二年ほど前から、一年に一回地区ごとでの部活動の指導者対象の講習会をもつことにしています。過去の私の勤務校の所属する地区の講習会では、初心者に対しての指導方法、生徒の技能レベル（高度・中程度・初心者）別の練習方法について取り組みました。これらの講習は、実際に生徒達が練習をしながら進められるので、指導者だけでなく、生徒自身も練習方法が理解できたものと思います。つぎに、他校との合同練習会のあり方です。以前は試合練習一辺倒だったのですが、「短時間でもいいから基本練習をやろう」と指導者間で申し合わせ、試合練習の前にその時間を設けるようにしています。私は基本練習において、試合での結果を追うあまり、自分本位の一方的な基本練習になるのではなく、相手との関係を大切にしながら自分の攻めや間合いを考え、相手の攻めに対して

を衷心よりお願い申し上げます。

自分の攻めをどう考え、どう技につなげていくのか、少しでも考えていけたらと思っています。今後もこのような考え方に近づいていけるような基本練習を大切にしていきたいと思っています。また、練習会の機会に、短時間ではあるものの指導者同士で稽古をするようにしています。私自身、自分の稽古を怠け、生徒のつまずきや悩みを共感しようとせず、自分の過去の経験や予測だけで判断し、指導しがちです。私自身のこのような傾向に対し、最近ある先生から「汗を流さざる者、道を語るなかれ」との言葉を頂きました。この言葉を念頭に置き、常に自分の稽古を実践できるようにしたいと思います。

なお、ここに挙げた中体連の取り組みも、始まったばかりのことで、今後より多くの方々の参加を得る中で、ご批判・ご助言を頂くことが何よりも有り難いことと考えています。

最後になりましたが、誌上をお借りし、中体連に対する関係各位のご厚情に感謝すると共に、今後のより一層のご指導ご鞭撻



徳島県下稽古場所・時間帯一覧(その1)

〔一般社会人の方が稽古できる場所と時間帯一覧を作成してみました。未掲載の道場等につきましては次号に掲載予定しております。編集委員 白木 崇〕

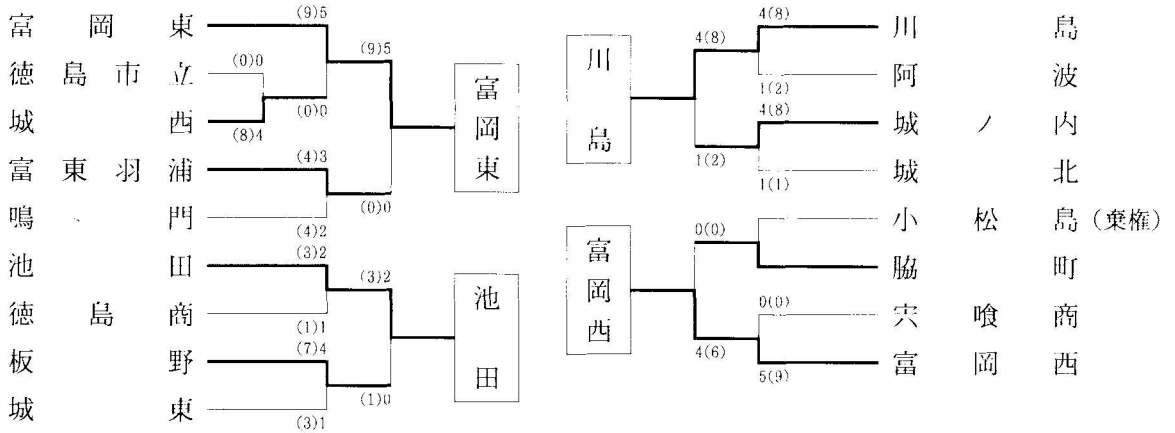
主催	場所	住所	日時	利用料	駐車場	常時参加人数	代表者	メッセージ
徳島支部	県立武道館	徳島町城の内六番地	水 土 19:00~20:00	土曜の み 270円	無	15名	馬場 力 ☎087-61-0335	剣道をやりたい人であれば、どなたでもおいでください。
	東内道場	北矢三町四丁目県営住宅前	水 土 19:00~20:00		5台	5名	東内 勉 ☎087-61-0338	老若男女年齢問わず。
	上八方小学校 体育館	上八方町樋口一	水 19:00~21:30		10台	30名	河野 通宣 ☎087-61-0206	小学生の練習は、 水曜18:00~・土曜17:00~です。
	加茂名中学校 体育館	庄町・丁目	水 20:00~21:30		有	10名	橋本 武 ☎087-61-0337	初心者も歓迎 基本中心
	加茂名小学校 体育館	庄町五丁目	木 18:00~19:30		有	15名	橋本 武 ☎087-61-0337	少年中心の錬成
	加茂名南小学校 体育館	鮎喰町二丁目	日 17:30~19:30		有	8名	藤本 俊夫 ☎087-61-0337	19:00より一般の稽古
	県立武道館	徳島町城の内六番地	毎月・回土曜日 10:00~12:00		有	15名	植田 一夫 ☎087-61-0336	平成九年に発足しました。細く長く続けるため、 月一回どなたでも気軽に参加して下さい。
	光武館	撫養町大桑島	金 19:00~21:00		30台	8名	寺西 慶裕 ☎087-61-0335	どなたでも歓迎
	県立鳴門武道館	撫養町立岩	水 土 19:00~21:00		100台	10名	佐藤 勇 ☎087-61-0332	
	松茂町総合 体育館	松茂町中喜来字群恵 二二五・二二	金 18:00~20:30		300台	8名	米田 利彦 ☎087-61-0334	いつでも自由に参加して下さい。
	北島北小学校 体育館	北島町北村字町四友地 一月二十日	月 木 19:00~20:30		50台	7名	伊賀 雅人 ☎087-61-0336	いつでも自由に参加して下さい。
	北島町立武道館	北島町江尻柳池四一	土 18:30~20:30		20台	3名	大野 義則 ☎087-61-0336	いつでも歓迎。
板野西支部	藍住町武道館	藍住町矢上前二二一	火 木 土 20:00~21:30		50台	15名	高田 亮 ☎087-61-0335	初心者・再開する人・剣道好きな人大大歓迎です。町外の参加者もOKです。

主催	場所	住所	日時	利用料	駐車場	代表者	メッセージ
板野西支部	上板中学校 体育館	上板町神宅西金屋四〇	火 木 上 6:30~7:40		15台	坂東伸光	早朝稽古ですが誰でも歓迎します。
	上成町農業者 トレーニングセンター	上成町十成字漆畑	水 金 19:30~21:00		20台	岡田京子	少年教室を主として、一般を兼ねています。
阿波支部	阿波中学校 武道館	阿波町字東原二二〇	水 20:00~21:00		20台	中尾 誠	初心者不可、ほか誰でも歓迎。
	市場町立武道館	市場町興崎字北分	月 20:00~21:00		30台	河野耀雄	初心者不可、ほか誰でも歓迎。
美馬東支部	脇町小学校 体育館	脇町猪尻字西久保七八	火 金 19:00~21:00		30台	細川欣典	いつでも歓迎。
	穴吹小学校 体育館	穴吹町穴吹字井口三三	月 木 19:00~21:00		30台	大石雅生	いつでも歓迎。
美馬西支部	重清東小学校 体育館	美馬町大泉一一五	水 上 18:00~20:00		8台	香西虎夫	こども・一般・初心者からでも歓迎します。
勝浦支部	勝浦町体育館	勝浦町三溪字古川	水 上 19:00~21:00		100台	立岩勝巴	皆様のご指導をお願いいたします。
小松島支部	直心館道場	田野町明石南一九七一	月 金 19:30~21:00		10台	松田敏弘	己に勝つ。
	鷺敷海洋 センター体育館	鷺敷町百合	月 水 金 19:00~21:00 21:00~22:00	一時間 100円	100台	井村雅人	他町村の方も: 楽しく剣道をやりましょう。
丹生谷支部	木頭錬心館 一般居合道	木頭村出原	火 金 20:00~		無	松本英雄	
	日野谷小学校 体育館	相生町大久保字中西 二八一	月 木 19:30~		無	原田 勝	
	延野小学校 体育館	相生町延野字上子原三二	木 20:00~21:00		無	西浦 新	元々剣道の盛んなところ。昔取った杵柄とやら で子供の少剣入門と共に復活する人が多い。
			火 木 土 21:00~22:00		30台	橋本 幸	指導者が共に切磋琢磨している。剣道教室出身 者が、今は指導者として頑張っている。

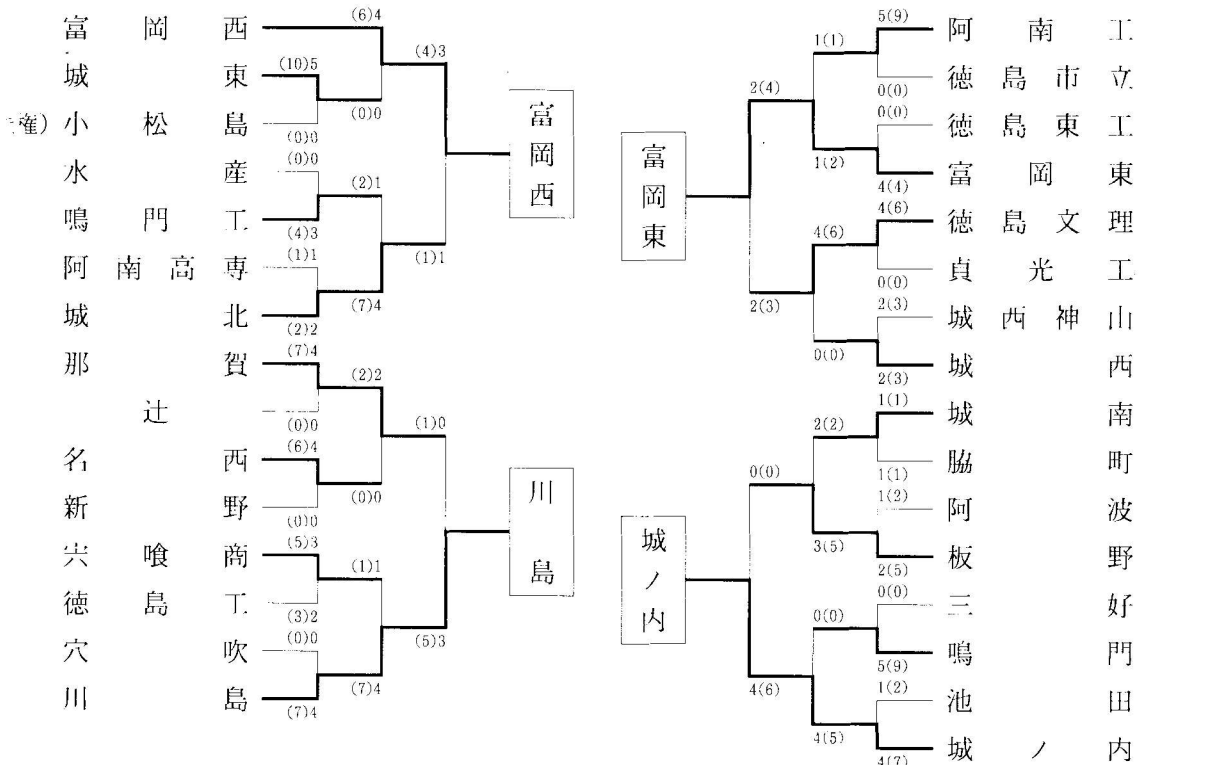
第 37 回 徳島県高等学校総合体育大会

平成 9 年 5 月 31 日 ~ 6 月 2 日
徳島県立城西高等学校体育館

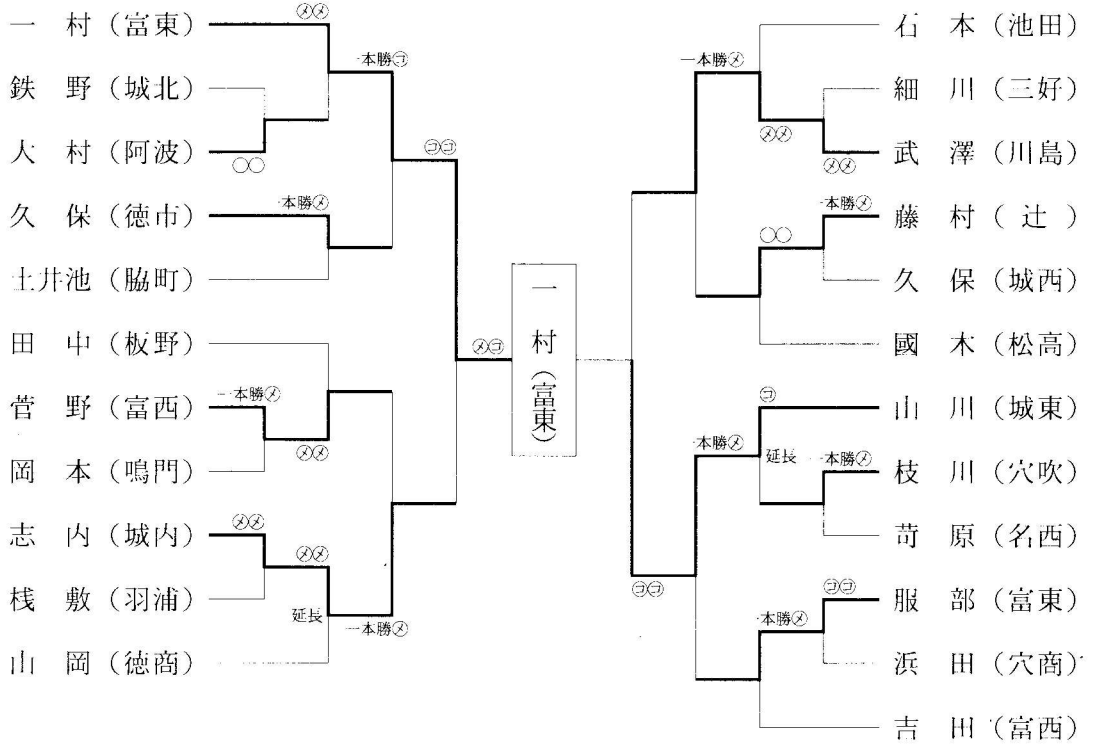
〈女子団体予選〉



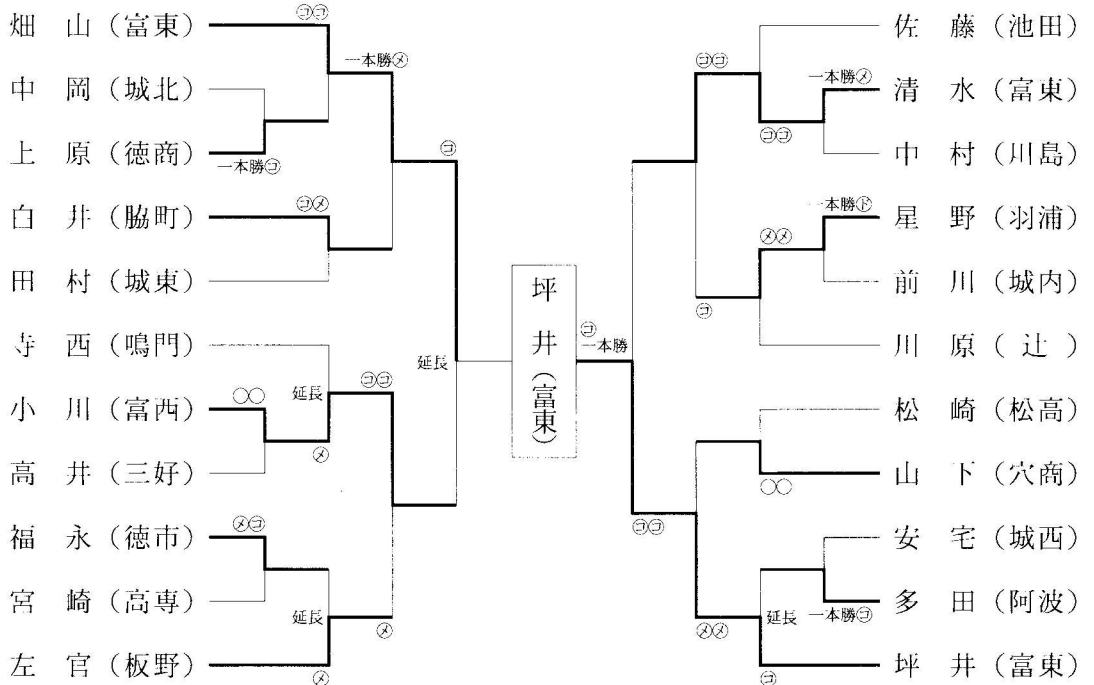
〈男子団体予選〉



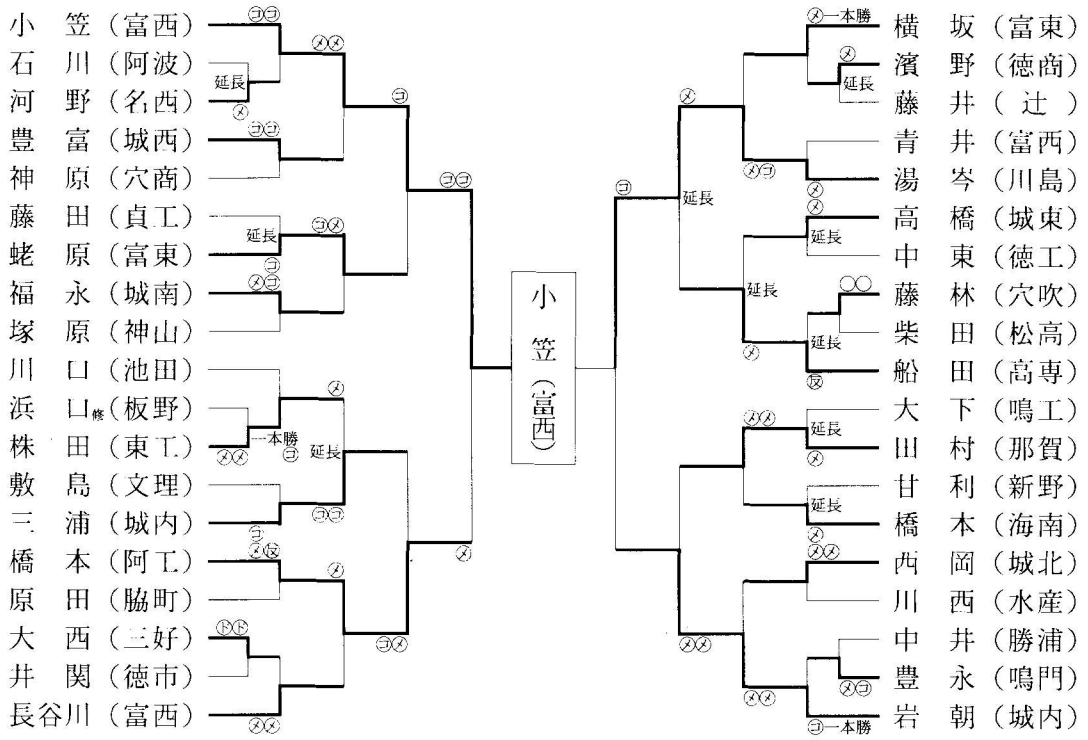
〈女子個人1組〉



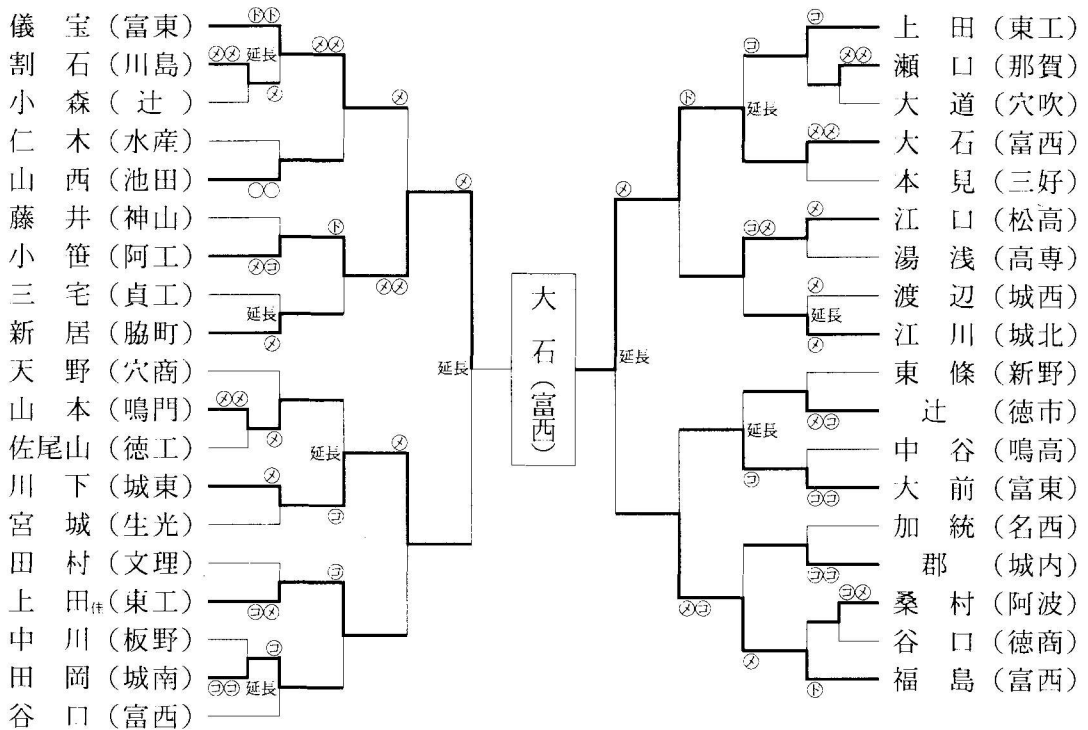
〈女子個人2組〉



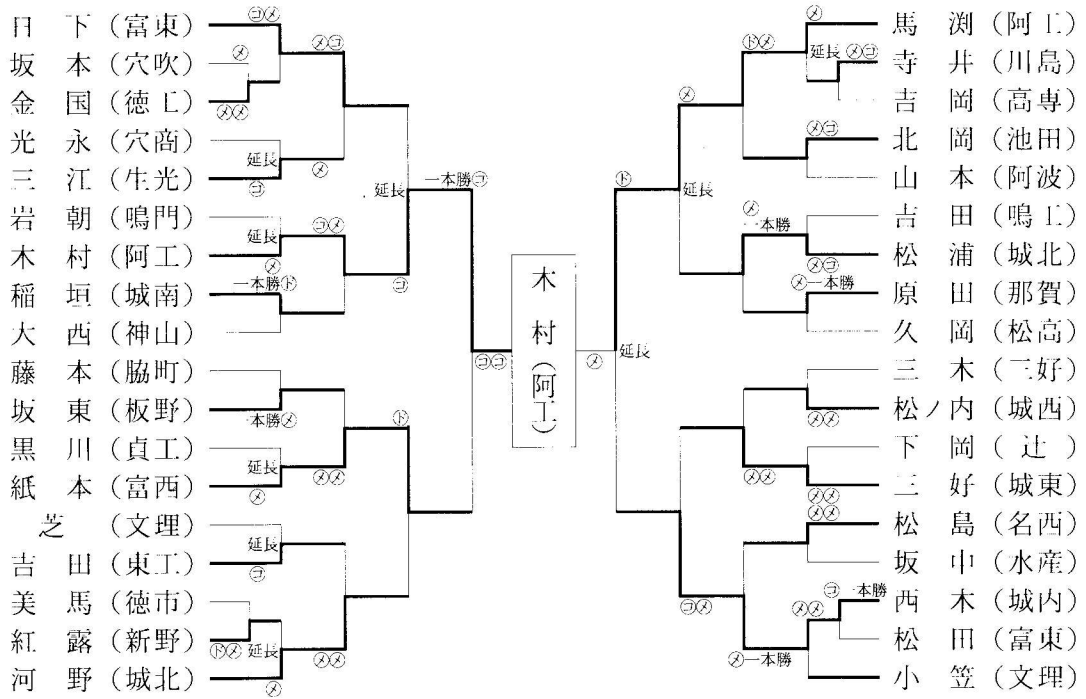
〈男子個人1組〉



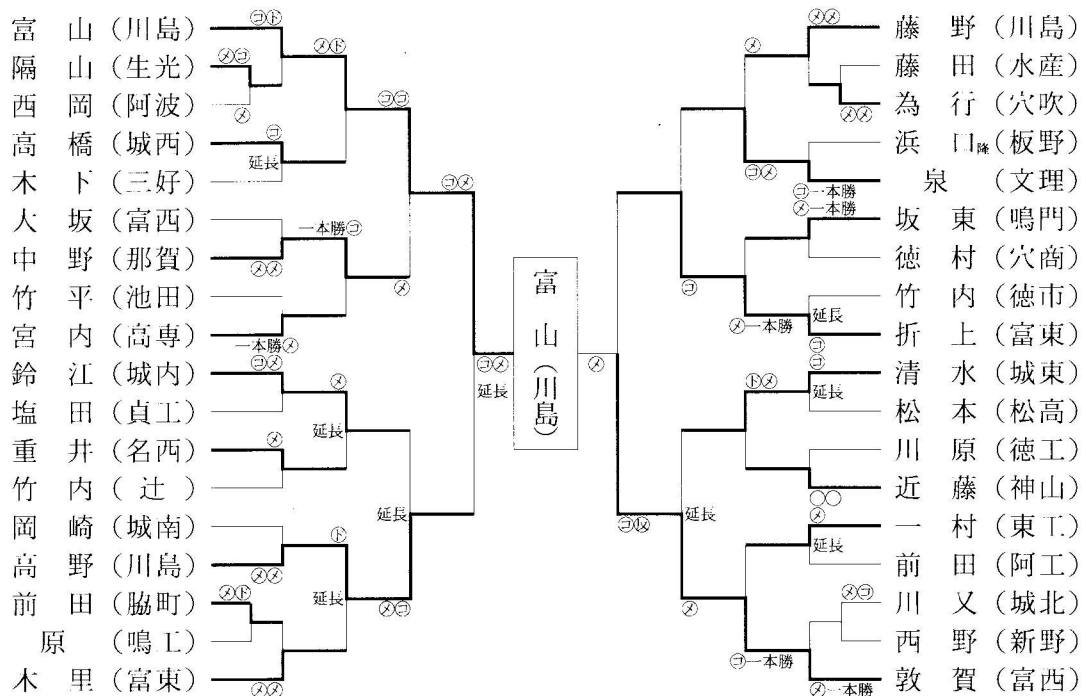
〈男子個人2組〉



〈男子個人3組〉



〈男子個人4組〉



〈決勝リーグ〉

〈男子団体〉

	富西	川島	富東	城ノ内	勝数	勝者数	勝本数	順位
富西		④ ③	⑦ ④	③ ②	2.5	9	14	1
川島	① ①		④ ①	③ ②	0	3	7	4
富東	① ①	⑥ ③		① ①	1	4	7	3
城ノ内	③ ②	⑤ ③	④ ③		2.5	8	12	2

〈男子個人〉

	小笠	大石	木村	富山	勝数	勝本数	得失差	順位
小笠		② ②	△	② 一本勝	2	3	+2	1
大石	△		△	② ②	1	2	-3	4
木村	② 一本勝	② ②		△	2	3	+1	2
富山	△	② ①	② ②		1	3	±0	3

〈女子団体〉

	富東	池田	川島	富西	勝数	勝者数	勝本数	順位
富東		⑦ ④	⑤ ④	④ ③	3	11	16	1
池田	① ①		① ①	① ①	0	0	1	4
川島	① ①	③ ②		① ①	1	3	4	3
富西	① ①	⑧ ④	③ ②		2	6	12	2

〈女子個人〉

	一村	坪井	福永	森	勝数	勝本数	得失差	順位
一村		② 一本勝	② 延長	② ②	3	4		1
坪井	△		② ②	② ②	2	4		2
福永	△	△		② ②	1	2		3
森	△	△	△		0	0		4

《インターハイ出場校・個人戦出場者》

〈男子団体〉

富岡西高等学校

〈女子団体〉

富岡東高等学校

〈男子個人〉

小笠 健二 (富岡西高)

木村 佳史 (阿南工業)

〈女子個人〉

一村 美穂子 (富岡東高)

坪井 あき (富岡東高)

第9回 徳島県剣道選手権大会兼全日本剣道選手権大会予選会

平成9年6月29日
中央武道館

優勝 福多 多野 雅 英
準優勝 平野 野 誠 司
第3位 白山 木 洋 一

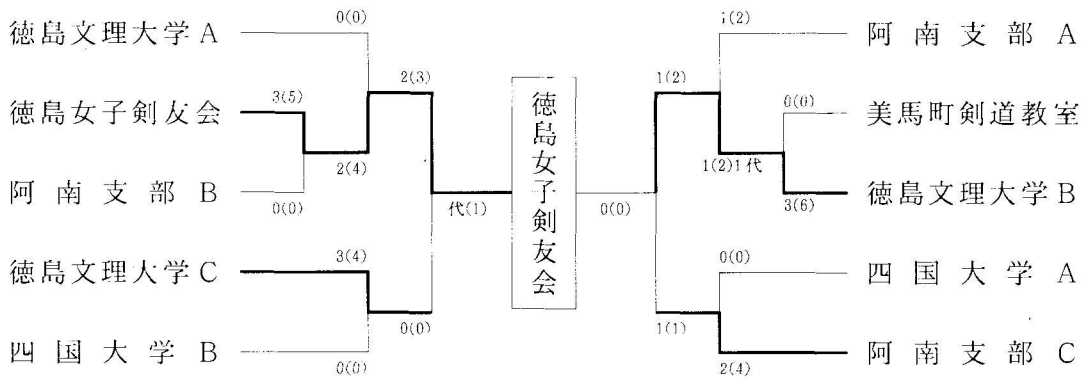


第 18 回 徳島県女子剣道大会

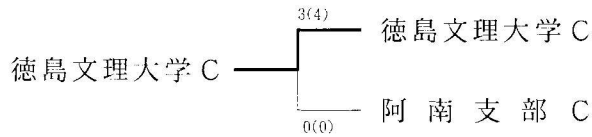
平成 9 年 7 月 13 日
徳島県立中央武道館

〈一般団体戦〉

優勝 徳島女子剣友会
準優勝 徳島文理大学 B
第 3 位 徳島文理大学 C

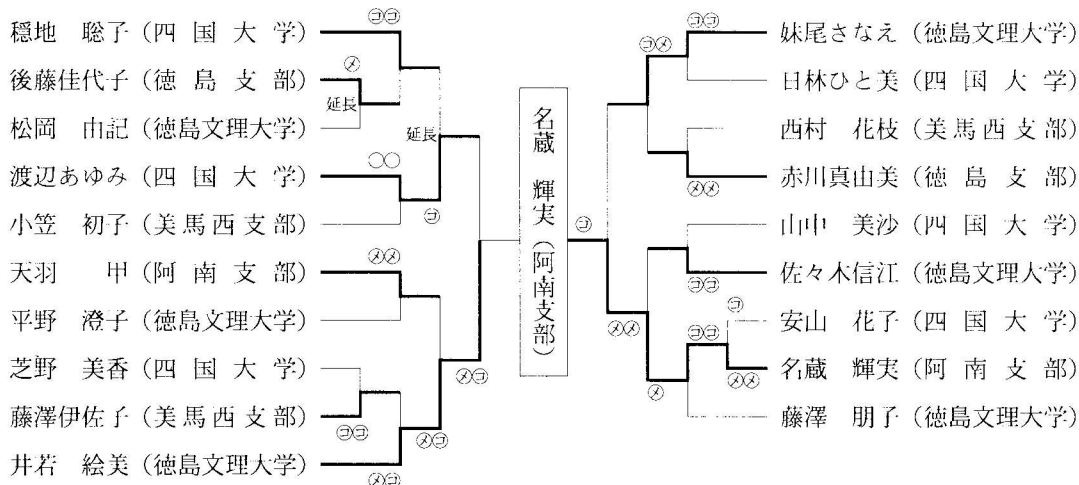


〈3位決定戦〉

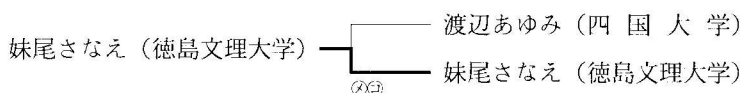


〈二段以下の部〉

優勝 名蔵 輝実 (阿南支部)
 準優勝 井若 絵美 (徳島文理大学)
 第3位 妹尾さなえ (徳島文理大学)

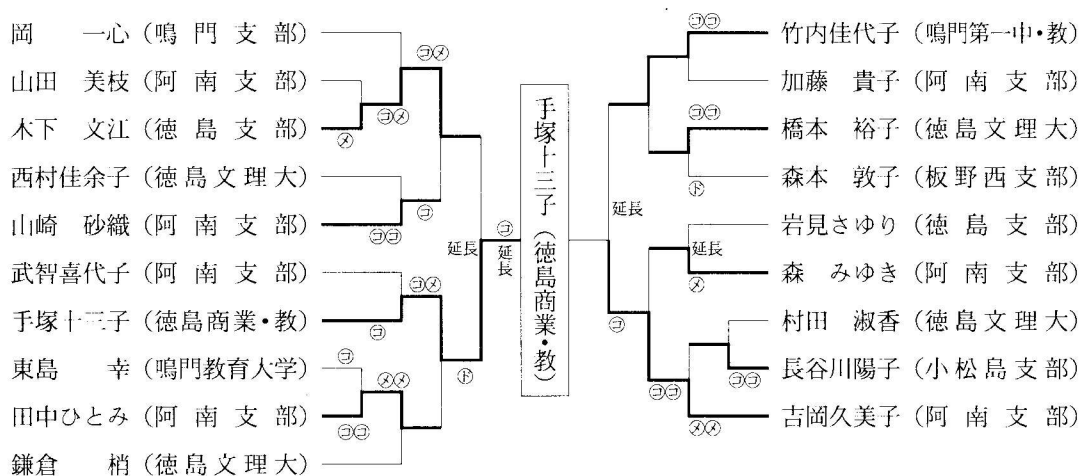


〈3位決定戦〉

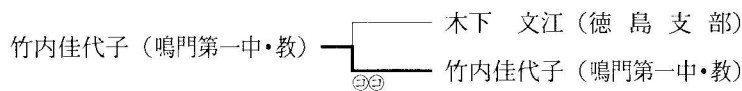


〈三段以上の部〉

優勝 手塚十三子 (徳島商業・教)
 準優勝 吉岡久美子 (阿南支部)
 第3位 竹内佳代子 (鳴門第一中・教)



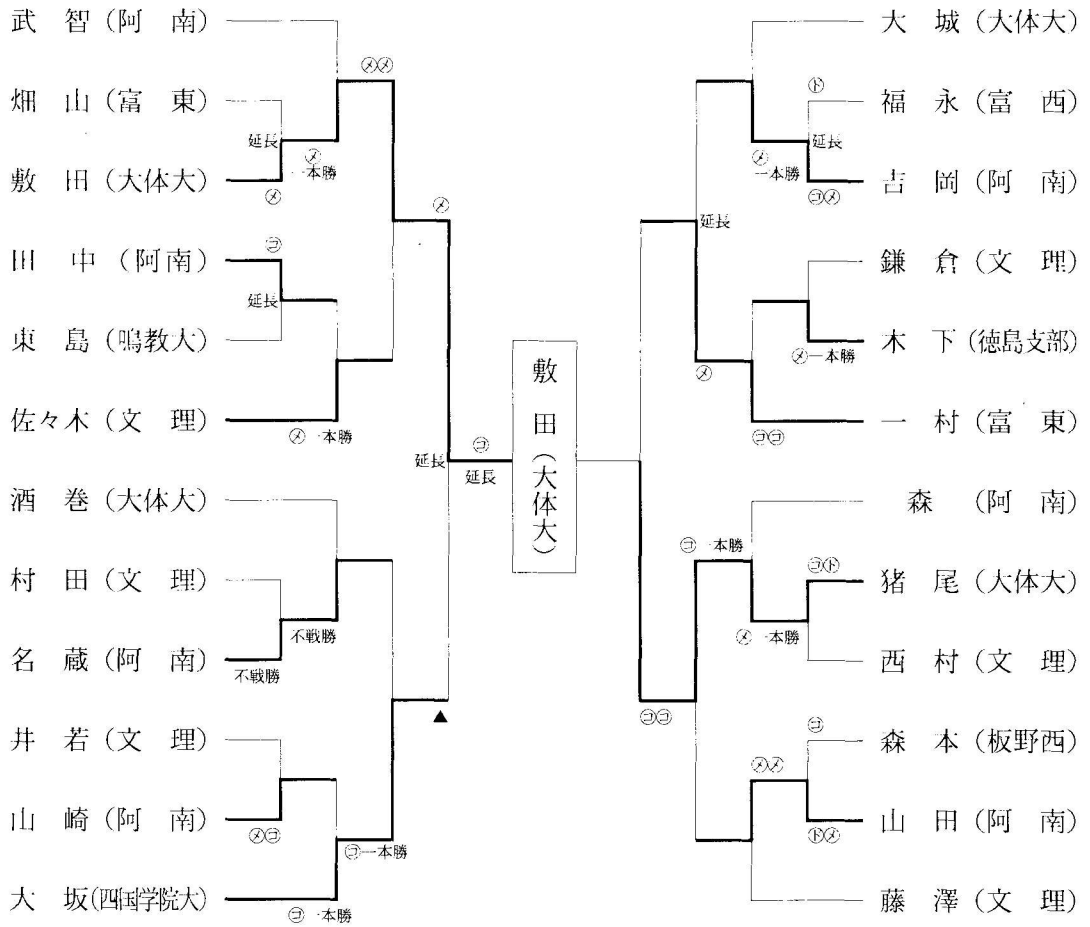
〈3位決定戦〉



第 36 回 全日本女子剣道選手権大会予選会

平成 9 年 6 月 29 日
中央 武 道 館

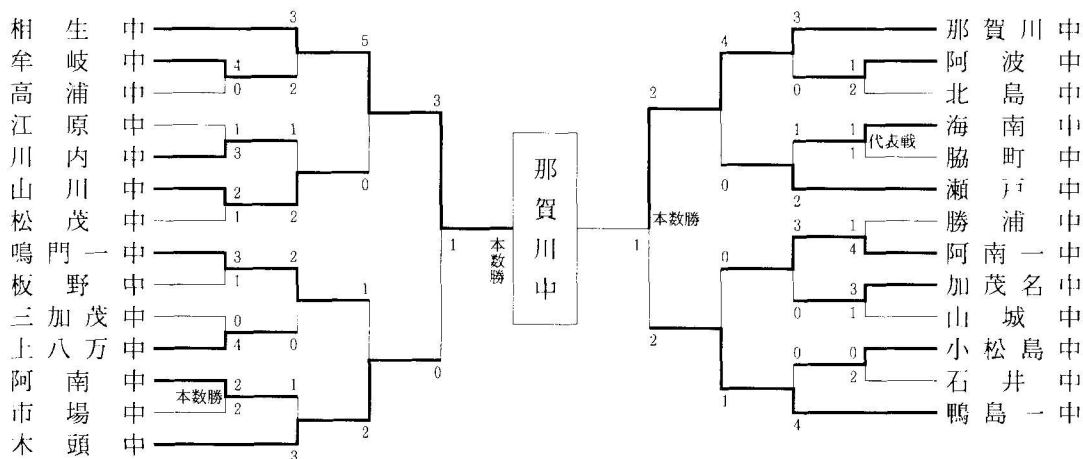
優 勝 敷田 美紀 (大体大)
準優勝 猪尾 満紀 (大体大)



第 51 回 徳島県中学校夏季総合体育大会

平成 9 年 7 月 21 日
鳴門武道館

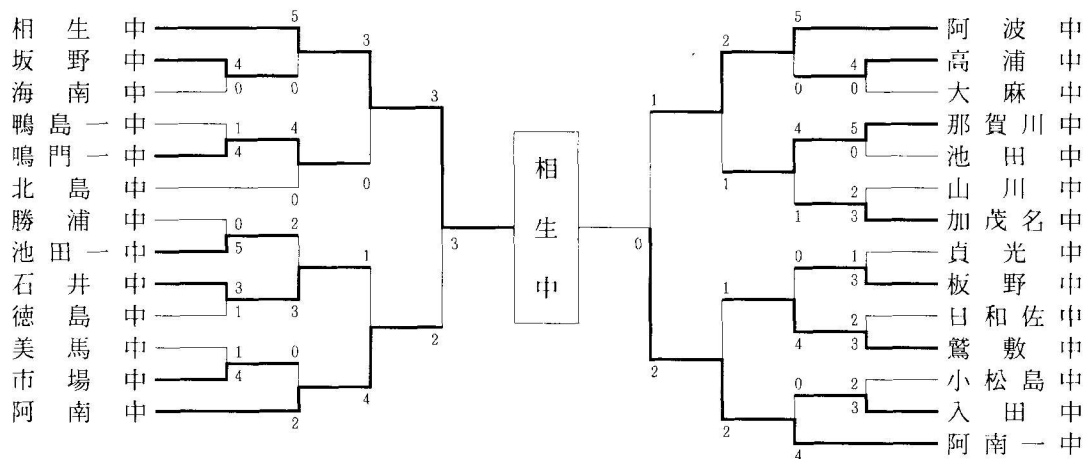
〈女子団体戦〉



〈決勝戦〉

学校名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	勝数
相生中	東根	元浦 _下	元浦 _さ	樫本 _重	樫本 _美	1 (1)
	延長 引き分	⊗	延長 ⊕	延長 引き分	延長 引き分	
那賀川中	中山 _希	河田	工藤 _理	佐藤	中山 _貴	1 (2)
	延長 引き分	⊗	延長 ⊕	延長 引き分	延長 引き分	

〈男子団体戦〉

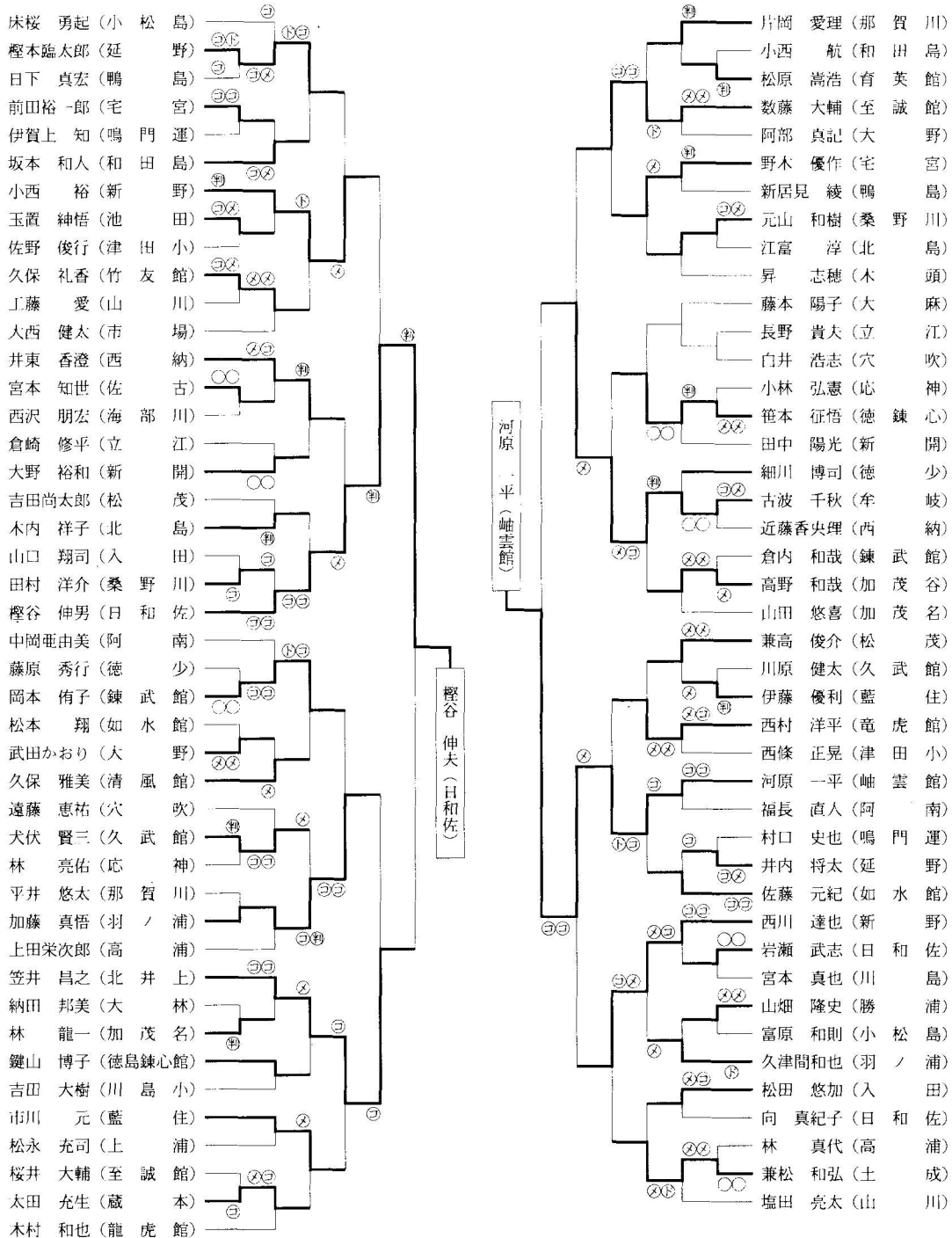


〈決勝戦〉

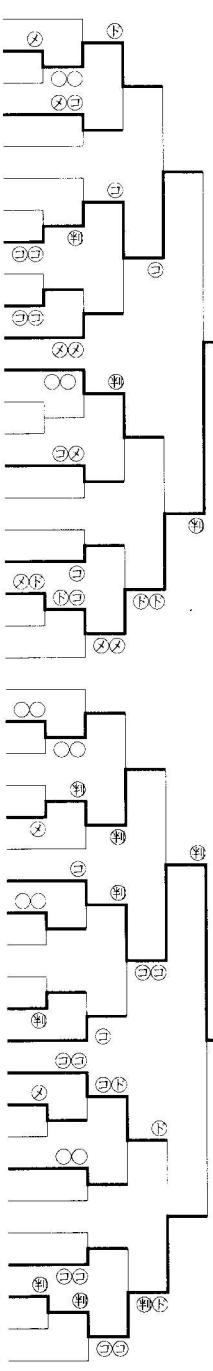
学校名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	勝数
相生中	元木	山本	森	瀬ノ上	藤崎	3 (3)
	延長 引き分	⊕ 一本勝	延長 引き分	⊗ 一本勝	⊕ 一本勝	
阿南第一中	住友	山ノ井	大西	坂本	仁木	0 (0)
	延長 引き分	⊗	延長 引き分	⊗	⊗	

〈個人戦〉

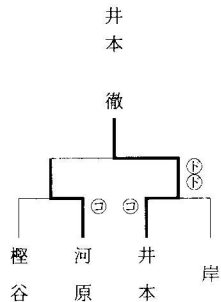
優勝 徹(延野)
 準優勝 井河 原一平(岫雲館)
 第三位 榎谷 伸男(日和佐)
 岸 正 樹(延野)



岡田 有加(上 浦)
 紅露 明澄(桑 野川)
 丸山 拓郎(山 川)
 大西 喜雄(大 野)
 田中 舞(羽 浦)
 工藤 教生(育 英館)
 浜口 広夢(北 島)
 仁井田 健司(竜 虎館)
 前田 章(穴 吹)
 木田 智也(岫 雲館)
 佐藤 美帆(応 神)
 森 友和(牟 岐)
 松田 麻美(松 茂)
 佐藤 宏亮(鳴 門運)
 遠藤 和貴(徳 鍊心)
 滝花 直行(勝 浦)
 金山 真士(和 田島)
 西岡 俊治(鴨 島)
 岩原 大和(至 誠館)
 掛田 智也(川 島)
 西口 誠(日 和佐)
 平岡由紀子(小 松島)
 泰地 俊公(阿 南)
 矢野 準也(立 江)
 吉野 大輔(西 納)
 松本 栄二(加 茂名)
 原田 慎土(高 浦野)
 井本 徹(延 野館)
 島 幹彦(如 水館)
 美馬 国人(佐 古)
 江口 千晶(藍 住野)
 吉田雄一郎(新 野武)
 立岩 春樹(鍊 武館)
 富士本学希(久 武館)
 千頭 瞳美(土 成)
 豊田 修三(北 井上)
 細井 良彦(宅 宮)
 後藤 遥奈(木 頭)
 賀川 素貴(加 茂谷)
 福永 晃久(竜 虎館)
 中島 悠紀(新 開)
 森 匡史(入 田)
 富川 翔伍(津 田小)



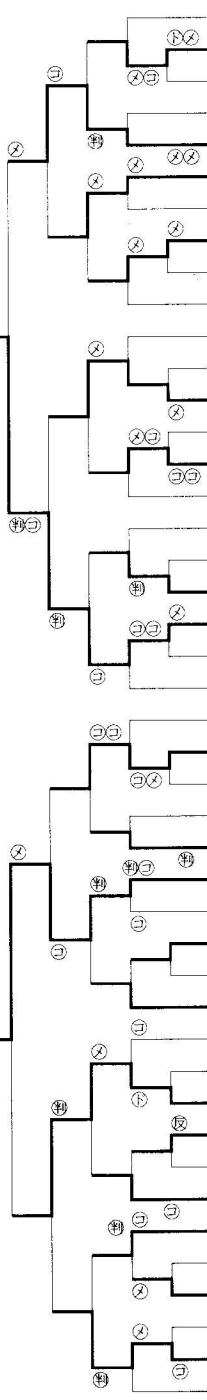
〈個人準決勝・決勝〉



岸 正樹(延野)

井本 徹(延野)

平馬 克也(日 和佐)
 舟岡 咲野(宅 宮)
 田中 直也(高 浦)
 橋本 康孝(佐 古)
 井上 雄介(北 島)
 三好 啓介(藍 住)
 宮武 大輔(加 茂名)
 麻植太 一朗(鴨 島)
 高田 祐始(津 田小)
 美馬 弘治(北 井上)
 大西 隆文(上 浦)
 榎本 倫子(延 野野)
 竹部 靖弘(新 野川)
 柴田 賢亮(山 田吹)
 清水 裕太(穴 納古)
 森本 貴代(西 松島)
 井上 真希(至 誠館)
 杉本 将伍(久 武館)
 石井 寛幸(阿 鍊心)
 村井 千裕(徳 野野)
 前橋 繁(新 水館)
 須藤 由衣(如 浦)
 秋月 健太(鴨 島)
 磯田 沙希(新 野野)
 福島 祐 祐(羽 浦)
 武田しずか(新 野野)
 日下 智博(入 田)
 岸 正樹(延 野野)
 坂東 真伍(至 誠館)
 住友 環(木 頭)
 上野 香(宅 宮)
 増田 雄太(岫 雲館)
 高島 翼(北 島)
 木田 好美(大 野野)
 清野 知史(穴 吹)
 中山 麻衣(勝 浦)
 木並 康之(藍 住)
 市原 裕之(竜 虎館)
 辻本 武司(加 茂名)
 松本 良太(如 水館)
 喜多 真也(小 松島)
 中西 祥子(津 田小)
 清水 明博(北 井上)
 岩野 修治(北 井上)

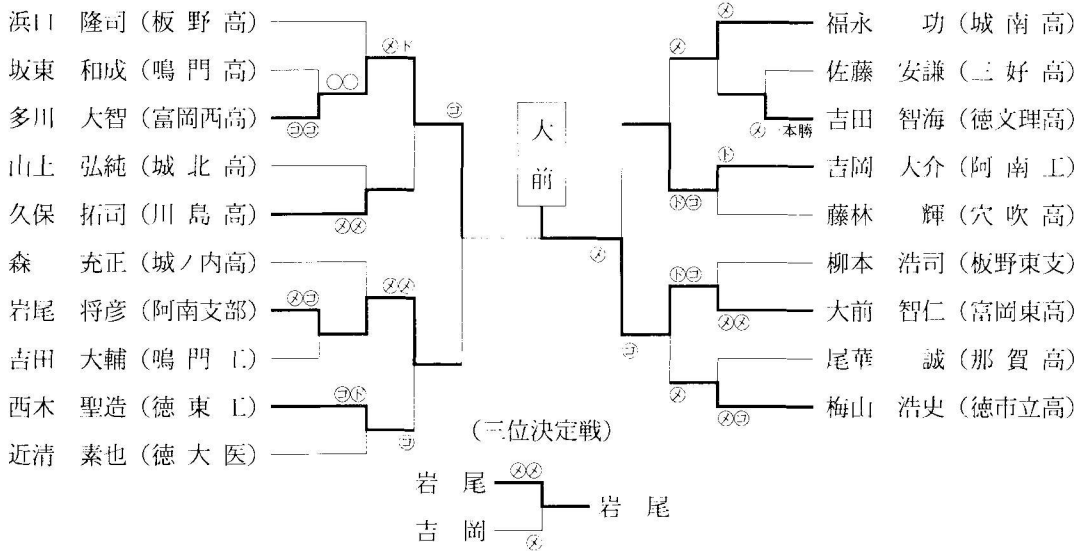


第 21 回 徳島県剣道段別選手権大会

平成 9 年 8 月 31 日
鳴門 武道 館

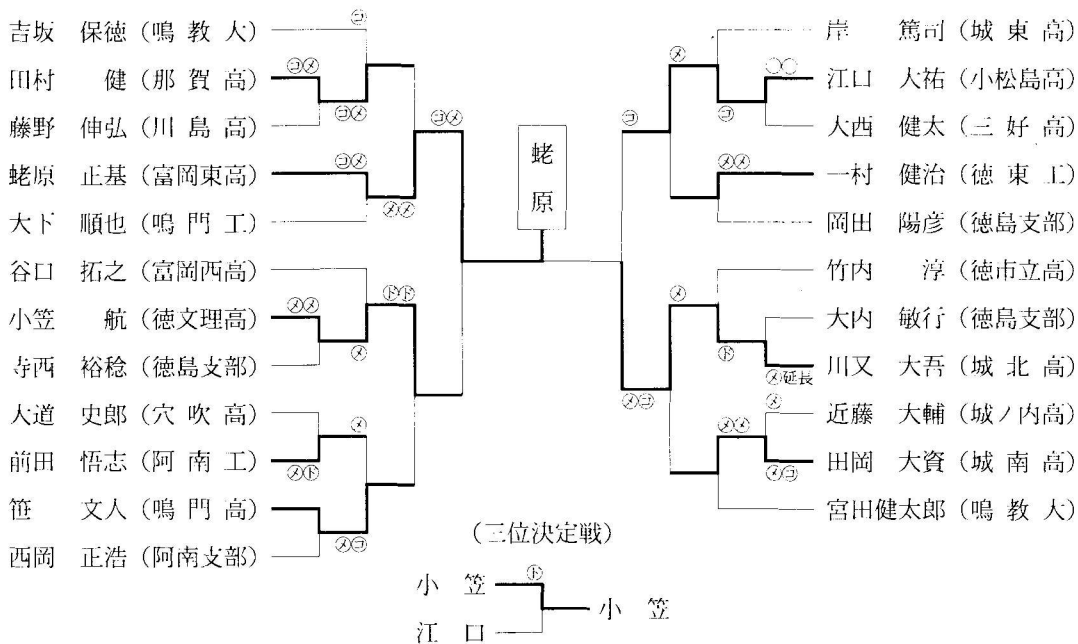
〈男子の部〉 (初段の部)

優勝 大前 智仁 (富岡東高)
準優勝 多川 大智 (富岡西高)
第三位 岩尾 将彦 (阿南支部)



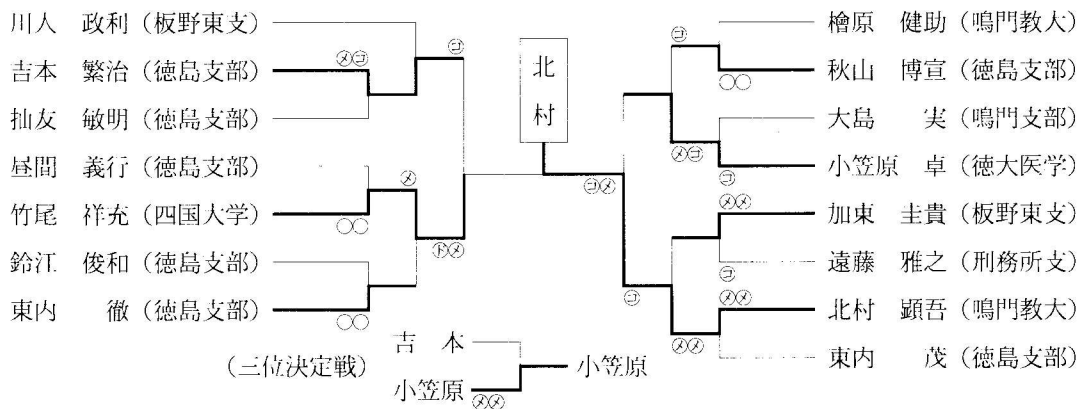
(2段の部)

優勝 蛭原 正基 (富岡東高)
準優勝 川又 大吾 (城北高)
第三位 小笠 航 (徳文理高)



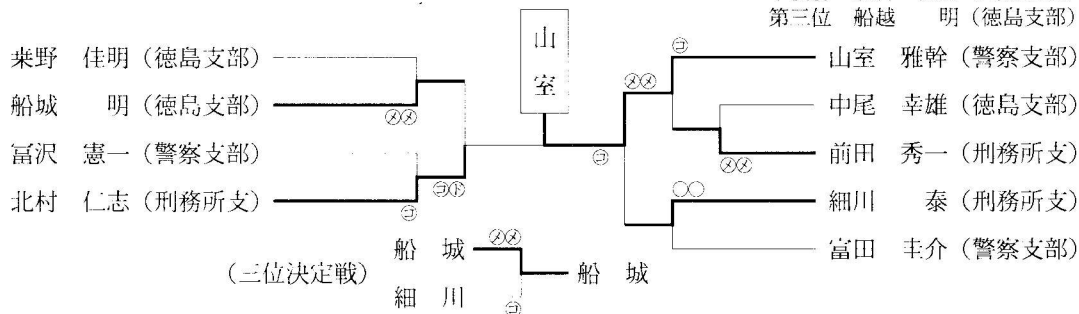
(3 段 の 部)

優 勝 北村 顕吾 (鳴門教大)
 準優勝 竹尾 祥充 (四国大学)
 第三位 小笠原 卓 (徳大医学)



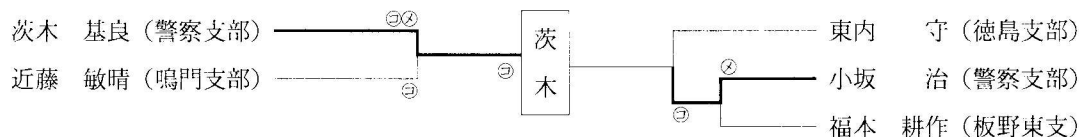
(4 段 の 部)

優 勝 山室 雅幹 (警察支部)
 準優勝 北村 仁志 (刑務所支)
 第三位 船越 明 (徳島支部)



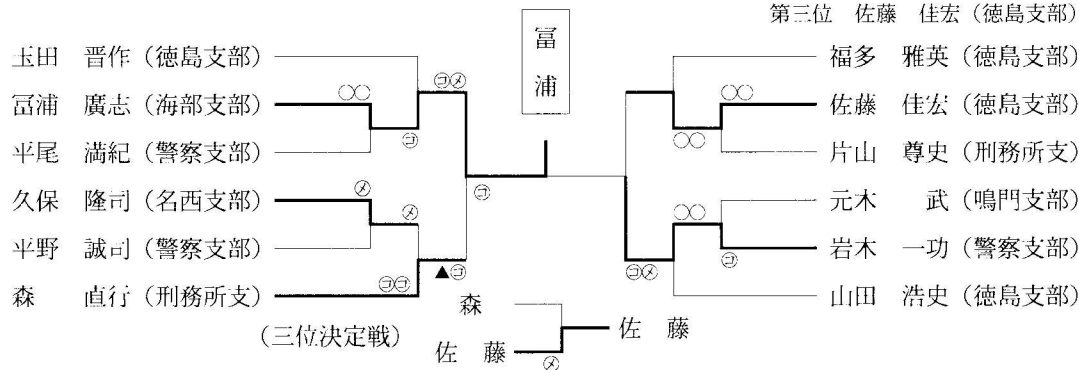
(5 段 の 部)

優 勝 茨木 基良 (警察支部)
 準優勝 小坂 治 (警察支部)



(6 段 の 部)

優 勝 富浦 廣志 (海部支部)
 準優勝 岩木 一功 (警察支部)
 第三位 佐藤 佳宏 (徳島支部)

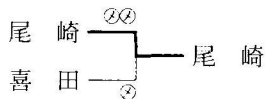


〈女子の部〉
 (初段の部)

優勝 伊藤奈津子 (富岡東高)
 準優勝 栗本美香 (富岡東高)
 第三位 尾崎志穂 (富岡西高)

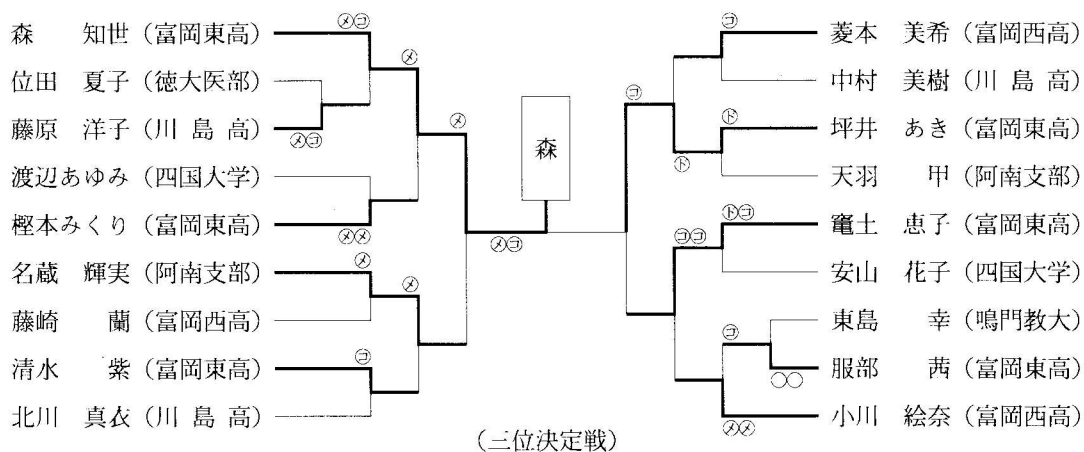


(三位決定戦)



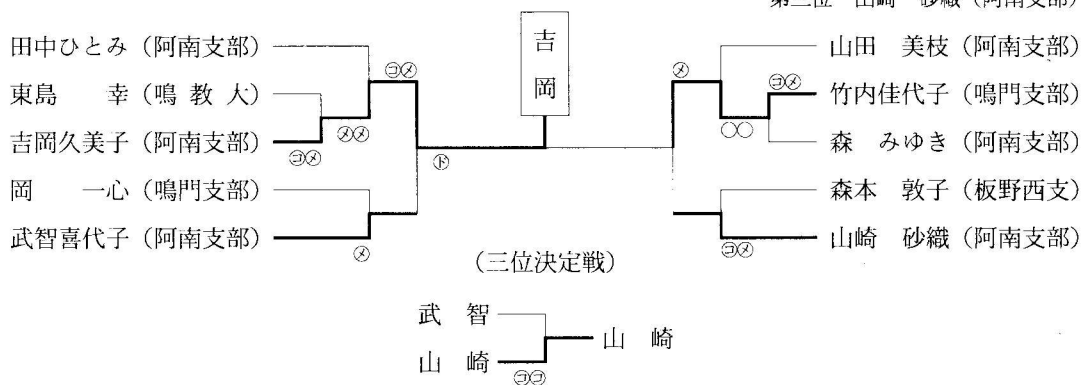
(2 段 の 部)

優 勝 森 知世 (富岡東高)
 準優勝 坪井 あき (富岡東高)
 第三位 竈土 恵子 (富岡東高)



(3 段 以 上 の 部)

優 勝 吉岡久美子 (阿南支部)
 準優勝 竹内佳代子 (鳴門支部)
 第三位 山崎 砂織 (阿南支部)



第 26 回 徳島県社会人剣道大会

平成 9 年 10 月 19 日
鳴門 武道 館

<予選リーグ>

A					B					C														
	阿南支部 A	阿波支部 C	徳島支部 B	板野西支部 A	勝者数	勝者数	勝者数	順位		小松島支部 B	木頭錬心館	美馬西支部 B	勝者数	勝者数	勝者数	順位		海部支部錬	鳴門支部 A	徳大 O B 龍	勝者数	勝者数	勝者数	順位
阿南支部 A	△	△(4)	△(4)	△(5)	3	13	24	1	小松島支部 B	△(4)	△(5)	1	3	8	2	海部支部錬	△(2)	△(0)	0	2	5	3		
阿波支部 C	△(4)	△	△(3)	△(4)	2	8	13	2	木頭錬心館	△(5)	△(4)	2	9	16	1	鳴門支部 A	△(5)	△(1)	1	4	7	2		
徳島支部 B	△(4)	△(3)	△	△(4)	0	2	5	4	美馬西支部 B	△(4)	△(4)	0	2	5	3	徳大 O B 龍	△(5)	△(2)	2	6	9	1		
板野西支部 A	△(5)	△(4)	△(4)	△	1	4	12	3																

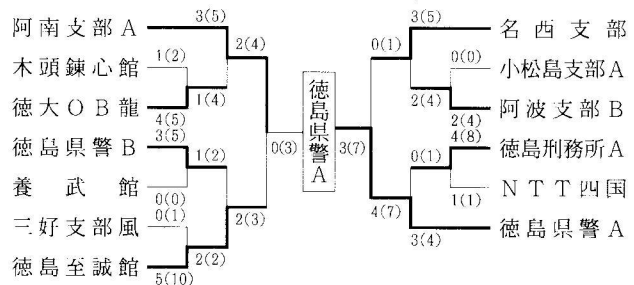
D					E					F													
	徳島県警 B	徳島刑務所 B	美馬東支部 A	勝者数	勝者数	勝者数	順位		右武館	阿波支部 A	養武館	勝者数	勝者数	勝者数	順位		板野東支部	三好支部風	徳島錬心館	勝者数	勝者数	勝者数	順位
徳島県警 B	△	△(4)	△(4)	2	8	14	1	右武館	△(0)	△(0)	0	0	1	3	板野東支部	△(6)	△(3)	1	5	9	2		
徳島刑務所 B	△(4)	△	△(4)	1	4	7	2	阿波支部 A	△(8)	△(0)	1	5	9	2	三好支部風	△(2)	△(4)	1	6	6	1		
美馬東支部 A	△(4)	△(4)	△	0	1	2	3	養武館	△(4)	△(2)	2	6	11	1	徳島錬心館	△(3)	△(1)	1	4	6	3		

G					H					I													
	徳島至誠館	徳島支部 A	振武館	勝者数	勝者数	勝者数	順位		徳島県警 A	小松島航空隊	阿波支部 D	勝者数	勝者数	勝者数	順位		N T T 四国	美馬東支部 B	阿南支部 B	勝者数	勝者数	勝者数	順位
徳島至誠館	△	△(2)	△(3)	2	5	10	1	徳島県警 A	△(4)	△(3)	2	7	11	1	N T T 四国	△(2)	△(3)	2	4	9	1		
徳島支部 A	△(2)	△	△(1)	0	1	2	3	小松島航空隊	△(3)	△(3)	1	4	7	2	美馬東支部 B	△(1)	△(0)	0	1	2	3		
振武館	△(3)	△(1)	△	1	4	6	2	阿波支部 D	△(3)	△(3)	0	3	4	3	阿南支部 B	△(0)	△(4)	1	4	10	2		

J					K					L													
	美馬西支部 A	海部支部鍛	徳島刑務所 A	勝者数	勝者数	勝者数	順位		阿波支部 B	徳島支部 C	阿南支部 C	勝者数	勝者数	勝者数	順位		美馬東支部 C	小松島支部 A	徳大 O B 虎	勝者数	勝者数	勝者数	順位
美馬西支部 A	△	△(1)	△(0)	0	1	5	3	阿波支部 B	△(2)	△(1)	2	6	11	1	美馬東支部 C	△(1)	△(2)	0	3	7	3		
海部支部鍛	△(1)	△	△(0)	1	4	7	2	徳島支部 C	△(1)	△(0)	0	1	3	3	小松島支部 A	△(2)	△(2)	2	6	7	1		
徳島刑務所 A	△(0)	△(0)	△	2	7	13	1	阿南支部 C	△(1)	△(5)	1	6	12	2	徳大 O B 虎	△(3)	△(1)	1	4	6	2		

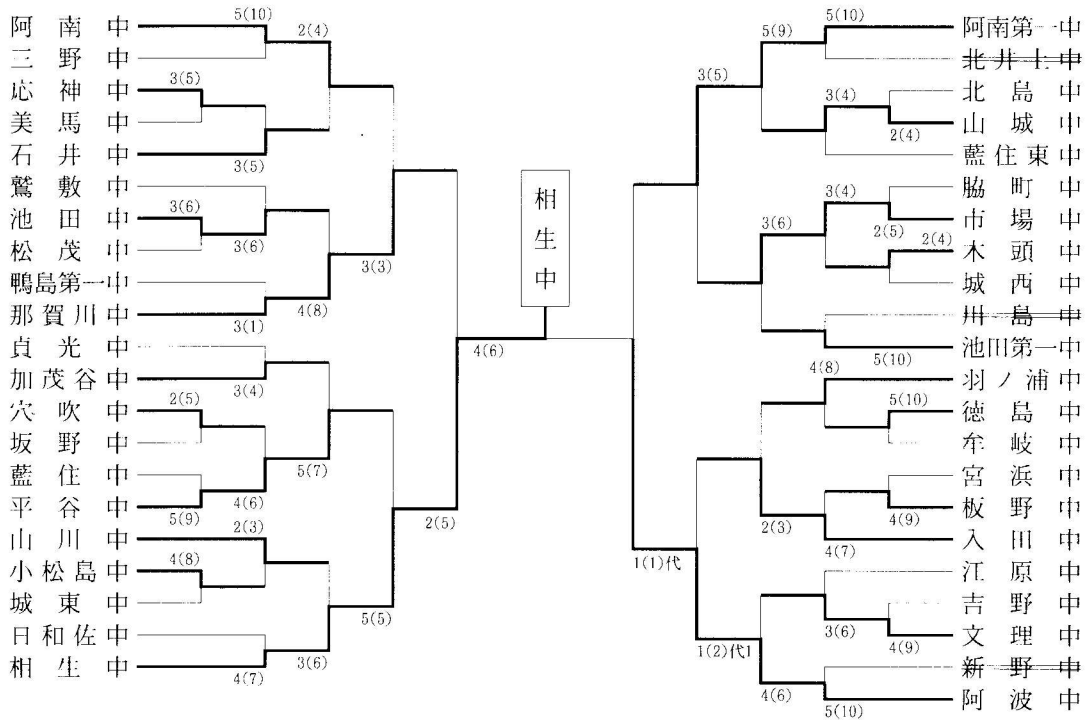
M								
	名西支部	鳴門支部 B	三好支部林	板野西支部 B	勝者数	勝者数	勝者数	順位
名西支部	△	△(4)	△(5)	△(3)	3	11	20	1
鳴門支部 B	△(4)	△	△(5)	△(3)	2	9	18	2
三好支部林	△(5)	△(5)	△	0	0	0	0	4
板野西支部 B	△(3)	△(3)	△(3)	△	1	6	12	3

<決勝トーナメント>



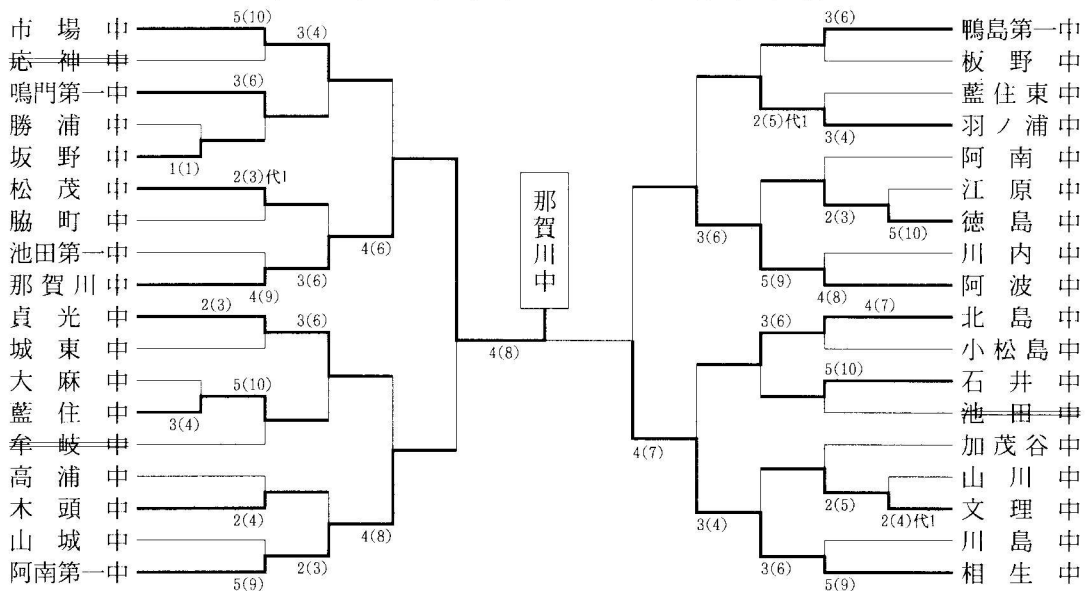
〈中学校男子の部〉

優勝 相生中学校 第三位 那賀川中学校
準優勝 阿波中学校 阿南第一中学校



〈中学校女子の部〉

優勝 那賀川中学校 第三位 阿南第一中学校
準優勝 相生中学校 阿波中学校



福本君(中学男子)に栄冠

北島ライオンズスク少年剣道 女子は松下さん

第七回北島ライオンズスク少年剣道錬成大会が一日、板野郡北島町の北島中学校であり、小、中学生二百二十四人の剣士が練習の成果を披露した。

【小学生】団体①北島少年剣道教室②誠武館▽個人三年①木内康寛(北島)②佐藤直樹(応神)③山内陽司(藍住)吉岡万里子(板野)▽四年①中山耕兵(北島)②川村昌史(藍住)③

森踊子(板野)小林智紀(板野)▽五年①川口雄大②船越俊弘(以上北島)③兼高俊介(松茂)三好啓介(藍住)▽六年①北浦優介(北島)②佐藤美帆(応神)③井上雄介(北島)中村千秋(誠武館)

内良樹(北島少年ク)▽女子①松下優子(藍住)②庄司由美③江富澄(以上北島)亀島舞(松茂)
◆鳴門市戦没者奉納剣道大会(市光武館)
【小学一、二年の部】①山本敬太(光武館)②糺健太(運動公園)③麩谷忠信(光武館)【同三、四年の部】①小島拓也②林勇作③山本義征(以上光武館)藤原政良(運動公園)【同五、六年の部】①寺西由佳

②山本義裕(以上光武館)③藤本陽子(大麻錬成館)笠井友加(光武館)【中学生男子の部】①澤田拓哉②尾崎太一③森田一成③是恒寛(以上鳴門第一中)【同女子の部】①矢野裕美子②山内みゆき③佐野裕子③豊島垂矢(以上鳴門第一中)
◆県防犯少年剣道大会徳島北署予選会(北島北小体育館、北島町武道館)
【小学生】①北浦優介(北島南小6年)川口雄大(板東小5年)②白井陽祐③井上雄介(以上北島北小6年)【中学生】①佐藤英夫(川内中2年)②福本泰志(松茂中2年)③木内良樹(北島中1年)

通る四国高校選手権

前期2競技の展望

〈中〉

◇剣道(14、15日)愛媛 四国、2位の木村(阿南)知がリド。徳島県で
 県(徳島)団は男子が富
 岡(徳島)内、富岡東川
 岡(徳島)内、富岡東川
 岡(徳島)内、富岡東川
 岡(徳島)内、富岡東川
 岡(徳島)内、富岡東川

4連覇狙う富岡東

卓球 市立、王座奪回成るか

女子は富岡東が4連覇に
 照響を合す。昨年のシ
 パリが現る高知(高知)が
 ライバルとみられるが、河
 田(高知)とみられるが、河
 田(高知)とみられるが、河
 田(高知)とみられるが、河

男子は富岡東が4連覇に
 照響を合す。昨年のシ
 パリが現る高知(高知)が
 ライバルとみられるが、河
 田(高知)とみられるが、河
 田(高知)とみられるが、河

中国入選者が有力。卓球
 速攻や岡本の3点シ
 ンターハイアウト場
 合、男子は富岡東が
 4連覇を狙う。女子は
 富岡東が4連覇を狙う。



富岡東市立卓球部が、4連覇を達成した。写真左から、市立卓球部監督の山本、選手たち、そして関係者たち。

富岡東市立卓球部が、4連覇を達成した。写真左から、市立卓球部監督の山本、選手たち、そして関係者たち。

富岡東市立卓球部が、4連覇を達成した。写真左から、市立卓球部監督の山本、選手たち、そして関係者たち。

富岡東市立卓球部が、4連覇を達成した。写真左から、市立卓球部監督の山本、選手たち、そして関係者たち。

あわいスポーツ

奥浦君(基本試合部)に栄冠

徳島西郵便局長杯 豆剣士ら熱戦

第一回徳島西郵便局長杯ジュニア剣道大会(同郵便局主催)が十五日、徳島市国府町の国府中学校体育館で開かれた。市内から約百二十人の少年少女剣士が出場し、熱戦を繰り広げた。昼食後のアトラクション試合では親子対決や兄弟対決などがあり、館内に歓声が響いた。

【基本試合部】①奥浦克典(清風館)②森出大介③松浦香里(以上入田錬成会)④細井俊彦(上八万宅宮剣道倶楽部)【小学生低学年の部】①岡田泰造②鈴木達也③東優希(以上清風館)④加重裕之(北井上剣道教室)【小学生四年の部】①井口あすか②清水桃代③近藤雅規(以上入田錬成会)④久保智司(清風館)【小学生五、六年女子の部】①森由伊(入田錬成会)②久保雅美(清風館)③舟岡咲野(上八万宅宮剣

熱戦が繰り広げられた第一回徳島西郵便局長杯ジュニア剣道大会。徳島市国府町の国府中学校体育館



道倶楽部)大栗里恵子(入田錬成会)【小学生五、六年男子の部】①笠井昌之(北井上剣道教室)②坂東真伍(入田錬成会)③増田雄太、竹丸翔(以上上八万宅宮剣道倶楽部)【中学生女子の部】①拙友由佳②長田亜希美(以上上八万中)③林舞子、富永由香里(以上国府中)【中学校男子の部】①岩見親佑②近藤真也③石井孝佳、板東悟(以上入田中)【アトラクションの部】特別賞 入田錬成会、清風館

徳島、群馬破り初戦突破

男子

剣道

【成年男子】1回戦
岸和田市
徳島 3-2 群馬 馬

林④ 一ノ宮 尾③
○山田⑤ メー 竹内⑤
○三浦⑥ メー 手塚⑥
徳島は落選。

銃剣道

東大阪市

【成年】決勝

なぎなた 豊中市

【成年】試合決勝

大阪は8年ぶり2度目の優勝。

フェンシング

河南町

【成年男子】エペ決勝

【成年女子】エペ決勝

京都は通算4度目、成年男子では2年連続3度目の優勝。

剣道

【成年男子】2回戦
岸和田市
徳島 3-1 徳島

大 阪 3-1 徳島
佐藤④ メーメ川 添③
○石田洋⑥ コメメ 平野⑥
○石田利⑦ コメメ 福多⑥
○石田健⑧ メー 西谷⑦
○島野⑨ メーメ 柏原⑦
(徳島は落選)

▽同決勝

大阪は通算6度目、成年男子では15年ぶり3度目の優勝。

【成年女子】決勝

兵庫は初優勝。

優秀選手に 県警の近藤

全日本東西対抗剣道

剣道の全日本東西対抗大会がこのほど、山梨県小瀬武道館で開かれ、男子は西軍が18-17で東軍を制し、通算成績を26勝16敗1分けとした。徳島県からは近藤巨(県警、写真)が西軍男子



にエントリーし、二十四将戦で東軍の西川(東京)と対戦。近藤はメソンの二本勝ちで西軍の勝利に貢献し、優秀選手賞(男子4人)に選ばれた。

平成9年度総会議事録要旨

と き 平成10年3月8日(日) 13:00~17:20
ところ 建設センター
出席者84名 欠席者26名(委任状)

会長挨拶

1) 各専門部から結果報告

- ・事業部(大石副理事長) ・強化部(平野理事)
- ・少年部(松村理事) ・女子部(手塚理事)
- ・居合道部(原田理事) ・広報部(木原理事)
- ・審査部(中村理事) ・中体連(村井理事)
- ・高体連(河田理事) ・剣道史の編纂(坂本理事)

(別紙及び口頭にて)

2) 平成9年度決算報告(森川理事)

(別紙参照) → 承認

3) 平成10年度行事計画(藤本事務局長)

(別紙参照)

平成11年1月24日(日)開催予定の、第19回小中剣道錬成大会については四国放送の援助打ち切りに伴い、小中合同開催か否か、後日関係者で相談するものとする。→ 承認

4) 平成10年度予算(森川理事)

- ・昇級審査登録料の値上げについて(藤本事務局長)

(別紙参照)

→ 現行どおりで承認

5) 審議委員会からの提案事項

(1) 範士推薦について

→ 平岡竹雄先生、西野四郎先生

(2) 全日本剣道連盟有功賞推薦について

→ 石井克太郎先生

(3) 日本剣道形技術向上方策について〈1級審査に日本剣道形1本目、2本目を取り入れてはどうか〉

→ 現行どおりで承認

今年度からは審査当日の形の指導は行わない。

(4) 審判技術向上方策について〈審判副主任をおき、審判主任は専ら審判技術指導を行うこととすればどうか〉

→ 承認

(5) 学科試験3問については審査毎に問題を作成し、支部長、中体連、高体連に送付し、受審者は自らそれぞれの機関へ問い合わせることを原則とする。

→ 承認

尚このことを『徳島の剣道』に記載しておく。

(6) 冬季小、中剣道錬成大会は従来どおり小学生、中学生合同で行う。

→ 上記3) 参照

(7) 四、五段講習会は中央武道館で行う。

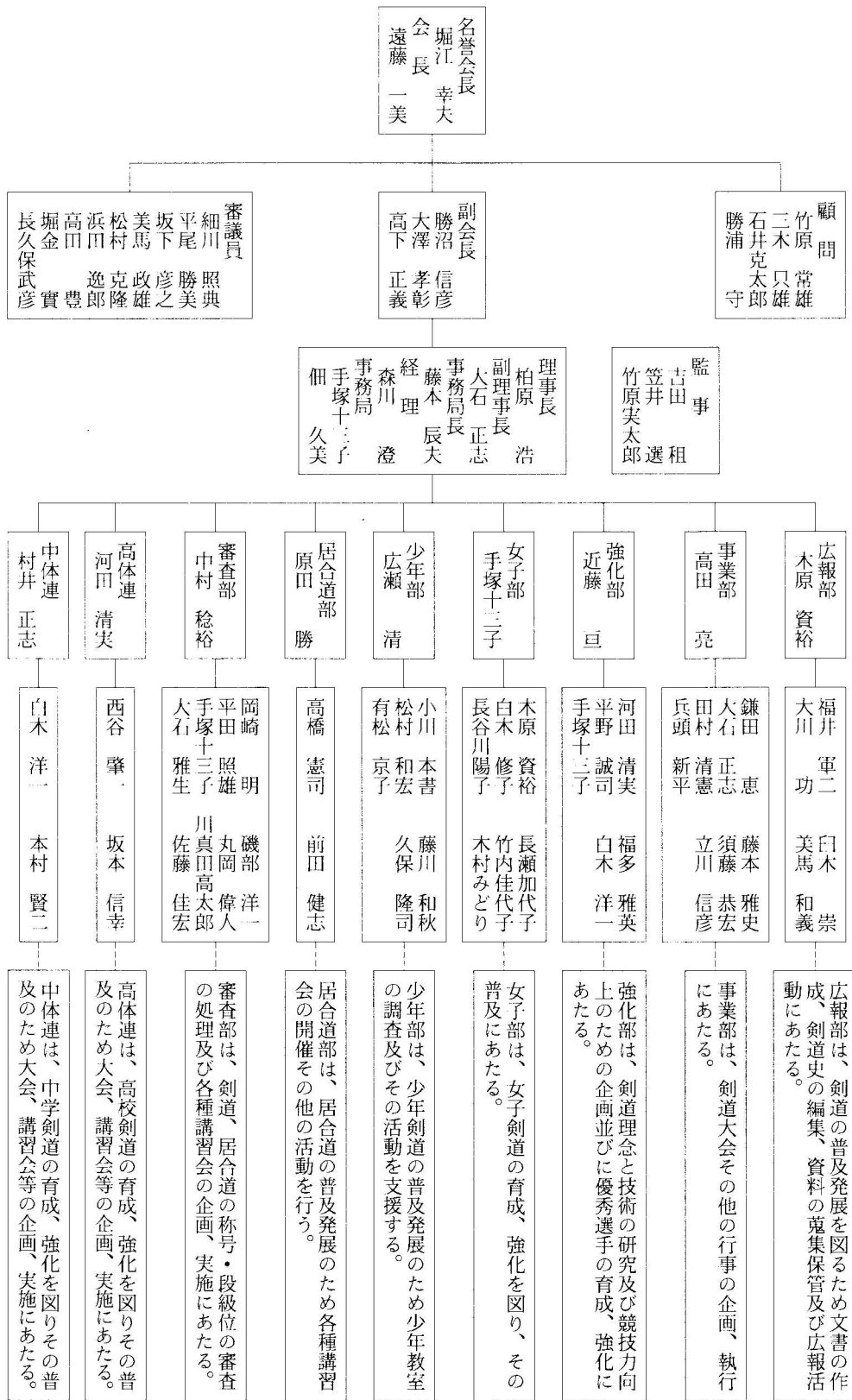
→ 承認

6) その他

- ・平成10年度京都大会及び審査について
- ・宿舎三福寺の予約について(5月2日~7日)
申し込みは剣連事務局まで、早目に。

(別紙参照)

徳島県剣道連盟事務分掌表 (平成十年四月一日現在)



編集後記

いつものことですが、もっと早く編集作業を終わらさねば、と反省しつつ、編集後記を書き始めていきます。何か忙しいと言いつけて、今日やるべきことを明日へ明日へと延ばしてきたように思います。

格言に「今日という日を捕まえよ。いま、始めよ。毎日毎日が新しい生活なのだ。その生活を捕らえて生きよ。今日という日に、すでに明日への歩みがあるからだ」とあります。「忙しい」という字は「心」が「亡くなる」と読めます。心が亡くなつては、今日を捕まえられません。「忙しい」と自分自身に言い訳をしないことを、次号への大きな改善点したいと思います。

今回より表紙をカラーにし、印刷も三屋堂印刷所へお願いすることとなりました。さらなる『徳島の剣道』の充実のため、さらなる御支援・御協力をお願いします。

『徳島の剣道』第十四号

編集委員会

編集顧問

堀江幸夫	柏原浩	木原資裕	福井軍二	中村稔裕	大川功	臼木崇	美馬和義
------	-----	------	------	------	-----	-----	------

『徳島の剣道』第十四号

平成10年4月25日発行

編集・発行 徳島県剣道連盟

代表者 遠藤一美

☎772-0853 徳島市中徳島町2丁目96

TEL 0886-52-2337

FAX 0886-52-2360

印刷 (有)三屋堂印刷所

☎772-0001 鳴門市撫養町黒崎字松島

TEL 0886-85-3343

FAX 0886-85-4575